

WIFE

女の言いたい放題誌 ●

183

短期連載 ② ロックよ静かに流れよ 吉岡紗千子

連載 ④ 近代恋愛婚姻史 宮城道子

海外事情 ● 私の見たイタリア 矢島みゆき

レポート ● 次点で落選！三票差 古川雅子

ボイス ● 今、歌わなければ 西村香那子

ピープル ● ぼくたちの出番がやってきた 有馬純夫

言いたい放題 ● 投稿ホットライン 読者

逐次刊行物

定価 588円

創刊号 183

大月書店

東京文京本郷2-11
電話 03 (813) 4651

▼瀬戸内晴美▼帯刀貞代▼羽仁説子▼樋口恵子▼村田静子
すいせん▼石井あや子▼小山内美江子▼落合恵子▼金森トシ
工▼紀平悦子▼子安美知子▼澤地久枝▼寿岳章子▼住井すゑ
命▼④むしろ性を礼拝せよ▼⑤婦人戦線に参加して▼⑥娘に
母の遺産を語る▼⑦私は永遠に失望しない (隔月10日刊)
続刊 ②母性の主張について▼③社会改造に対する婦人の使

第1巻 青 鞆

せいとう

第1回配本

らいてうの思想の原点、『青鞆』時代の著作のほとんどを収録。

生涯を女性解放と民主主義、平和のためにささげた、八五年の思想の発展過程、主張などを時代の流れのなかでとらえる。46判函入・各3000円



平塚らいてう 著作集 全7巻

刊行開始

元始、女性は実に太陽であつた。



株式会社 ミネルヴァ書房

〒607 京都市山科区日園堤谷町1

☎(075) 581-5191 振替京都 8076

女が老後を迎えるとき

鳥田とみ子・その福祉と生活設計 45歳、そろそろ老後のことを考えたあなたに……。心豊かで素晴らしい老後をおくるにはどんな準備が必要か。女の老後の現実を明らかにしながら老後を楽しむ暮らしの知恵と生活設計のあり方をしめす。 OP 叢書406 一・二〇〇円 千250

寝たきりにならないために
二瓶万代子・老後を考える 老人問題にかかわり老後へ目を向けてから30年。小金井老後問題研究会代表の著者が豊富な体験を通して老後や家族・友などのあり方について考え、地域福祉を根本から見直し、老後を生きる勇氣を与える貴重な実践。 OP 叢書404 一・二〇〇円 千250

OP 叢書*あなたの老後を考えるシリーズ
現場での実践から
輝やけ 老人ホーム
橋本正明・立川・至誠ホーム園長が老人福祉ニードの大きく転換するいま、老人ホームのあり方を見直し、専門施設としてのホーム再生の新しい道をさぐる。老人問題を真摯に考えるすべての人における具体的提言による心からの老人ホーム讃歌。 OP 叢書404 一・二〇〇円 千250

いいたい放題 したい放題

書きたい放題

よみたい放題の

投稿誌がわいふです

人間 ほんとにやりたいことは

やれるもの

ウジウジ・メソメソしたい人も

思いつきりやれば気がはれる

WIFE

183号

いろんな人のいろんな時の

いろんな心を材料にして

二カ月に二回わいふが

出来あがるのです

仕上げに、適量の「ユーモア」と

「思いやり」のスパイスを！

ピリつとくるか まろやかになるか

それはあなたの「うで」で「しだい」！

WIFE・183

わいふ目次

表紙イラスト 小沢恵子
レイアウト 岡島三紀子

投稿規定

4

女の道楽 清水博子・日下恵子 6★

職場は多面体

真崎恵子・柴田知子・金子泰子・北川洋子 9★

マスコミむしつちやえ 13★

亀山和枝・岩田和子

マンウオツチング 戸田真佐子 20★

親のホンネ 赤井久美子 24★

男性専科 S・S 26★

少年非行は日教組の

せいではない! 風間ゆり 72

私の見たイタリア 矢島みゆき 77

WIFE・短期連載

ロックよ静かに流れよ 82

吉岡紗千子

WIFE・ボイス

今、歌わなければ 西村香那子 94

うちの悪ガキ 97★

野本美希子・志村もと子・飯島まつの・久保安子 97

私の離婚 木下幸子 103★

オットどっこい 老沼とし枝 110★

ナウイ熟年 Y・S 28★

遊びましょ 大兼孝子 29★

私の同棲相手 丸本百合子・功彦 30

写真・文 野村路子

WIFE・連載

近代恋愛婚姻史 32

絵 西田淑子 文 宮城道子

ファミリー・イン・ブルー 48★

山田志津代・匿名・太田千代・中川秀子

WIFE・レポート

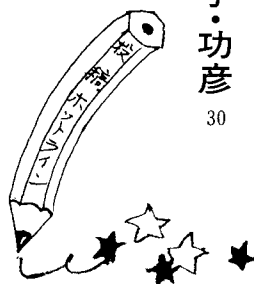
次点で落選ノ三票差 古川雅子 54

国立市議選レポート

マンガ笑止・笑止 栗田笑 96

エッセイスト・クラブ 66★

高宮みか・渡辺コト



わいわいがやがや 111★

黒田美奈子・赤松羊子・木村道子・佐上悠子
山本雅美・岩崎八恵・桜井淳子

生きてます活字人間 119★

丸山友岐子・森川一郎

WIFE・ガイドブック

子連れ遊びのガイド 石沢由美子 122

WIFE・ビブル

ぼくたちの出番がやってきた 126

有馬純夫

対話のページ 128★

会田智恵子・西内康子・渡辺順子・春名春美
西田淑子・小宅昌枝・柴さく

観たり聴いたり 136★

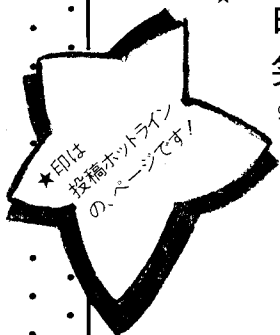
和田好子・松本弘子・安藤悦子

サークルだより 140

情報コーナー 編集だより 144

イラスト・カット

岡田正子 早乙女光子 松本をきえ 松本圭以子



わいふ・投稿規定

書くもヨシ
書かぬもヨシヨシ

ドンドンドン書いて！

ドンドンドン送って！

●定期購読者はどなたでも投稿できます。
誌上匿名は可。ただし原稿には住所氏名
を明記すること（無記名のものは受付
けません）

●次のコラムへご投稿ー期待！

- ・うちのワルガキ 子どもとその周辺の
話題について、どんなことでも。
- ・オットどっこい 夫について、ノロケ、
珍談、不満、ケンカ、何でも。
- ・ナウイ熟年 今どきの若い者へ、一言
いいたい方のためのシルバースhirt。

若い方がそれを読んで、文句言いたい
場合もどうぞ。

- ・ファミリー・イン・ブルー 家庭内、
親戚づきあいなどのトラブルをうった
えて、ストレスの解消を。

- ・マン・ウォッチング 家庭で、職場で、
PTAで、その他どこでも、あなたの
観察したヒト科男属の生態を。あなた
との大人の関係でもけっこう。

- ・仕事場から あなたの職場レポート。
フルタイムはもとより、パートでも内
職でも、切実な体験や悩みなど、ぜひ
寄せて下さい。

- ・親のホンネ 親、ことに母親はどつら
いものはない。子育ての全責任者、何

でも母親のせいだと言われ……でもこ
っちにも言いたいことがありますよ。学
校へ、世間へ、肉親へ。母親だってニ
ンゲンだ。言いたいこと言おう。

- ・マスコミむしっちゃえ 新聞、雑誌、
テレビ。ずいぶんどうかと思うこと、
腹の立つこと、被害を受けたこと……
いろいろあるんじゃないですか。遠慮
ない告発を！ 強いマスコミに弱いミ
ニコミからなぐり込みかけよう。

- ・マジの発言 まじめは「わいふ」の本
領なんですわねー。あなたの主張や切実
な体験を、ただしくれぐれも面白く。
・対話のページ 本誌の投稿や記事につ
いての感想、反論など。

どきどきドキドキ

・女の道案 あなたがやってるホビーについて。

・観たり聴いたり 映画、演劇、音楽会、展覧会などの感想を。

・生きてます活字人間 読んだものについて。

・遊びましょ こんなところ行ってみた、こんな遊びしてみたなど、楽しかった話を。費用も忘れずにね。

・わいわいガヤガヤ どこにも当てはまらないものを押しこむスペース。

●以上いずれも八百字まで。オーバーしてもよいですが、掲載されるチャンスは少なくなります。締切り偶数月二十五日

×

●エッセイスト・クラブ ずいひつのよさをたっぷり味わせてくれるよい文章を。千六百字まで。

●持ちこみ原稿、詩、小説、評論、旅行記、ルポルタージュ、どんなジャンルのものでも。二十枚—三十枚程度。長篇なら連載も可。

掲載分には薄謝を贈呈します。締切日はとくにもうけません。

×

●投稿規定以内の枚数のものについては、ほとんど掲載されますが、原則として一応は編集部で選択します。

●「わいふ」の特色は、完全な言論の自由を守ることにあります。思想信条を問わず、すべての女たちに自分の考えを発表する場を確保することが、「わいふ」の希望です。どうかこの場をフルに利用して下さい。

●「わいふ」からこれまで数人のライターが巣立っています。文章を書くことをしごとにしたいと思っていらいっしやる方に、「わいふ」は絶好のトレーニングの場となります。あなたもぜひ、参加して下さい。

●投稿は多少添削することがありますのでご承知下さい。

●短い投稿はハガキでもけっこうです。友だちとおしゃべりする気分が楽しめます。

投稿して下さい。

●あなたの周囲に、すばらしい仕事をしている方、特殊な体験をお持ちの方、ユニークな生活をしている方——はありますか？ そういう方をご存じでしたら、ぜひ編集部までご一報下さい。また自分自身、書きたいテーマをあたためていらっしゃる方は、編集部へ声をかけて下さいませんか。有効なアドバイスをして差上げられると思います。同人誌で自分の文章を活字にするといべ—ジあたり三千円はかかります。どうぞ「わいふ」をフルに利用して下さい。

●絵・カット・イラストなどの投稿も歓迎します。作品を送ってみて下さい。

●「わいふ」を作るのはあなたの文章、あなたの考えです。ご投稿がなければ「わいふ」は自然消滅します。社会への発言の場を、気楽なおしゃべりの場を、気がねのない議論の場を大切にしたいと思っている方は、どうぞご自分の文章で「わいふ」を支えて下さい。

おんなの道楽

女が何かをやればどれでも道楽、ウレシイ！

「女性学」で五十の手習い

東京都杉並区 清水博子 52歳

「五十の手習い」なんていう言葉があるかどうか。二児を成人させ、一応バート勤めや再就職の後、私がたどりつき目下これこそ私の生き甲斐と夢中なのは何と「女性学」。

恋に恋し大学時代の友人と平凡に結婚、高度経済成長期に消費者として大いに協力しながら良妻賢母道をまっしぐらの二十数年。知人に誘われオットメに出るとき夫はおきまりの言葉をのたもつたもの

だった。「今までどおり家の中をきちんとするなら働いてよらしい」

専業主婦時代のアルバイトのキャリアを生かしての団体機関紙編集欠員の助っ人。低賃金ながらまわりに助けられなるとかこなししたが、子供たちが一人前になると身も心も疲れ果て、六年間でついにダウンし、またもとの主婦に逆もどり。「なぜ私は仕事を続けられなかったのか」この思いが私を主婦論へ傾かせた丁度

そのころ、世は国際婦人年とそれに続く差別撤廃運動に遇れている真っ最中。勉強する気になれば区でも都でも学習会や講座は花盛りでした。今は、お金をかけなくても、専門家諸先生方のポイントをついたお話や、体系だった論議・同じ主婦仲間のホNNの話し合いなど、学習の機会の多い幸運な時代ともいえます。

八十一年東京都婦人情報センター公開講座で、主婦の成り立ちや現在の地位の分析、諸外国の実情から将来の展望など手ほどきを受けたあとは、もう止まらない思いで学習グループ作りに参加、おそい目覚めだったが、目からウロコのおちる思いで女性解放運動史をひもとき始めたのだった。ちょっと首をつっこんだら勉強したいことが次から次へと拡がり、社会学古典から現代リブ運動、職業と家庭両立を掘り下げれば家族そのもののへの疑問など、際限なく勉強したくなってきました。日本中どっぶり漬かっている、男は社会、女は家庭、の性別分業の続く

限り、男も女もそして子供も、人間らしい幸せな生き方ができないと思いつつ。ちよつと“きざ”な私の道楽を披露しました。

コワイから楽しいバイク！

神奈川県横浜市 日下恵子

男の大きな背中中は頼もしい。でも男の後から離れ、女もマシンを操ってみませんか？

価値観を変え、生き方を左右するマシン。好きな時に好きなところへ走っていきける。

二輪車だから、停止中も体で支えなければ倒れてしまう。そして車のような小さな個室ではない、肉体は外気にさらされ転倒するとモロに傷つく。すり傷、打撲、骨折はつきもの、常に美しくありた

い女性にはやや抵抗があるだろう。

しかし青空の下、太陽の日差しを体いっぱい浴びて道なき道を突っ走るのは爽快だ。

モトクロスは補装された道路、公道を走るのは違う。砂利があり、水たまりがあり、あらゆるギャップを飛び越える、マシンをちゃんと整備し、完全防備をしていてもアクシデントの連続である。



毎週日曜日、私は相模川の河原のサーキット場へ行く、そこにはトランスポーターにマシンを積みこんだライダーが集まってくる。

ファミリーもいれば、高校生も来る、みんなエンジン全開でサーキットを走りまわっている。

時にはジャンプや激しいコーナリングで転倒し、そのまま病院に運ばれる人もいる。

高校生たちは、暴走族とは無縁の健康的な若者ばかりだ。しかし何よりもあのスピード感覚が好きでたまらない若者であることは確かだ。

バイクの免許を取ると退学、という学校に通っているひとりの少年は、母親の運転するバンにバイクを積んでサーキットにやってくる。小学生の私の娘も80ccのバイクに乗る。そんな中で、今のところ初心者の私、中年ライダー。

バイクはとても怖い、恐いから楽しい。手ごたえのある生き方が好きな私だから。



投稿ホットライン——能ある鷹は爪をかくす

職場は多面体

愛すべき職場。労働の報酬——その魅力にひかれ、抱える問題は？死角の部分に何かがあるか？

昼休みにペンをとる

神奈川県厚木市 真崎恵子

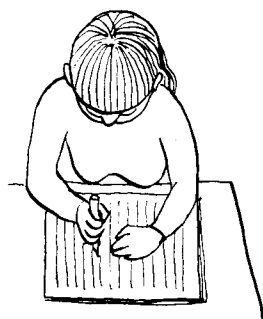
一八二号の「家においてできる仕事」への投稿、心底感心致しました。私も保育所児を持つ身ですが、仕事は朝九時から夕方四時まで、車で往復一時間です。しかし、配偶者の父親がやっている電気工事会社ですので、何よりも子供における様々な問題は片端から解決されます。例えば、個人面接、親子遠足、運動会、誕生会など……。母親である私が、仕

事との板挟みとなって切ない思いを抱くという事はまずありません。結局、子供の事は社長にとって孫であり、上役（専務＝配偶者）にとっては子供の事なので、最優先されるのです。

私の経済的な事を申しますと、手取りで月十二、三万というところでしょいか。何よりも事務ですので、「大変な労働」ではありません。わいふのこの特集記事

を読むまでは、私の立場なりの不満もありました。余りに創造性のない仕事であるとか、農家や商家へ嫁ぐ事と同じ状態なのじゃないかとか。配偶者の両親とは住まいは全く別ですし、感情的なトラブルも何もなく、むしろ週一度、義父が子供をみて、義母とスイムスクールへ通う事すらやっています。それがまた不思議なほど楽しく、自分で呆れるぐらいです。

義母は非常に女っぽく、いわゆる色気があるのです。かたや私は美容院へは行かないし、化粧は大嫌いだし、若くて（まだ五十代前半です）美しい義母と行動を共にすることは心浮き立つという感じが



のです。話がそれました。今、会社の昼休みなのです。働いている方々全ての皆

無所属、ノー肩書のさわやかさ 東京都大田区 柴田知子

かって、読売のバッグを持ちながら仕事をしていた青二才のころのことです。

作家の沢野久雄氏が彼の娘さんと同じ年の私に向かって、フリーであることの悲哀について話してくれたことがあります。

「朝日新聞社に在職のころは名刺一枚でどこでもフリーパス、ところが作家として一人立ちしてからというもの、同じ紙キレでありながら、受け取る側の応待の仕方に雲泥の差、『朝日』の二字はまさに魔法そのもの、個人としての能力、実力、人格以前のものだったことをつくづく思い知ったわけです」——と。

だから、あなたも「読売」という看板を大事にしなさいよ、という意味だったと思います。事実、彼がいうように、人生経験の浅いほんの小娘が、沢野氏その

様に心から応援したいという、そういう気持ちなのです。そして私も！

他の著名人に会って人間として対等な扱いを受けることができたのは、「読売」があったからこそ可能だったのです。沢野氏のいわんとするところがよく理解できました。けれども、心のどっかに何かしらひっかかるものがあって、素直に肯定できないまま数年間、胸の奥でくすぶり続けていたんです。

沢野氏の言葉が現実のこととして我が身に振りがかかってきたのは、読売を退職し、その後離婚、再就職の口を探し歩くというのっぴきならない事態が発生してからのことです。せめてもっと若ければ（当時三十一歳）といわれるし、せめて離婚という汚点がなく、ちゃんとしたご主人がいるのなら——というわけ。不思議なことに学歴を云々されたことはありませんでした。学歴などあるうがなかる

うが、男に比べて一段程度の低いのが女の仕事である、というキメつけからではなかったかと思います。コレ、女のひがみかな。

女性結婚することによって「△△夫人」という肩書がついて世間から信用されます。たとえ△△なる男性がサラリーを一銭も家に入らず、競馬競輪にウツツを抜かしていても、男性であるというだけで銀行ローンなどの借り出しもなんとかなる、というケースはめずらしいことではないんですね。

つい先頃離婚した友人もバレエ教室の設立資金が、女狂いのグウタラ亭主の名前がなかったばかりにオジャンになってしまいました。△△氏が公の機関か、ブランドイメージの高い企業に勤務しててもいれば、氏の人品とは関わりなく社会的信用はなおさらの効力を発揮します。

そんなわけで、抵当物件なし、所属企業、および団体、グループなし、所属男なし、学歴なし、家柄上等でなし、年齢

二十代でなし、といった無い無いづくしの女には、生きながら存在証明というものがありません。実は、沢野氏の言葉に長年ひっかかっていたのはこのことだったんです。認知される条件が揃っていないからといって、グチッたり、捨てばちになったり、無いものねだりをするよりは、いっそ認知されないことを逆手にとって生きていく方法を探ったらいいいとね。それが私の現在のあり方です。

肩書のない仕事、これが結構あるんですね。家政婦なんてのもその一つですし、第一肩書がないから職種の心理的枠を限定せずに済みます。何の仕事をして、その気になれば自己の栄養分として取り込むことができますし、問題意識も出てくるってわけです。つらいダーティーな仕事ばかりだけど、精神的にはいたって自由、いいもんですよ。

まずは肩書なしで、一人の人間としてどこまで通用するかやってみる。あるいは肩書なしでも立派に通用する何か一つ

を、自分の中に形成していくための努力をしてみたいですね。その肩書なしということ自体が、その人固有の存在の証明にならないとも限りませんし……。

やめたい、やめたい、
でもやめない

埼玉県大宮市 金子泰子

育児に疲れた時、仕事がうまくゆかない時、しょっちゅう「やめたい、やめたい」と言っている。育児と仕事のかけもちで三年間やってきたが、その思いはいつもはなれない。産休中に専業主婦の生活を味わい、働き続けるほうがよいという結論を出したはず。でも心はゆれ動いている。

そんな時に届けられた「わいふ」は、貴重な存在である。皆さんが出口を求めていかに悪戦苦闘しているかが伝わってくる。

ここで仕事をやめてしまえば、私も数年後には仕事を求めて動きまわるだろう

これこそ「寄らば大樹」の既成概念を、ほんのちよつとずつながらつき崩していく第一歩ではないかと、そんなふうに見えるんですけどどんなものでしょうか。

そしてその時には、今よりずっと条件の悪い仕事しかないことは目にみえている。我が社で産休をとったのは、私が初めてであった。初めてで良かったこと悪かったこといろいろあるが、少しずつ条件ができてきた。後に二人の人が続いた。ここで止めてしまえば、二人の足をひっぱることもなると思う。

今、「わいふ」は、私にとって働き続けるためのエネルギーとして、なくてはならない存在である。

職場のキャラクター

横浜市戸塚区 北川洋子

転居を機に職場も変えた。欧米人社員も交えて、平等・自由をうたう超進歩的（形だけは）な考え方の女性だけのグループから、男女不平等、たて組織ガッチリの旧態会社（これが普通ということだが）に移って、あれこれ比べて感じ入っている数カ月である。どちらの仲間にも拉しても差し障りがあるが、どこかに話したくて、つまり「わいふ」が選ばれちゃったという次第である。

まず就業時間。週五日制の上に三年もすれば、年間三十日位の有給休暇を時間単位でとることができた前会社から、初年度は夏休み五日の他に年休六日だけ、おまけに土曜日も第三週以外はバッチリ三時迄拘束されて、通勤に往復四時間の私、本当にやっていけるのかいなど心配したが、部長の親心を当てにすれば病院通い、家事の都合も大目に見てもらえてOK。おまけに「お茶、お茶」と退屈し

のぎにつかう代償か、女性には月一日の生理休暇がくっついて、差引きすればこちらもやはり三・四年後には三十日近い休みになる。つまりどこでも消化するしないに関わらずその位の休暇日数が妥当なのだ。結論が出たものらしいが、その結論を導き出す思考方法が全く対称的。

前者は休暇日数に限らず、労働者の権利として勝ちとった確たる成果としての労働条件なのだが、その権利はすべて強者、有能者を基準に設定されている。はじき出した弱者は社会が面倒をみるしくみのアメリカやヨーロッパなら、このやり方はたしかに清新な風を職場に送るかもしれないが、他に転職のチャンスのない日本では、だんだん皆卑屈にならざるを得ないのだ。

その点、日本式中企業の苛酷な労働条件は、驚く程の寛容と甘えて、たて前と實際をたくみにすり替える。殆ど中学程

度の学力、病欠つづきの体力でも、ごまかしとかばい合いでこんがらがって一つの組織を構成しているから、なまじその中の弱者がふるい落とされたりすると、却って安定が悪くなってしまうのである。

必然能力のあるものは抑えられて、皆、名だけはとりたいたと焦りながらも、誰が仕事をしたのか判らない様に、はんこの上にはんこを重ねて、功を上手にくすね合ってそれで結構儲かっている。エリート企業でないから、貧しい者も弱い者もどこに放り出していいか判らなければ、結局自分達でみそもくそも一緒に倒れに面打ちちゃっている。福祉法人だった前の会社では、まやかしと偽善にすぎなかった福祉の心を、皮肉にも女性差別となあなあ主義の営利会社で発見してしまったのだ。額面通りにツッパって、善良な女子同僚や小さな部長さんを困らせることに心の痛みを感じてしまう私を、このごろ少しもて余している。

（え・松本をきえ）

投稿ホットライン——楊枝で重箱の隅をほじくろっ!

マスコミむしる

寄るな大樹。陰はケガのもと。巨大メディアをはり倒そう! 女の爪はペンより強し

NHKは ポルノがお好き

大屋市南区 岩田 和子

NHKの、特に料理番組なんか見てると私よくスケベなこと想像しちゃってね、おかしくなることあるんですよー。ど

うしてかっていうとね、あの油とか調味料の容器にさ、必ずなんか紙はっちゃって商品名や社名が見えないようにしてあるでしょう、あれが私の劣情をシゲキしちゃって、どうもポルノの前バリとかスミヌリを連想させちゃうというわけです。だいたいさ、びんだのかんを見れば、ああ、あれは日清〇〇だなとか、あれは味の素△△だっけすぐわかるじゃない? なのにソノ部分だけを変にかくしたりす

るのってポルノのスミヌリと全くおんなじでしょ。だってその下がどうなってるのか、だれだってよく知ってるんだもの。知ってるにもかかわらずわざわざ黒くぬっちゃったりするもんだから、よけい何か気になって注意がそこに集中しちゃったりする。(だけどポルノ取り締まりのお役所の人にしろ、NHKの人にしろ、どうしてこう発想が似てるのかね)

つまりかくせばかくすほどそこそこの宣伝になってるんですよー。もしかしたらNHKさんは——何しろ頭のいい人が多いから——広告料くらいいいだいてるんじゃないですか、なんてまたまたかんぐったりして。いいよ、別に。その分聴取料安くなるならね。

ついでに一言いわせてもらえば、民放でコマーシャル作ってる代理店さんも、NHK方式をもーちっと研究してくれるとありがたいんだけど。そしたらCMタイムも少しは静かになるんじゃないか、と期待してるんですけど……。

これでいいのか 「母親ガンバレ」 の合唱

千葉県松戸市 亀山和枝

五月四日 読売夕刊「子どもを泣かせるな」・大人が余りにも自分中心に生き始めると、そのシワ寄せが、まぎれもなく弱い子どもに集まってくる」

五月五日 読売社説「子供にとって家族とは」・保護厚く育ち」・自分たちの楽しみを追求する親」

五月八日 朝日社説「カーネーションはなくとも」・妻が現状から半歩でも踏み出すことのほうがより効果的だと思われる。(……) 自立の母に向けて、自ら飛び立つ努力を期待したい。(……) 前途は険しいけれども、健闘を祈らずにはいられない」

五月上旬は子どもの日、母の日と続く

から、新聞はさながら母子ウィーク。右の三つの記事、ハイごもつとも、どれ一つ間違っではおりませんというやつ。(どんな鹿爪らしい記者センセイがこんな記事書くんですかねー)ときどきコチンとくる部分はあるが、全体ありきたりすぎで、ま、年中行事のたぐいと腹立てる気にもならず読んでいた。

ところが今年は違うんです。様子が。

六月に入ると「とまどうママたち」(毎日、6回)「現代の育児を叱る」(サンケイ、1415日)「育児」(朝日、1718日)と育児ものが肩をならべる。まるで、サラ金と幼児保育が片づけば、世の中丸くおさまる、という感じ。

その論調、一口で言うなら「お母さんはお家に帰りなさい。でないとコワイことになりますよ」である。

コワイことを言う人のNo.1は、なんといっても「母原病」の久徳重盛先生(朝日、意見異見・育児)。

・四年ほど前、大学にいたころは、人間の親が育てて、よくこんな子になるな、とあきれけるケースは年にせいぜい一人か二人でした。いまはそんな子が毎月一人か二人は来ますね」

久徳センセイはこの事実を、有名になったがゆえに「患者」が集まって来るのだとはお考えにならない。

「ぜんそくや熱を出しやすい子」から「家庭内暴力」まで一括りに「病根は同じ」というのだから、「七、八割の子供にも何らかの問題がある」というのもうなずける。「病根」は「親の育て方に誤りがある、子供の人間形成にひずみが出た結果」と、これまた明快である。その「誤り」とは何か。

・文明が進むと、一般に子育てが下手になって、子供を育てることを嫌う親がふえるのです」

そしてゼロ歳児保育は「育児の放棄現象を手助け」するものと決めつける。

・一つ事が起こっても、行政も学校も

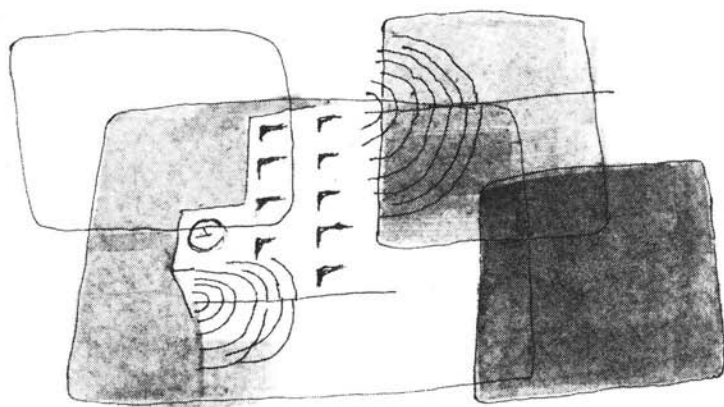
助けてはくれません。(……) だからこそ、親は賢くなって、自らの家庭を自衛するしかないでしょう”

こうなるとまるでヤスの防衛論なみ。そして、「お母さんさえしっかりしていたら」と「親」がいつの間にか「お母さん」だけになってしまう。それもそのはず、氏によると、

・働くことはだれにでも出来ます。男は働いて奥さんに金を渡す。そして敵が攻めてきたら、家族を守る。実に単純な役割です。それに比べ、もともと女性の方が知能的に複雑で高級なんです。その女性が男のまねをして、目を外に向け、家庭をかえりみなくなってきた。育児の放棄はその結果なんです”

だから、子育ては母親であって、重ねて、

“せめていま、母親は世間に流されず、どうしたら賢い親であるのか、きちんと学んでほしい”



と主張することになる。

そうですかね。男がそんなにバカで、女がそんなに利口とは知らなんだ（「オダテモボク、木ニハ登ラナイヨ」——ブタ）

ところで久徳氏と「異った目を持つ」として登場の石川憲彦氏は、やさしさの世代のハシリともいうべき論——それも、やや高みからのやさしさ——を述べて母親を慰めて下さるだけであって、現在トラブルのある子供を具体的に生かす道はみえてこない。論としてかみ合っていない。とても久徳氏の迫力にはかなわない。

サンケイ「現代の育児を叱る」は、日赤医療センター乳児院長坂田堯氏の「赤ちゃんを産んだら最低一年間は、もう絶対、母親が面倒をみるべき」という論である。氏は、校内暴力、少年非行、登校拒否なども「赤ん坊のときの育て方に問題がある」と言う。「父親」は、「母乳は出ない」から「時間より濃度」であって、久徳氏同様「おかあさん」と言い、ゼ



口歳児保育を「それ自体が間違い」と主張し、「育児拒否」とつながるとしている。

こんなにスツとゼロ歳保育と子供の問題を結びつけていいんでしょうか。彼はどんな具体的データを持っているのか。この記事の「聞き手」はどこで納得したのか。

この坂田氏は、「社会的に一年間の休職制度」と言うのではあるが、毎日新聞『とまどうママたち』は、保育所利用を、「赤ちゃんを預けて自由になりたい」「人間だれでも楽な道を選ぶ」と言っている。そして、「どうしても赤ちゃんを預けて働く必要」など、切迫した状況のママは多くない」とつづく。「切迫」とはどういうことか、職を失うことが「切迫」である人もいるし、2DKの家賃を払うことが「切迫」の人もいる。働きたい、働き続けたい、という女の願いなど、とても「切迫」の中には入れそうもないねえ。

この「とまどうママたち」、母親の現状に理解を示し、孤立した育児に横のつながりを、と言うのだが、どういうわけか「パパ」によびかけはしない。T・Vの「おしん」や米国のベビーシッターのアルバイトの例まで出てくる始末で、ひたすら「ママ」



なのだ。

それに「とまどうママたち」は、前の二つの記事同様に、そのベースに母親の「育児嫌い」という先入主を持っているようだ。

「子育てで力を注ぎたいこと」（三十五歳までの成人女性）の調査で、「トップが『日光浴や散歩』で」、「時間を短縮したい」のが「おむつ交換」「離乳食やミルクを作る」であったことから、「家事全般につきものの、手を汚す面倒な部分は、なるべくやらずにすませたいわけだ」と分析し、育児の「甘い夢と現実」と言い切っているが、そうだろうか。

「力を注ぎたいことは何か」ときかれて、「おむつ交換に力を注ぎたい」と答えるヒトなんて、ちょっと異常だと思えますがねえ。それに人気の松田道雄の育児書を筆頭に、離乳食などは簡単にして、外へ連れ出そうという考えが今の母親には浸透しているのではないか。

小児科医の光山恭子氏が母親百八十六人に「子育ては面倒と思うか」と聞いたら九人が「はい」と答えた、という結果をもって記者氏は、「育児は面倒」と考えるママはいるわけだ」と論をすすめる。驚くべき短絡ぶり。私など、十六人中の九人かと一瞬早

合点しかかったほど。

ところで、「面倒」と思うことはダメなのカネ。私は面倒だった。でも子どもは可愛い。それでも面倒だった。だけれど、「手抜き育児」はしなかった。だから面倒だった。では私は子どもを生むべきじゃなかったというのか。

「望まない妊娠・出産を避けていれば、嫌いな育児はしなくてもすむのに……」は、確かにそうであるけれど、「まして、生きがい」を子供に求めないのなら、産む前に考えてほしい」とは、大変な言い分ではないか。「子どもも、生きがい」ではなく「、生きがい」を子供に求める、であることにひっかかる。

「とまどうママたち」最終回は、保育所をとりあげている。育児より「私、パートの方が楽なもの」という母親、「保育所の専門家に預けた方が安心」という母親、をあげているが、はたして一般的なのか。働くことは育児拒否、ときめつけられるのか。「育児休暇獲得」は確か

に必要であるが、今、現在は実現していない職場が殆ど。では、そこで働く母親たちは、子ども嫌い、養育拒否、育児に見切りをつけた、なのだろうか。記者氏は「いいえ、そんなことはないってません」とおっしゃるだろう。しかし記事全体に流れるものは……。締め括りの水落ユキ氏の意見を読んでみよう。

「満三歳までは母親は家庭で育児に専念するようにと言っています。先日も『仕事が大切だから赤ちゃんは預ける予定』と全然母乳を与えない母親をしかったです。すると彼女は、私をにらむのですよ」

保育園に子供を一日の何時間かを託すことを、養育拒否という。公的機関に頼ることは怠慢という発想がある。子どもにおきる問題は一から十まで母親しだいで、アッチでもコッチでも言いたてる。母親なら、育児に専念しなさい。でないその後でひどいツケがくるよ、とくる。そ

してその背後には、夫も父も「現実」を変化させる気はない、という現実肯定がある。働く母親や、生きがいを広く求める母親は、まるで、我が子の頭上のりんごに弓を引くウィリアムテルである。

ママが「とまどう」としたら、夫との間に生まれた子供を一人で育てなければならぬ現実にはぶつかったとき。そして自分たちの生きる社会が自然なトータルな「自己実現」を受け入れる社会ではないことを知ったとき、ではないのか。

女よ育児に専念せよ、の声の中で、読売で連載中の「新米パパの育児日記」に期待したい。パパである記者氏が、妻とケンカし、励まし、オロオロして育児にかかわり、父となっていくドキュメントである。もうじき、妻の産休明けで赤ちゃんは保育園に入る。

保育問題に使われるこうした論調が、老人問題にもそのまま使われる日がくるような気がしてならない。

新刊女性雑誌を 読んで

埼玉県川口市 鳥居千代香

五月に相次いで『フリー』『リー』『セイ』などの女性雑誌が創刊された。これらが、今この時期に出たことはどういうことなのだろうか。

ある会で「いま、なぜ新刊雑誌か」というテーマで何人かで新刊女性雑誌を読んでみることにした。私は何かと話題の多かった『フリー』を担当した。内心、女性の意識を高揚させる意図も含まれているかもしれないという期待があった。

これは、発売二日目ですでに六〇%がなくなり、都内では売り切れが目立ち出し、緊急増刷をしたと聞いて、嬉しい気持ちもしたものだ。

しかし、これを読んで第一に思ったこ



とは、広告ばかりではないかということだった。全ページ広告といった感じで驚いた。

今年の四月二三日に、青山学院女子短大で開かれた日本出版学会シンポジウムで、『フリー』の編集長残間里江子は「日本では未婚の女性は金を持っている。だから営業的に狙われやすい。いろんなものが売れない時代でも、女ものは売れる」といっている。

他誌は読んでないが、『フリー』に関しては、正に購買力のある女性に何とか

買わせようという意図が見え見えである。単行本が売れなくて経営の苦しい出版社が、それを雑誌でカバーをしようとし、不景気な衣料会社と、女性は美しくなるためであれば高くても買うと思っている化粧品会社が、品物を売ろうとする、これがこの雑誌創刊の目的であるということ以外の何もものでもないと思いたくなる内容であった。

話題の「田中角栄初めて女を語る」も、古い考えを披露したにすぎなかった。また男性の多情さを馬にたとえて「男というのは、本能的に違うんです。……名馬ハイセイコーなんかになると、六〇頭も一〇〇頭もつけるんですからね」といった調子である。私はわざわざ不愉快になるために四五〇円を出して、一冊といえど雑誌の売上をのばしたことになる。

創刊号は別にしても、こうした雑誌の購買数が今後のびるならば、買手の女性たちは、うまうまと企業の意図にのせられたことになる。

(写真・長野早紀子)

マンウオツチング

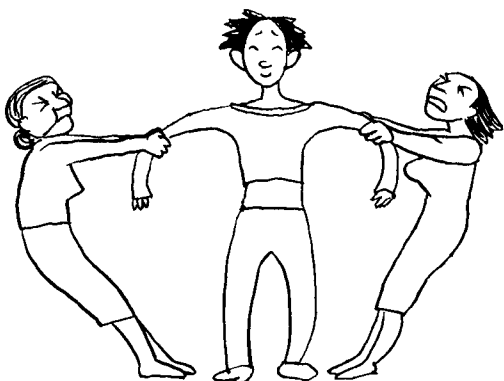
自分の顔に責任を持て！泣かせる男の物語

銀行員

合田啓介氏の

女難の人生

文・戸田真佐子



銀行員合田啓介氏が、パンツ一枚の上にジャマを着るといふ無謀なふるまいをしたために、その日の平穩は破られたのであった。

「えっ、ケイちゃんシャツ着ないの？ 今真冬なのよ」

母親の悲鳴のような声がとぶ。新婚三カ月の彼は、近くの新居から妻と一緒にやってきて、親の家で正月を過ごしているところである。

「あなたは風邪引きやすい子よ。気管支だって弱いじゃない、メリヤスシャツ着なきゃ。首巻き用のガーゼ今出したげるから」

啓介氏が何と答えるべきか迷っているうちに、横からサツと新妻が出てきた。

「お姑さん、ケイスケちゃんはこれでもいいんですのよ、ここんとこずーっと薄着のクセがついちゃって、十一月も十二月も風邪ひとつ引いてないし」

「だってそんな無茶して熱でも出して、仕事休むことになったら大変でしょ。ケイちゃんは二十六年間、冬は長そでシャツ着て首にガーゼ巻いて寝てきたんです」

パンツ姿の啓介氏は、二人の女の間立つて、イヤ、アノ、マアマアと意味をなさぬ声

を出し、母親が差し出すシャツを黙って身につけ、首巻きガーゼのほうは手ぶりで辞退し、布団をかぶってしまった。足して二で割ってやったんだ、二人とも納得してくれよな。こう嘆息して彼は眠ったふりをした。

翌日、すでに結婚している妹が帰省してきた。啓介氏は妹をつかまえて、昨夜のてんまつを打明ける。

「オレ参ったぞ。あっちは着ろと言う、こっちは脱げと言うんだからな」

すると妹がジロリと兄をにらむ。

「お兄ちゃん、ダメよ、ここは自分の親の家なんだから、お兄ちゃんは早苗さん（啓介氏の妻）の味方をしなきゃ。それに自分の身体でしょ？ このごろ薄着でやってるんだ、風邪きみになったら母さんのいう通りシャツ着るからとか何とか、適当に母さんのカオ立てとして自分の主義通せばいいのに」

正論を吐く妹に、啓介氏はタジタジとなる。

「ケイちゃん」と呼ぶ母、「ケイスケちゃん」と呼ぶ妻、「お兄ちゃん」と言う妹。自分をちゃん付けで呼ぶ三人の女性がつくる魔のトライアングルの中で、彼は自分がなすすべをつかめず右往左往するばかり。

啓介氏はどうして、このように不条理な人生を送るはめに陥ったのであろうか。

啓介氏が幼なかつたころ、母親は彼を上品で賢い良い子に育てるべく、あらん限りの力をつくしたのであった。

彼が医者の子の家に遊びに行くと云えば、母親はニッコリ許した。高校の先生の子と遊ぶのもすぐ許可した。電々公社の社宅へ遊びに行くときは、一呼吸置いてから行ってらっしゃいと言った。雑貨屋の子を連れてきた日には、言葉使いが悪いからもうあの子と遊ぶなと命令した。

うちのケイちゃんは、そこらのガラの悪い子とは格が違う。それが、県下一の名門高等女学校を総代で出た母親の信念なのである。

ちなみにこの母親は、ひとりで家にいるときも、畳のへりを決して踏まないよう歩幅を調節しながら歩いている。「お作法」という科目でそう習ったからだという。

啓介氏の父親は、高度成長の渦に巻きこまれ、連日の午前サマ。子供と口もきかず、母親とはメシフロネル以外のコミュニケーションを持とうとしなかった。母親は、夫に無視された分だけ息子に恋をするというお決まり

のコースになだれこんでいった。

母親は不美人なのに、母親似の啓介氏は色白で器量よしである。自分の顔の良いところだけ受けついだ息子が、赤ちゃんのときには「京人形のように」といわれ、小学校に通えば「学習雑誌の表紙みたい」とほめられることが、彼女の心をどれほどわくわくさせたことか。

啓介氏はこの母親の目の前で毎日予習復習をちゃんとこなし、優等生になった。放課後に野球をしているうちに薄暗くなると、母親が必ず迎えに現われたが、それを恥かしいとも思わない素直な子である。母親から「ケイちゃんは人に好かれる良い性格」と言われ続けたのがよかったのか、本当に級長や生徒会長に選ばれたのであった。

啓介氏の妹は、父親似であつたために、母にさほど愛されなかった。「お父さんそっくりで性格がひねくれているから自分で気をつけて直しなさい」「お兄ちゃんほど頭が良くないからもっと勉強しなきゃ」「お兄ちゃんと違つて器量よしって言われたことないけど、不器量ってほどでもないよ」などという言葉を母から浴びせかけられ、何度も反抗しつつ、

母親に対しては極めて冷静、母と兄との関係には非常に批判的な少女に育っていったのである。

さて、啓介氏は、二枚目テレビタレントの誰それにそっくりと言われるようになり、パレンタインカードを山ほどもらいつつ、大学入試を迎える。母親は「こんなにデリケートで優しい子には絶対浪人させたくない」と言い張った。啓介氏は合格可能性六十％の超一流大学受験をあきらめ、百％合格できるまあ一流の大学に入学する。

就職の季節、母親は「不況でも絶対つぶれない会社に入れ」と息子に勧め、都市銀行に採用が内定した日は「つぶれる心配はなさそうだけど銀行ギャングにケイちゃんが撃ち殺されたら」と思いわずらって、なかなか寝つけなかった。

それでもいそいそと入行式に出かけていった彼女は、紺スーツの息子をほればれとながめ、帰ってから「ケイちゃんが一番上品でハンサムだった、土方^{どなた}みたいな顔や漫才師になりやすいようなへんな顔も並んでたけど」と満足的笑みを浮かべたのであった。

こんな啓介氏が、恋愛結婚したのである。彼はどのように恋をしたのか。

銀行のテニスクラブで、彼は小悪魔のようにチャージングな女性に心魅かれた。銀行にはめずらしい、何をしかすかわからぬ奔放さを秘めた女性であった。

しかし彼は彼女にアタックしようとしなかった。彼女の名は「愛」という。もし結婚したらアイダアイという語呂の悪い名前になる。これをするどく発音すれば「あ痛^{いた}ァーい」となり、まるでふるさとのなまりなつかし停車場でオッサンの足を踏んづけたみたいではないか。それを思うと、繊細な彼の神経は耐えられないのである。

そのころ、母親はしきりに彼にナゾをかけた。そのころ、母親はしきりに彼にナゾをかけた。そのころ、母親はしきりに彼にナゾをかけた。

「こないだ出た結婚式ではね、新郎のご両親がずいぶんご不満そうでしたよ。ちゃんとした大学出した息子が、勤め先の高卒の〇しにつかまっちゃってね。お見合いですりゃ、学歴のあるお嫁さんといくらでも縁組できたのに残念だったんでしょね。女は先方に望まれて嫁ぐのが一番幸せなんだから、あのお嫁さんも気の毒に」

魅力的な愛さんは高卒である。望まれない嫁は不幸だと聞くと、彼はますます後ずさりしていく。自分は周囲に波風立てぬ平穏な生きかたをしようと彼は思う。実はその「周囲」の九割までを、母親ひとりが占めているのであった。

ある日啓介氏は、別の女子行員から「結婚を前提にしたおつきあい」を申し込まれる。銀行内でしつかり者といわれたこの女性は、ハズハントにおいても果敢な実行力を持っていた。

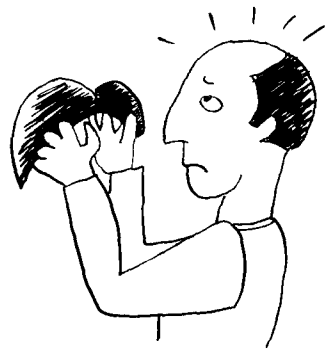
女性から申し込まれたのは意外であったが、啓介氏の心は大きく彼女に傾く。先に好意を示されたのだから絶対に自分が振られて傷つき恥をかく心配はない。これは平穩を好む彼には実にすばらしいことであった。二人は身上書を取りかわし、行儀のいい交際を始めた。彼女は名の知れた短大を出ている……彼女の親の家は自分の家から一駅の近さ……結婚したら家庭に入って平凡な主婦になりたいと言う……母親が求めている条件を彼女に見い出すたびに、彼の気持は高まっていく。

彼女の名は早苗。アイダサナエ、今度は語呂もいいぞ、と彼はうなづいたのであった。

かくして無事に結婚した啓介氏は、妻が母親と何だか似ていることに気がついた。絵に描いたような中流家庭の奥様を目ざす彼女は、夫に次から次へと要求を出してやまない。受験生時代から愛用してきたデテラをはぎとられ、ゴッドファーザーが着ていたような重厚なガウンを着せられた。ランニング姿で玄関前に出ることを禁じられた。彼は波風を立てまいと、妻の指示にできるだけ従った。子供時代からしてきたことから、別に苦痛でも何でもない。

だが、彼の母と妻が同じ屋根の下に集結すると、異なった命令系統がぶつかり合い、冒頭のような騒ぎが起こることになる。人の良い彼は、両者の中間の線を選んで二人を満足させようとはかるのだが、母からは「女房の尻に敷かれて」と嫌味を言われ、妻からは「マザコン亭主」とのしられる。二人の子の父親になっても、この状況は変わらない。そのうえ、時々調停に乗り出してくれる妹は、「ヨメシユウトメ問題」っていうのは、結局間に立つ男の責任なのよね」と小賢しく決めつけるのである。

銀行での仕事ぶりは見事なもので、同期の



トップを切って課長代理になった啓介氏であったが、家庭環境が災いしたのかその身の上に不幸な事態が発生した。正確には「頭の上に」である。髪はナガイ友達のはずなのに、彼の髪は、三十年もつきあったからもういいだろ、とどんだんサヨナラしていくのだ。若ハゲである。差別用語をつつしんと言うなら、年齢の割に頭髮の不自由な状態である。

啓介氏は、アデランスやアートネイチャーの広告を切り抜き始めた。それを察知した母親は、早速彼の説得に取りかかる。

「ケイちゃんはおデコが広がってるだけじゃない。知的で品のいいハゲかたよ。てっぺんがまんまるくスッポ抜けるようなみっとも

ないハゲと違うんだから、そのままにしておきなさい。男のカツラなんて恥さらしよ」

元軍国少女の母親は、大の男が外見を取りつくりなどとても我慢できないのだ。

ところが妻のほうはアデランス歓迎派。

「銀行員だもの、ルックスは大事にしなきゃ。アデランスなんて、男性用オーデコロンと同じ、ファッシュョンの一種よ。お姑さんおばあさんは古いんだから、気にしないで踏みきりましようよ。ね、ケイスケちゃん」

友達に見せびらかせるハンサムな夫がハゲオヤジになるなんて彼女には許せない。

彼は迷う。迷ううちにも徐々に頭髮が減っていく。たいていのことは妻と母との意見を半分ずつ取り入れてきたが、今回ばかりは、頭の右半分だけカツラにするわけにはいかないではないか。それにもし、へたにトラブルを起したら、あの妹が出てきて「自分のアタマのことくらい自分の信念で決めろ」と説教される。

毎度おなじみの魔のトラライアングルに、またもはまりこんだ合田啓介氏。この彼に果たして未来はあるだろうか。ああ、

(え・松本をきえ)

親のホンネ

この際言っちゃう！親だから、感じることにいっぱい

東京都府中市 赤井久美子

幼稚園もさつま

息子の卒園記念のシオリに、将来何になりたいかを、卒園児一人一人に書いて書いてあるページがあった。

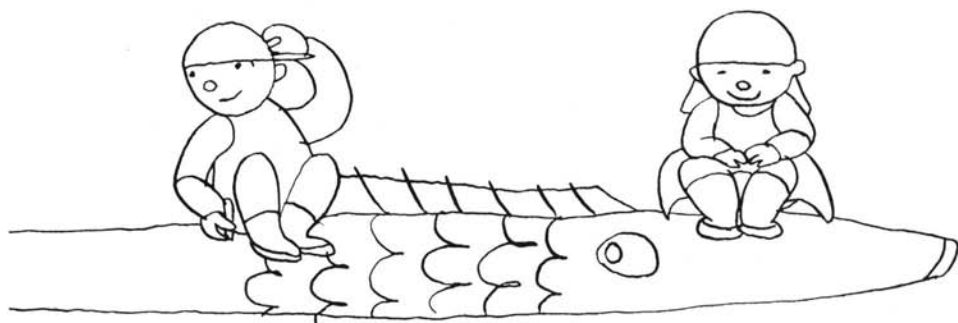
一クラス四十人ほどで三クラスだから、百二十人からの子供がいるのにその答えのなんと画一的なこと！

女の子は「お花やさん」が二三人で、あとは全て「センセイ」（幼稚園のセンセイが五、六人、あとはピアニのセンセイ

イ）男の子は、電車、バス、タクシーなど乗物の運転手がほとんど……

現代っ子はこんなものかなあーと思っていたが、たまたま他の園の同じようなシオリを見せてもらったら、その園では三十人余りの園児数なのに、ずっとバラエティに富んでいた。

看護婦さん、お医者さん、獣医さん、歯をつくる人、石やさん（家業らしい）、



パンやさん、ペットやさん、サッカーや野球やマラソンの選手、ピアニスト、おもちゃやさん、研究する博士、そして、「わからない」とか、「なんにもなりたくない」「なんていうのもあって、」きつ

っと、今は他のことを考えたくないほど楽しい時なのかもしれませんね」という先生のコメントが添えられていた。卒園してしまってからでは気づくのが遅すぎるが幼稚園にもいろいろあるようだ。

母子一体

四月終りの父母会——初顔合せで、例によって自己紹介がはじまりました。これまた例によって、「〇〇の母でございます……」が続きます。一人ぐらい自分の名前を言って、「〇〇でございます。子供は〇〇です……」って言う人はいないかしらと聞いていますと、「〇〇でございます……」と言う人がいました！

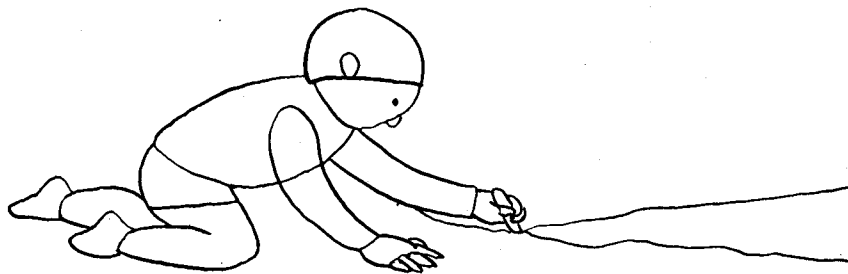
アレッと思って耳を傾けますと、それはなんと子供の名前そのものであって、「——の母」まで省略してしまっていたのでした。私にはちょっとショックだったのですけれど、この話を他の人に話しても、ケゲンそうな顔をするだけでした。こだわりすぎなのかなあ——。

この無神経

「全く頭に来ちゃう……」と、最近家庭の事情で、各公立学校を回って先生方相手に保険のセールスをはじめた友人。

「私が説明して手渡したパンフレットを

ネ、その場で、私の目の前でヨ、ビリビリって破いてクズカゴにポイッなのヨ——子供達の荒れる気持もわかるような気がするワ……」



投稿ホットライン——天は自ら助くる者を助く

男性専科

男の心聞きたい、見たい、覗きたい

しかし、ちがうんだな。

何しろこの仕事は根気と粘り。ぼくは意志的だからそこは適っている。意志人間のぼくはこの道に入ってはじめてのうちは、自分の意見を強引にお客に押しつけようとしていた。これ、まずいんだということが分かってきた。

売れだしたのはそのコツが分かったから。

まずゴメン下さい、と入っていったとき、ヒジョーにやさしいソフトな声で話しかけること。これ第一関門突破のポイント。

女の人って子どもの本というとき必ず関心を持つ。で、小さい子どもも持つて年代の主婦だったら、「お子さんの本を扱ってるんですが」という。これで興味まずひく。

むこうは話はききたいけど相手がちょっとこわそうな男だから警戒心が動くわけ。男だからやりこめられちゃいそうだというコンプレックスもあるみたい。

ぼくの セールス学

東京都千代田区

S・S

最近、仕事の業績がすごく上ってきた。仕事は何かというと本のセールスである。百科事典やお茶、書道の豪華本、文学の複刻本のセットなど、一セット十万、二十万という全集ものを戸別訪問して売るのが。

ぼくの顔つきはちょっとイノシシに似ていて、よくいえば精悍、わるくいえばオッサないんだ。だからちょっと見はセールスに向かないように思われちゃう。

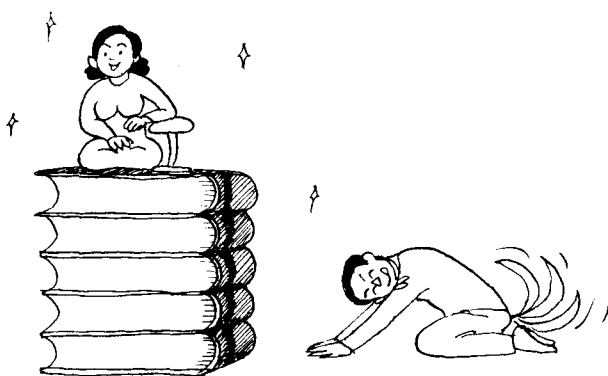
で、わざとゆっくり、少しバカみたいに話
す、これがこつ。スラスラ話しちゃダメ
なんだ。「うちは本なんかいりませんよ」
といわれても、「まあ、ちょっと見てみて
下さい」といって本のカタログをみせ
る。

丁寧、くどくやる。女性はそのう
の好きなんだ。ああでもない、こうでも
ない、これほんとにいい本かしら、とか
ね、それに丁寧につきあう。「これは最
高の本ですよ」とかね。確信的に。

玄関でなく上へあがったらず八〇%、
売れる。

あとは、相手をほめること。例えば美
術全集なんて、「奥さんみたいな趣味のよ
い方は、このよさはお分かりでしょうけ
ど」とか、お茶の本なら「貴族的な方に
はこれが」とかね。これで陶器や焼きも
ののセツブいぶん売れた。「おきれ
いですねえ」というのもいい。

子どもが帰ってくれば例えハナタレ小
僧でも頭撫でて「聡明そうですね」とか。



はじめは拒絶していても、ほめられる
とわるい気持ちしないから、いつかにこに
こし出す。気分がよくなるんですね。

これ、亭主がわるいんです。ほく絶対
にそう思う。きつと奥さんの相手をして
いないんだ。話相手になってないと思う。
大の男にやさしく相手してもらおう——ほ
められながらね——っていうところにセ
ールスマンが入りこむスキがあるんじゃない
だろうか。

議論してはダメ。教育論なんかやって
も。「奥さまのおっしゃる通りです」とい
ってればいい。

その代り時間はうんとかかる。男に売
るときと違って。男に売るのはすぐカ
ンタン。黙ってても売れるときは売れる。
単に内容を機能的に説明すればいい。必
要とあれば買う。だけど女の人はそうい
うことと別に、相手の心の中にある何か
を補ってあげなければならぬ。それが
セールスのコツなんです。

投稿ホットライン——精神一到何事か成る？

ナウイ熟年

渋柿も熟せばうまいもの、人が熟せば

注意！ボケに引き金あり

東京都港区 Y・M

母、七十九歳。父、八十六歳。

父がなんでも忘れてしまうようになったのは二年ほど前からのこと。でも去年まで、母は元気でした。

その母が急に呆け出したのは、たしかにきっかけがあるんです。

東京のマンションを引き払って、長男夫婦がとりしきっている田舎の老家に帰るといっただいたのは去年の夏。引越しの準備が一切ととのって、あと一週間、というときになって、やっぱり田舎に帰るのはよす、といっただしま

した。とはいっても、それまでの住居には居ずわるわけにはいかず、当座の行き場がないままに、同じマンションの三階にいる姉のところへ（両親にとっては長女です）ころがりこんだのです。

姉は息子と二人暮らし、スペースは十分あるマンションですから、老人二人にお手伝いさぐらうい収容するのは別に困らないのですが問題はそれから先でした。ころがりこんだその夜、

「あーこんなに熟睡したことは何年ぶりよ」

と母はいったそうです。老いた夫との二人ぐらしは、やはりどこかで気を張りつめていたのでしょう。

それからあと、張りつめていた糸が切れたように、すさまじい老化ぶり。

姉のマンションは両親のそれまでの住居と全く同じ間取りで、とまどうことはないはずなのに、トースターも、冷蔵庫も自分では使えない。「今までと違うから」っていうんだそうです。

人任せの生活がはじまってから、ボケが加速度。

ボケは身だしなみと食欲にあらわれるんですって。あんなにきちんとしていた母が、外出の時ブラウスのボタンが外れっぱなしだったり、食事したすぐあと、お腹すいた、と台所へ出てきたり。それでもまだ、「食事したばかりなのに——」というだけ、いいのかもしれない。そのうち食事したことも忘れてしまう時がくるのでしょうか。

姉がヒメイをあげています。これから先、どうなることやら！（声の投稿より）

遊びましょ

楽しいこといっぱい、ヤルとき、やれば、やれ！

探鳥会、楽しいぞー

栃木県宇都宮市 大兼孝子

天気や家族の体調をみて、当日思い立って参加できる「探鳥会」はいかが？

集合場所に行けば、望遠鏡などを抱えた人達が、なんとなく群れているので、すぐ仲間に入れてもらえます。

幼い子がいる場合、事前に事務局へ電話してきいてみれば、やはり子持ちのお母さんが、コースの問題点を教えてくれるでしょう。「子供でも歩けるかしら」「風当りが強いので寒い日には」など、やはり気がかりなことから。

朝は少し早めですが、お昼くらいで終って、子供たちの生活のペースに合せやすいと思います。日・祭日であっても、

もともと人の少ないところに行くわけですから、ラッシュも避けられます。家事も帰ってきてからでも出来ます。

野外へ連れていきたいが、母親一人ではもし何かあったら、とためらうときが

◎問合せ先

財団法人・日本野

鳥の会 〒150 東京

都澁谷区澁谷一ノ

一ノ四 TEL 四〇六

一七四一（ここ

へ問合せれば、各支部のことを教え



ありますね。探鳥会は大ぜい仲間がいてくれて心強いです。

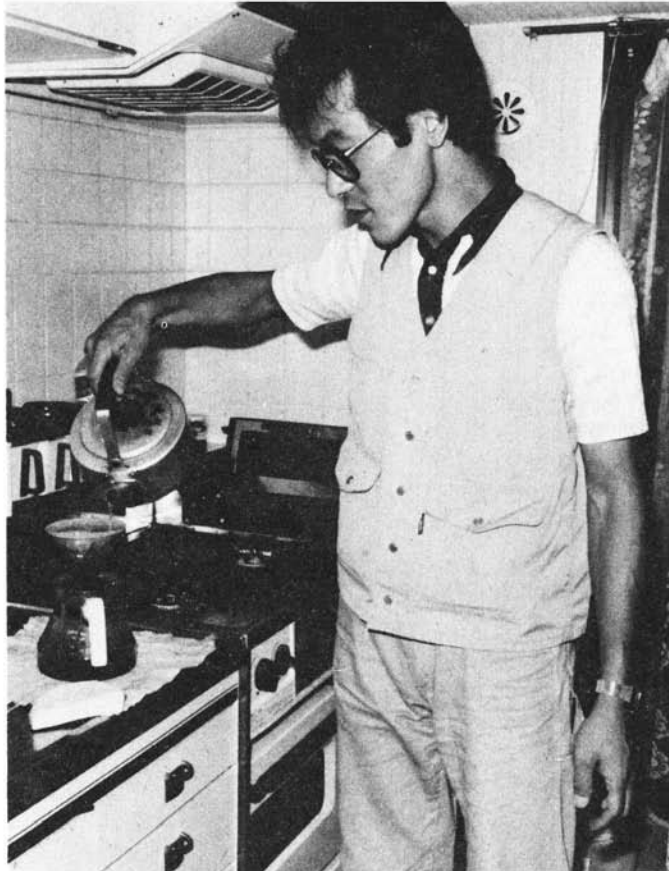
なにかも背に、子どもを手にも、という難民スタイルが当り前なこと。たいてい荷物はザックです。東京あたりはどうか、栃木などやはり田舎ですので（そしてそれを誇りに、大事にしている人達なので）カッコ良いバードウォッチングルックには、遠い人ばかりです。

リーダーは十代、二十代の若い人が多い。女性も増えていきます。大きい子でも満足できると思います。子供が小さければ、望遠鏡を低くして見せてくれるでしょう。私も「お子さんもどうぞ」と声かけてもらってから、感激、安心して参加。

初めて会う人に一人前に扱ってもらえるのは、子供にとってとてもうれしいことのようにです。幼い子がいけないことをすれば、冷たい目でみるのではなく、直接、注意してもらえるのが、親にとっては本当にありがたいこと。

私の同居相手

写真・文 野村路子



「……さあ、十年かな、十一年かな？ 私は国家試験のための勉強をしていたはずだけど……」

丸本百合子さんと功彦さんは、十年目の結婚記念日は二人とも完全に忘れていたと笑う。

東大附属病院産婦人科医長の百合子さんと、都立の重度心身障害児施設に勤める功彦さん——忙しいのは事実だが、忙しさにかまけて忘れたわけではない。結婚前のそれぞれ別々の生活と、その後の生活とを意識的に区別したことがなかったし、実際の日常生活もあまり違わなかったから、いつが結婚……と、どうも記憶がはっきりしないのだという。

二人ともが、交代制とはいえ深夜勤務のある職場、お互いにすれ違いは苦にならないというが、現在小学校一年の長男の誕生・育児の時期は、かなりの苦勞もあつたはずである。

「交代制だから出来たのかも知れないな」

と、功彦さんはいう。百合子さんが夜勤の日には、功彦さんが昼間勤務にと都合をつける、だから、特に家政婦を頼むこともなく、身近な人たちの手助け程度で、何とか育児期間ものり越えられた。

話しながら、功彦さんが慣れた手つきでコーヒーをいれてくれる。

「コーヒーだけですよ」

と百合子さんは笑う。仕事の仕度は、特別のことがない限り百合子さんがする。仕事の分担だの当番だのは、話し合ったこともなければ、分けようと思ったこともない



丸本百合子・功彦さん



が、離乳食時代の習慣が、そのまま続いてしまったということが多い。

功彦さんは、炊事も洗濯も嫌いではないが、職場でもやらねばならないので、家では、出来ることなら手を抜きたいというのが本音。百合子さんの方は、離乳食など作るのには、やはり女じゃなければと考えていたから、功彦さんに無理強いする気もまったくなかった……ということ、何となく一つのパターンが抵抗もなく出来たらしい。

丸本さんの家では、新聞をとっていない。

「本当は、新聞を両手でひろげて、オイ、お茶ノとやりたいのだけど……」

「それが嫌だから新聞はとらないのよ」

と二人で笑う。実際には、読みたければ職場でも読めるし、家では、もっとやることがあるからというのだが、そんな冗談が自然に出るような雰囲気がある。

「我々の仲間は、ほとんどが共稼ぎを続けているし、それぞれマイ・ペースで、その家なりのやり方を作っている……それが自然に出来る世代なのかな」

お互いに好きな仕事を、目下のところは快適な状態でやっているから、勤務時間の不規則さやすれ違いもあまり気にならない。一緒に生活は便利だし、一人よりずっと楽しい——特に、何かを意識してではなく、自然な状態で来てしまった、と、息子さんを間に、まったく普通の父親、母親らしい笑顔をみせる。

「もう一人子どもがいても良いなと思うんだけど……」

連載第四回

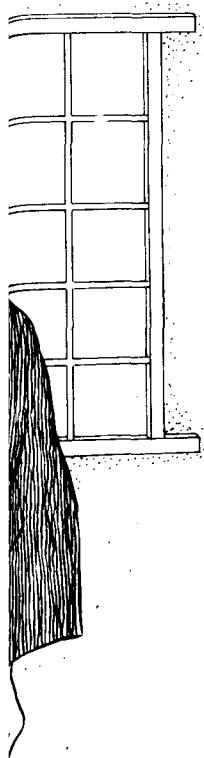
文・宮城道子

絵・西田淑子

近代恋愛婚姻史

霊が勝つか肉が勝つか

—— 岩野泡鳴・清子の巻





奇妙な同棲生活

明治四十二年の二月、東京、戸山ヶ原の近く西太久保の一角に珍奇なカップルが同棲をはじめた。

男は岩野泡鳴、女は遠藤清子。

一緒に暮らしはじめたその日から、六畳に陣取った清子は戸の内側からシッカリと錠前をつけた。同棲に際して、決して暴力はふるいませんと泡鳴は誓っていたが、信用できるものではなかったからだ。

泡鳴は「神秘的半獣主義」を主張する新自然主義の作家である。

その主義は「人間に於て霊と物質は二ではなく同一存在の表面的変化であり、自然と心霊とも区別なく同一の存在である」と霊と物質、肉体と精神の合一を説くもので、儒教やキリスト教のもつ道徳的理想主義とも宗教的精神主義とも異なり、全ての現象は善悪美醜向上墮落など一切の方向性をもたない盲目的な存在であると主張し、道徳も宗教もすべて偽善者の世迷言よこしまなことばだといひ、すべてはその存在そのものに意義があると力説した。

泡鳴の恋愛論もその延長上にあり、自然と心霊、物質と精神、善と悪の対立がないのだから恋愛と肉慾の対立もあり得ない。恋愛の極点は抱擁であって、肉をはなれた恋愛はない、しかしその抱擁のよろこびも決して持続せず、刹那的なものである、と説く。

花嫁は一分後の老婆、花婿は一分後の老爺である。永続的結婚は成立を確立し得ず、一夫一婦はその瞬間に於てのみ真理である……などと書くから、島崎藤村、高山樗牛など恋愛至上主義的なロマンチックなムードが歓迎されはじめていた時代に、野卑だ、狂人だ、奇人だと、その半獣とか神秘的とかのネーミングも禍いして、することなすこと話題にならないものはなかった。

泡鳴の名譽のために書き加えれば「耽溺たんでき」、「放浪」、「断橋」、「毒薬を飲む女」など多数



を創作発表し、評価されたが、それはまだのちのことである。

当時の泡鳴はやはり常人とは言いがたい。最初の結婚は親の反対を押し切って三才年長の幸子とした。実質十四年の生活の間に六人の子をもうけたが、勝気でヒステリー気味の妻とはことごとく反^{あは}があわず、遂に自分の経営する旅館を妻子もろとも借金のカタに入れ、あり金をかき集めて、新天地を求めて樺太へと旅立ってしまう。

樺太ではカニ工場を経営する計画だったが武士の商法ならぬ文士の経営で赤字倒産。整理もつかぬままに樺太奥地へと再び放浪の取材旅行に出る。

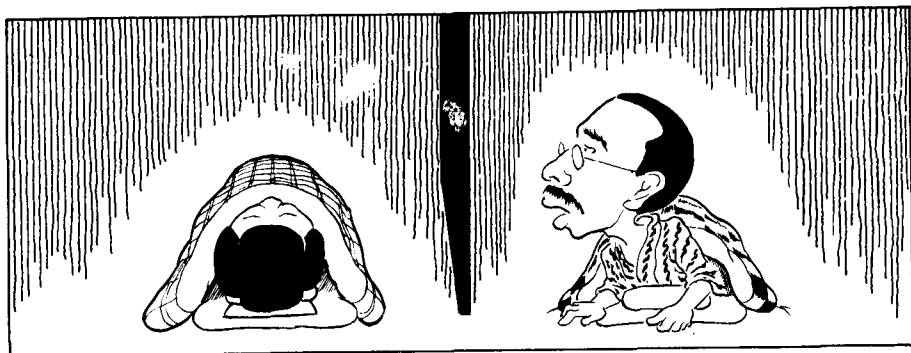
そもそも樺太行きの原因は、妾のしも江も原因であった。泊りの女客とただならぬ仲になった泡鳴が、一軒もたせたことが幸子に知れて、お定まりの大立ち廻り。家の中がこじれたことで樺太行きにはずみがついた。しかも、泡鳴から梅毒をうつされた信じ込んだしも江が「金を出せ、病院に入れる」と一文なしの男を北海道の果てまで追ってくるというしまつ。

幸子との生活も、しも江との暮しも泥の中でもがくようなものであった。どの女も泡鳴をのしりながららみつき、泡鳴も愛しながら憎んだ。後年、彼の作品群に幸子としも江をモデルにした主人公がくり返し登場するが、泡鳴はその愛しさも憎さも冷酷に写し出している。

さて、どうにかしも江と手を切って東京に無一文で戻ったものの、夫への憎悪で夜叉のようになっている幸子のもとへ帰る気もなく、さりとて疲れ果てた身をやさしく抱いてくれる相手もない泡鳴は、早急に誰か他の異性を探す必要に迫られていた。

そこへ、耳よりな話が舞い込んだ。

近頃、雑誌記者をしたり政治問題でなにかと活躍中の女性が、泡鳴の作品「耽溺」に感銘をうけて会いたがっているというのだった。



霊が勝つか肉が勝つか

遠藤清子。新聞記者として生計をたてるかたわら、治安警察第五條解禁の論文を書いたり請願運動（女性の政治活動解禁）を行ったり、アジア留学生の世話をしたりで既に世に名をしられている行動的な女性である。

しかし当時の彼女は失意と絶望のどん底にいた。五年ごしのプラトニッククラブに破れたのである。

霊の愛は永遠に変わらない至高の愛と信じひたすら肉の交わりを断っていた恋愛の相手が、別の肉の方へ行ってしまったのである。

絶望した清子は小田原の海に投身したが、白足袋がブカブカ波間に見えかくれして漁師に助けられてしまう。スキヤンダルめいた噂の渦の中で身の置き所もない清子も、引越しを考えていた。

そこへ友人とつれだって突然泡鳴があらわれた。泡鳴は訪ねてくるなり自分の過去の恋愛だの、思想だのを一方的にしゃべりまくった揚句、三回目のデートで実に単刀直入に「どうですか、気が向けば夫婦同然になってもいいということ、まず一緒に住んでみませんか」と、まるでピクニックにでも誘うような調子でもちかけた。

言われた清子はおどろいた。泡鳴の恬淡さは認めても、なにしろつい先頃、愛する男から煮え湯をのまされたばかりである。決断の早い清子も返答に窮した。

「恋愛感情もないのに無理というものです。自分を侮辱したことにもなります」と強くことわったつもりでも、このチャンスに生活を一変することもできるなど、ひそかに思わないでもなかった。語尾の弱さに泡鳴はつけ込んでくる。

「決して暴力をふるうことはしません、私も紳士の体面を守ります」

「ほんとつに守りますか?」「もちろんです」のやりとり幾度かの後、この奇妙な同棲の形は成立した。

何かと目をひく二人の奇妙な同棲とあれば騒がれるに決っている。ジャーナリズムに先手を打とうと、二人はさっさと記者会見をする。

しかし出た記事の見出しはセンセーショナルに「霊が勝つか、肉が勝つか」であった。記事には清子談とし「同棲の形式をとっているけれど、現在は露ほどの恋も愛もありません」と書かれ、泡鳴談として「清子はその後強情にも××を拒絶している。だが僕に成算あり、近き将来に於て必ず僕の主義を実行してみせる」と力む様子が報道されている。

ひやかし半分の友人たちの訪問が絶えなくなるが、昼はふたり並んで客に對したり、食事をしたりしながら、夜はカギをおろして寝るという日々が続くこととなった。

泡鳴は最初の口約束が馬鹿げたことだったと直ぐ悟る。子供の遊びじゃあるまいし、ハイ、おやすみなさい、ピシヤリで済むものかと思う。夜毎悶々たる思いで坊主枕がしめっぽくなるまで涙にむせんたりもした。

征服か降服か……二人が一枚の襖を境にジッと息をひそめる夜がつづく。

友人同志の便宜上の同棲だ、すべてが同等の資格で、お互いに個人として助け合うを条件としての共同生活の約束だ、と清子はぐらつく氣持を支えようとするが、相手は最初から結婚を条件とした位だからまさか無事ですむとは清子も思っていなかった。

泡鳴は真剣に彼の思想を説き、情熱をもって清子をかきくどく。清子にしても彼の思想に影響を受けはじめる。学ぶことは多いのだ。

日夜顔をつき合わせて、泡鳴の熱情に焦がされていると、このままいっそと思う刹那もあるのだが、ハッと身をかわしてしまふ。それでいて身をかわした自分を正しかった、とも物足りなかった、とも清子は思うのであった。

紆余曲折のあげくに二人は契りをおかわす。小理屈の多い清子でも夫婦同然になってしまえば、それはそれで落着くと泡鳴は考えていたらしいが、清子の態度はちっとも変わらないう。それどころか、今まで自分自身の内に向けられていた刃が泡鳴につきつけられるようになってきた。

その夜の日記「熱烈なる君の……(略)われは犠牲となりぬ。…われら寂しき人々が互ひ

に半生慰藉の友となるべく誓ひぬ」とある。

男にすれば目的を達成したよろこびに「ああ、一生の友となるよ」と言ったか知れぬが、それをキチッと日記に記す清子を、単なるロマンチストだ、とは言えない。（のちに泡鳴が清子のロマンチストぶりにあきれる、というようなことを書いているが……）

清子の心の奥にどうしてもひっかかるものがあつた筈である。男は最初から夫婦同然と誘いをかけ、女はその言葉を結婚と聴いている。（これはそれぞれの作品の中に残っている）しかし先妻との間は一向にスッキリしないままだ。靈的恋愛の同棲のうちならまだいいが、それ以上にすすむとなればやはり何か、形、だけでもいいから欲しくなる。

その形が結婚であると清子はまだ意識していない。たとえ意識しても口には出せない。すでに清子は彼の思想の刹那の愛を肯定したのだから。

のちに、平塚らいてうの同棲について清子は、「形式的な結婚という形をさけて共同生活にしたのは同感できるが、呼び名はどうでも結婚は結婚。お互いの考えさえ因習にとらわれずに、自由な生活が出来るなら夫妻と称してもかまわないと思う」とのべているが、清子にとって実は結婚は終生大きな課題であつた。

靈肉不一致の同棲

こんな具合だから、夫婦同然になつても何かしっくりこない。清子は泡鳴に抱かれるたびに「どうしてこの男は下劣な欲情のかたまりなのだろう、どうして精神的に愛してくれないのだろう」と苦しみ、心も体もコチコチになるばかりだつた。

一方泡鳴は自分の思想通り靈肉合致を求めるのだから、これではうまくゆく訳がなかった。

涙を浮かべて口惜しがる泡鳴の前で、清子はじつと顔色もかえない。相手に自分の心が通じない寂しさはふたりとも同じだつた。

泡鳴の創作にルビをふる手伝いをしながらこの小説の主人公と泡鳴の恋を重ね合わせて、



「君の恋はたしかに熱烈であつたらう。しかしそれは理智の伴つた恋ではない。肉に対する執着の愛、それにすぎない。少なくとも尊敬の籠つた恋ではなかった。私の恋は肉から入った恋でなく、尊敬から湧いた崇高にして純潔な恋であつた。私はそういう途から入つて肉まで相一致するようになるのが恋の順路だと信じている。然るに君は醜業婦等に臨んだような肉の満足ばかりを急ごうとする様子がみえる。私を愛するのは私の人としての価値を認めているためでなく、只若い肉体として愛されている様に感じられる」と清子は嘆く。

しかし同時に清子は泡鳴の力にグイグイと引きつけられてゆく自分をも感じている。恋すること、自由でいることが両立できないなら、やはり私は自分の思想を貫こう、でも今この恋から離れたら私はどうなるだろう……。泡鳴への恋と、自分の思想の自由の間で清子の苦しむ日はふえてくる。

どこか平行線の感情のまま、ふたりの生活は大阪へ、再び目黒、巣鴨へと続く。同棲もすでに三年目に入り、傍目には平穏な日々が続いていた。

女中に「こんなに仲の好い御夫婦は見たことがない。私もここに来て一年になるけれども、ついぞ一度も言い争つたのを聞いたことがない」と言われるほどであつた。

しかし、ふたりは闘うときはつねに重苦しい沈黙の闘争だつた。三尺と離れない場所です読書や書き物をしているのに、ふたりの心は遠く離れている。ふたりがふたりとも、淋しい暗い心を抱いて、しんと座っていたのだが、女中や近所の人にその真相がわかるはずはなかった。

当時、「青鞥」の発刊と前後して清子は泡鳴に連れられて平塚らいてうと会っている。らいてうの清子への第一印象はきわめて象徴的である。

「小づくりで派手好みらしい厚化粧の奥様でその下になにか憔悴の色が隠されているようにでした。おどろいたのは大丸髷の清子さんが、濃いグリーンのマントを着ていたことで



す」とある。泡鳴の好みで厚化粧だったという説もあるがどうなのだろう。独身時代（記者のころ）のいでたちも一風かわっており、「白の小倉の袴、久留米緋の着物、髪は桃割」というのである。独自のセンスというべきか、ダサイというべきか。

こんなふうなどどこかチグハグなセンスのなさと、霊至上主義のかたくなさが清子の中で同居していた。

ふたりの仲に起ることの総てを、肉か霊かにわけて考えるのもその現れだろう。

泡鳴が機嫌がわるい、口をきかない、帰りが遅い、いらつく……どの場合も「肉的我でない私は男の心を転じさせる方法がとれない」で片づけてしまう。そして「男の肉に屈することなく、私は信じる道を歩むのだ……」と悲愴な覚悟となってしまう。

白か黒しかない。中間色や、あいまいさを認めることができない。その単純さはやりきれない思いをさそう。

大正元年、同棲四年目にしてやっと先妻幸子との離婚が成立し、清子は翌年正式な妻となる。

この離婚に際して泡鳴は、どうにも進まない話に業を煮やし、幸子を無理矢理に姦通罪へ持ちこもうと手をまわしたりする。清子がもうひとつ打ちとけないのは妾同様の立場にあるからだろうと急いだというのだが、その時の清子の反応はどうだったろう。

清子の性格から推して、おそらく泡鳴と幸子の間のことだと、ことさら口をはさむこともなく傍観していたのではなかったらうか。

ともかくにも、こうして遂に、清子は妻の座を手に入れたのだった。

「対等の夫婦」の理想の下に

泡鳴と清子、この水と油にも似たふたりがともかく一緒に暮せたのは何故だろう。五年以上もの間泡鳴は清子ひとりを守りつづけていて、他に愛を移していない。

それはおそらく、肉と靈の衝突をも含めて、ふたりが対等の立場で向い合える夫婦だったからではないだろうか。

血の気の多いのはともかく、当時の泡鳴はいわゆる「新しい男」であった。

とかく世間の非難、攻撃的であった「青鞥」グループの女性たちとの交流も深く、清子と共に「青鞥講演会」では弁士として、女性の自覚をうながす講演をしている。同時に清子も「思想の独立と経済上の独立」について体験をふまえた熱弁をふるっている。この清子の講演の内容を「思想の上で自覚しても、経済上の独立がなければ遂に思想の自由を失ひ、不快な家庭の中に理解のない夫と住まなければならぬやうになる……」と当時の新聞記事が伝えている。「家」と「養う夫・養われる妻」の歪んだ関係が、あたらしい女の清子には見えていた。これは入籍するよりわずかに前のことのように思われる。

と同時に清子は青鞥に「私達は二人とも個人主義です」と言明している。

ふたりは同棲の当初からできる限り無干渉の方針で暮らしており、夫婦であると同時に一方では独立した個人であると自覚していたという。

泡鳴としてもこの点に於ては大賛成であったことだろうから、さしずめふたりは「近代的な夫婦関係」であつたろう。

つかず離れず、対等に相手に接しながら、決して干渉も拘束もしない……まさにいい関係である、表面だけを見れば……。

清子はこの個人主義的夫婦関係が気に入り、自分の持物総てに「清子所有」とベタベタ貼紙をした。

訪れたらいてうが「奇異」に感じたのも、この不自然なまでの自我の主張であった。

別居後泡鳴が「真に新しい女といえるのは平塚明子（らいてう）氏と清子氏で、前者が空想的なところがあるのに反して、後者はもっと実際的な見解をもつ」と評しているが、それだけに相手にとって不足のない女性だったといえよう。

ただこの文章はこう続いている。「それでもなほ共通の欠点は、婦人の個性を主張するに急にして、男子の個性を忘れ勝ちな事だ……」と。

泡鳴は清子の交友関係から新しい女たちとも交流し、時代の息吹きを感じてはいたが、心からの新しい男とはいえなかった。

要請があれば「婦人の自覚」について講演もできたし、妻の清子との生活で無干渉の個人主義家庭の真似ごともこなした。何ごともざくばらんに話し合える夫婦関係もこのころ確立してきた。

しかし、それはそのほうが暮し易いから、にすぎなかった。

泡鳴は皮むけば、そこらにいる男とかわりがなかった。その事實は間もなく明らかになってくる。

この年の秋、二人は清子の実父と泡鳴の義母を引きとることになる。来春の出産をひかえた清子は、折角の静寂な家庭の雰囲気（相手を干渉しない自由な雰囲気）が乱されるだろうし、旧い社会の中に生きてきた老人がこの家庭になじめる筈がないと心を痛めるのだが、思いがけず老人たちは清子たちの生活になじんでくれる。

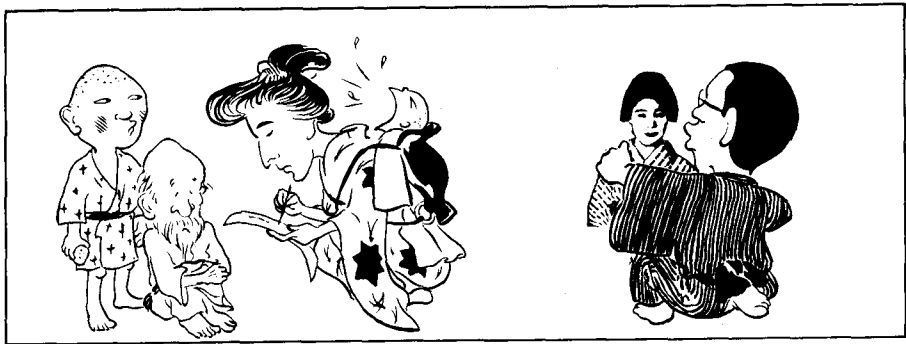
この時期が清子にとっていちばん平静な時であったのだらう。自身で、霊肉一致の結婚生活であったと書き残しているぐらいなのだから。

らいてうあての手紙形式で彼女は自分の人生観の変化を次のように発表している。

「かつて霊のみの恋愛こそ清い純粹なものと考えていたが、人間でありながら肉を卑しんだため結局遊戯に終ってしまった、と悟ったし愛の永遠不変という夢もさめてしまった。と同時にそれ迄婦人覚醒のために戦ってきた運動も、人生観の変化と共に、表面上の婦人の地位を高めるといふよりも、真の覚醒をすすめるには不十分だと思つて中止した。私は恋愛が霊と肉と相ともなわなければ力が微弱であると同時に、すべての運動も思索と行動が伴わなくてはならないと思つた」というのであった。

これはらいてうが思想を発表するだけで直接行動に出ないのを非難している文だが、最後にさりげなくこう書いてある。

「私は時があれば、法律上に於ける婦人の地位、妻及び母の権利までも改めるようにしたいと思っています。かういう運動も婦人問題を取扱ふ上に於て、必ず起きなければな



らないと信じています」と。

近い将来、この言葉通り清子が奮戦するとは誰ひとり思っていないかった。

妻の役割に押しひしがれて

さまざまの危機をはらみながらも、どうにかバランスのとれていた家庭にヒビの入る事件が重なった。

同居して一年目の姑の具合がわるくなった。それより半年前、難産で清子にとって長男、泡鳴にとつては五男民雄を産んだばかりである。義母とは昔から折合いのわるい泡鳴は死病と判定されても一向にやさしさをみせない。冷談に扱いつづけ、亡くなっても葬式ひとつ出さずでなく埋葬だけは手続をしたというありさまであった。

看病から死後の片づけまで清子が一人で負ったことになる。やれやれと思う間もなく先妻との長男、薫を引きとることになった。

十一才である。その年齢ともなれば幼いながらも実の父母の長い戦い、実母の苦しみも夫への憎しみもなんとなくわかる年頃である。

温和しく連れて来られたものの、最初から愛情を示さない父親になじめる筈もなく、ジツと耐えている様子の息子に泡鳴もお手あげとなり、勢い清子に押しつける形になる。

乳呑児の世話、老人、家事、自分の仕事と大車輪の上に血のつながらない暗い性質の息子の世話ときては、清子に荷が重すぎた。

その頃、世間に名も売れ忙しくなってきた泡鳴は仕事にかこつけて、当然のように亭主風を吹かすようになってきた。

ふたりの間の「無干渉・個人の尊重」が崩れはじめた。

先妻幸子も無心になる。気持のやすまる時はない。その上、こう何かも清子ひとりの上にのしかかっては、本来の仕事すらできない。考えもまとまらず、文章を書くのも大変になってしまった。



清子も不合理なことにだまっている女ではない。ささいなことから不満がエスカレートし、互いに一步も退かず言い争う日もあった。同居中の実父の前で大げんかの末、離縁話の出る日もあった。

このままでは駄目になる、と実父のはからいで温泉宿へと旅に出てみるが、たまたま泡鳴の知人と出会ったことから、泡鳴が清子を放り出して飲み明かす日を重ねてしまい、二人の仲はますますこじれてしまう。

最後のたたかい

決定的な破局がきた。

泡鳴が蒲原英枝と恋愛問題をおこしたのだ。

皮肉なことにこの女性、泡鳴の仕事の助手にと清子が紹介したのであった。英枝は夫と別居し上京して仕事をさがしていた青鞥の会員であった。特に魅力的ということでもなかったが、泡鳴は何年かぶりに他の女に迷ったのである。清子との間がごたごたしていたことが最大の原因であつたろう。

二人の間柄に気づいたらしい清子の態度に泡鳴は打ち開ける。英枝を愛してはいるが、清子に対する尊敬には何等の変化もない。清子に得られないものを英枝に求めるだけで家庭はそのままである。しかし、もし清子が愛を絶対に所有したければこの関係は崩れる、(すなわち清子と別れる)というものだった。

その時の反応を、泡鳴は「清子は認めた」と言い、清子は「自分のことは自分で決めるため十日の猶予をとった」という。

しかしこんな都合のよい話を清子が認めるわけではない。

泡鳴とすればいくらかの保証条件で離婚としたのだが、清子は別居を主張し譲らなかった。十日後の話し合いの直後、着のみのまま泡鳴は英枝のもとに飛び込んでしまう。

先妻の子、薫は当人の希望で清子のもとに残すが、そのためにも別居に際して収入の三分の二を清子に渡す約束が成立する。

「今回僕等は別居することになり、泡鳴は転居致しましたが清子は従前通りの住ひを続けます。乃ち、左の通り――」

府下巢鴨村一〇七二 岩野 泡鳴

府下巢鴨村二五一七 岩野 清子

大正四年八月十一日

暑いさ中、知人や文壇やジャーナリスト達がアツと驚くあいさつ状が送りつけられた。

先と同棲の時も騒ぎだったが、今度の騒ぎはどうしても泡鳴に分がわるい。捨てさられた形の清子と子供たち（しかも一人は先妻の子だ！）に同情が集中した。

二人のところへ取材陣が押しよせる。清子は胆石をこじらせており、寝たり起きたりなので更に同情が集まる。清子にそんなつもりがなくとも、記者の筆は勢い清子の立場の弱さ、泡鳴の放蕩非情ぶりをあおりたてる。清子がその世論に乗じたとしても仕方あるまい。どう考えても女をつくって出ていった夫を許すわけにはいかなかったのである。

この屈辱をいかにそそぐかと苦しんだ清子は思い切って別居の契約破棄並びに同居請求の訴訟を起こした。

今まで何百、何千という女たちが、男たちの不道徳、身勝手の犠牲となって泣き寝入りしてきたではないか。

女たちが非力なのをいいことに、男たちは女を踏みにじり、傷つけ放題だったではないか。しかし、私は違う。

昔の女と違って私には自覚がある。そういう人間にとっては、信じるように生きるのが本当じゃないだろうか。自分が弱いのか強いのか、自分一人の力で戦おう。これを機会に世の男たちに対して考えたり、言ってみたりしたいこともある……と青鞥の取材に対して

答えているが、まさに清子にとってつい一年ほど前に書いた通り、妻の立場、母の立場を守るために敢えて訴訟という方法を取り、妻の意地を通そうとしたのだった。

訴訟ときいて泡鳴もいきりたって、あちこちへと清子側への反論を書き始めたが、何かと話題の多い性質だけに不利であった。世論は、英枝との恋愛ひとつにもこむつかしい理論を展開する泡鳴を（彼は太真面目なのだが）茶化したり、あざけったりした。世の固定道徳とその結果生じる偽善的行為を打破し人心を一新しようとやっきとなつて理論をふりまわす泡鳴に、ジャーナリズムはいよいよ面白がつて反論やスキャンダルめいた記事で応じるだけであった。

ついに、訴訟を取り下げないなら約束の扶助料も払わないと泡鳴は仕送りを止めた。その時の泡鳴はこう述べたとある。

「扶助料のごときは強制履行を許さざる債務なれば、清子より法律上の請求はなし得ざるものなり。

夫婦同居の義務は同一程度の義務にあらず、妻は良妻賢母たるべく、同居は妻にとり絶対的義務なりとするも、夫の妻に対する同居の義務は、社会的活動をなすに支障を来たさざる範囲内たらざるべからず。

しかるに被告たる泡鳴は目下の境遇上、清子と同棲するをもって不便の事実なきにあらざれば都合上別居するなり」

まさに男の勝手でどうにでもなる「家」と「妻」の姿が示されている。

その上泡鳴は姦通が成立すれば一銭も払わなくていいと先の幸子の時と同じように秘かに清子の行動をつけまわし、密会の現場を押えようと無駄な努力さえ払っている。陋劣きわまるやり口だが、しかし泡鳴は男の本音を代表したまでで、特に珍らしいことではなかった。男にとって「妻」とはまさにそんなものであったのである。

十二月泡鳴は敗訴となる。

しかし頑として扶養料支払いを拒む泡鳴を相手どり、妻子扶助料請求の訴訟を清子は起

こす。すでに子をつかって金を無心すると怒った泡鳴は薫をむりやり引き取っており、民雄だけを清子のもとに残していたが、英枝との間に早くも一女をもうけていたためか息子への愛情は薄く、切りすてて顧みないでいたのだ。

この扶助料請求も年が押しつまって清子の勝訴となった。泡鳴の家に差押えがきた。

と、泡鳴は突然、二人の車夫と義弟の剣道師範など数名を連れて清子の家へなぐり込み、ステッキで清子をなぐりつけ、驚く清子に「引越してエノ」とわめくと、たんす、洋だんす、つづら五、六個、本棚などを持ち出し、止めに入る家主を更になぐりつけて、近所総立ちの中を家財を満載した車を二台つらねて立ち去ってしまう。

自分のためばかりでない、世の多くの不幸な目をみた妻のために戦うのだと心から信じて二年近くをかけた戦いに、勝訴はしたものの、清子が得たものは何ひとつなかったといえる。

ひとたび結婚し家に入れば経済的自立を生きていた清子でも、あれほど「家」に伴う不条理な因習を恐れていた清子でさえも、羽根をもがれて再び翔び立つ日はなかったのである。

愛・結婚・家・妻・自立……清子のえぐり出した問題は時代を超えて生きつづけている。

ファミリー・イン・ブルー

父よ、母よ

埼玉県与野市 仲川 秀子 36歳

明治三十八年生れの父と四十三年生れの母（今は共に故人である）を、子供のころは、仲睦まじい夫婦と思った事は一度もなかった。父が博打好きで、菓子製造で入った日銭をみな持ち出し、母が苦労していたのを毎日見ていたからである。

岐阜県奥の山奥（掛斐郡）で菓子製造を営んでいた、小中学校の運動会、冠婚葬祭の饅頭、落雁等の注文に追われ、私達兄妹は小学生の頃から配達や、饅頭への焼印付け、袋詰めとよく働いた。田舎の事なので、多くて

も二十人分、少ないと七・八人分の法事饅頭を、同じ日に何軒も配達させられた。今なら手伝えばおこづかいももらえるのだろうが、私達兄妹は、自由に使えるおこづかいなどもらった事は一度もなかった。口にはださなくとも皆、家の経済をよく知っていたから。

毎日、夕食後すぐ出かけ、明け方に帰る父、そんな父に文句の一つも言わず、朝早くからアンコ炊きに精出し、アンコを炊き上げ、饅頭、落雁が、父さえ起きてくればすぐ仕事にかかれる状態にしていた母、苦境に耐える事と寡黙さを、女の道と守りぬいた人である。

中学二年の時、私は母にこんなことを聞いたことがある。「母ちゃんばっか苦労してあほらしいネ。父ちゃんにもちゃんとするようゆったらいいのに」すると「おんしも大人になつたらわかることやから聞くな」と母は言った。母ちゃんはえらい人や、私が大人になったら、母ちゃんの事小説にして金儲けして楽しめたらから、父ちゃんより先に死んだらあかん」私は母にそう言った事を覚えていた。父の毎夜の博打仲間、掛斐川上流のダム建設にきていた飛鳥建設の飯場の土方達であった。朝鮮の人達もかなりいて、彼等は父を

『中田の親父』と頼りにしていた。私達兄妹も朝鮮人の金太郎さんが大好きで、ランドセルなどを買ってもらったこともある。

店は和菓子店の注文がなくなる夏場は、飯場の土方相手に氷屋、うどん屋などをやっていたので、この時も私達兄妹は随分手伝わされたが、土方の人達がくるといつも喧嘩をするので、とてもこわい思いをしたものだ。喧嘩の原因は知らないが、ケンカのたびに、刺身包丁や出刃包丁を振り回し、それを父が取り上げ、仲裁に入るのだが、いつの間にか父もその渦に巻きこまれ、体から血を流す姿を、私達はワァワァ泣きながら見ていた。

その時の母は、店の小さな金庫の前でじつと成行きを見ているだけであつた。今から思いかえせば強い母だったんですね、父の醜態を子供に隠す事もなく、一部始終見つめさせていたのだから。

現在の教育評論家の方達なら『親の醜態は子供に悪影響を及ぼすから見せるな』と言われるだろうが、私達五人兄妹は、父の博打をする姿、酒に酔った姿、喧嘩する姿、みんな見てきたが、成人した五人の兄妹の中にヤクザな道に入った子供はおかげで一人もない。

母は無学な人だったので、立派な教育論など持ち合わせていなかったが、私達は母の寡黙な愛につつまれていた。

そんな母が口を開くたびに言っていた言葉がある。

『金はその日一日が無事に暮らせるだけあれば充分や、人様に迷惑かける人間になるな。おまえ達がすきなならば朝鮮人だろが中国人だろがもらってもらえ』

無口な母であつたが、これだけはよく言っていた。朝から晩まで働くことしか知らなかった母も、五人兄妹の最後、私の結婚ではつとしたのか、六カ月後の十二月聖夜の日に、脳溢血で六十四年の命の火を消した。

後に残った父は私の所へ遊びに来て『嫁のおしたしは辛くてなあ。秀子の所のは母ちゃんと同じ味や』私はその言葉を聞いた時、無茶な事して母に苦労かけていた父が、兄嫁には遠慮して母を懐しんでいる。これが昔、母の言った『おんしも大人になつたらわかることや』だったのか、と父の涙声を聞き、私も泣いた。あの時目の前にいたのは、土方相手に啖呵をきった父ではなく、母が連合に選んだ心優しい老人であつた。

おんしとは岐阜県の方言で、おまえとかあな
たの意。

ヤクザな道とは、やはり岐阜県の方言で非
行とかの意。

嫁の犠牲は報われない？

東京都品川区 山田 志津代

先日、久しぶりに親しい友人四、五人が集まって食事をした。女もやがて五十路に手が届くころとなると、みな一様に「戦い終わって日も暮れかけた」というような顔つきで話題はまず身体の不調の訴えからはじまる。つい五、六年前までは子供の進学に就職に、まるで競馬のレース予想を楽しんでいるかのよう
に目を輝かせていたものだが。

お互いに学生時代同じ寮に暮らした気安さから、家の内幕すべてをぶちまけて慰め合ってきた仲で、この日もおそくまで話は尽きなかったが、中でもMさんの話にはショックを受けた。相続の問題である。

彼女が結婚したのは確か昭和三十五年ごろ、相手は長男で同じ高校に勤めていて職場結婚だ。姑はすでに亡く、年老いた舅と二人の義妹を抱えて、それからの二十年はどはまに

苦闘の連続だったという。共働きをしながら男の子二人を生み育て、妹も次々に嫁がせはつとしたころ、舅がボケはじめ目が離せないようになってしまった。子育てもやっと楽になり、仕事にもあぶらがのってきたころだっただけに彼女はついぶん迷っていたが、結局涙をのんで退職し、老人の介護につとめてきた。それが五、六年続いて漸く三年前に亡くなられ、さあこれからと思っていたら、思いつけぬ遺産相続の争いにまきこまれ、まだ十分立ち直れないでいるというのだ。

「敵は義妹いもうとだったのよ、私があればおじいちゃまの世話に追われていた時でも、たまに子連れでやってきて何となく病人のまわりをウロウロして夕方になるとさっと帰ってしまふの、私は夜中に夫と交替でおしめかえをするので、昼間少しでも寝たいのにチビの面

倒おしつけられて……その程度にしか看病にこなかったのに、初七日がすんでさあ話し合いをしようとしたら、堂々と弁護士をよこして来たのよ。当然の権利だからといって譲らないの。結局土地の半分は妹二人の名義になってしまったわ。でもこれは法律に従っての裁定だから何も文句言えないけど、口惜しいのはそのあとよ」

自分達の名義になった土地をパッと不動産屋に売ってしまったというのだ。言い忘れたが、Mさんの住居は都内でも交通の便がよく、しかも閑静な住宅地で、約百坪（三三〇平米）はあったという。その半分としてもマンションの建つおそれは十分だ。しかも敷地の東側なのだから彼女の怒り、不安はもっともだ。

女の子一千万円のソ

田舎の夫の実家に女の子が生まれました。上にすでに男の子がいるので、「女の子で良かったですネ」と言うと、姑は、「おなごの子が生まれたら一千万の借金負ったようなもんだから……」と浮かない声です。そういうえは、夫の

私はMさんの話を聞いて以来、今まで縁のないこととすませていた相続の問題がどうにも心にひっかかってしやうがなくなつた。

確かにこれは法律上何ら問題のないケースであり、この程度の嘆きは世間にはザラにあることだろう。が、暴言を承知で言わせてもらえるなら、女は結婚して婚家のためにいくら尽くしても嫁としての権利は全くなく、むしろ実家のほうにいつまでも相続権を残している点が素人にはどうも納得できない。

長男の嫁として舅姑と同居して家を支え、体の弱った老人をみとり、自分の仕事を捨てて頑張った嫁の犠牲はいつどこで報われるのだろうか。世の中不公平だと思われて仕方がないのである。

東京都町田市 匿名

田舎では年々婚礼がハデになり、本人やムコさんはおろか、その家の人誰一人として免許を持っていないのに、格好がつかないからと、嫁入り道具に新車を持って行ったとか……。

姑もつらいよ

東京都新宿区 太田 千代

先日、長男の嫁が訪ねてきてくれた。二年ほど前二人は結婚しアパート住まいをしている。電車で三十分位の所だが、ふだんはあまり往来^{きようらい}をしていない。「もうすぐ父の日ですから、お父様に……」といってワインとケーキを差し出した。「それはそれは、どうも有難う」と私は急いでお茶の仕度をしてもてなしたのだが、切り口上に挨拶をすませるともう早々と席を立ち帰ってしまった。

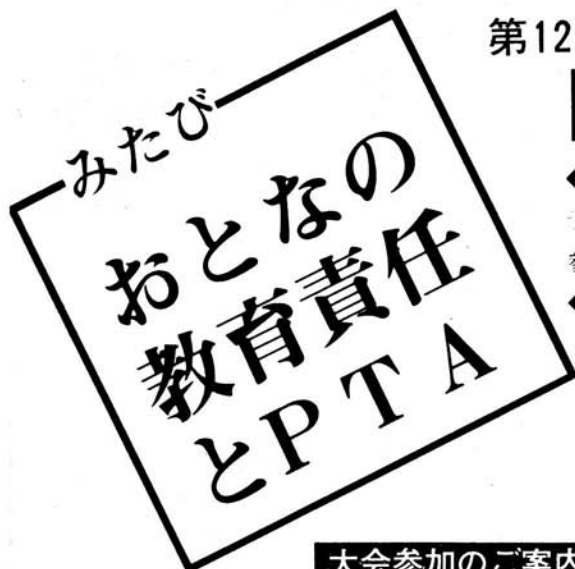
性格としては私の見る限りではなかなか情の細やかな優しい面をもち、長男やその下の弟などとは楽しそうによく喋るのだが、それが私達の前に出ると、ピタリと貝が口をとぎしたように黙りこくってしまう。どうも大人との対話が苦手のようだ。

短大を出て会社勤めをして一年足らずで、我が息子が強引に口説いて一緒になった相手だから、こちらは何も文句をいう筋ではないが、どうも物足りない。帰りぎわに私は「父の日、母の日、敬老の日なんていうの私はど

うも好きでないの。こういうのは形式ではなくて心が大事なことから、あまり無理しないで手ぶらでいいから、いつでも気軽に来て下さい。貴女とお話したいの」と言ってみ送ったのだが、何しろこちらも姑になりたてのホヤホヤだし、お互いにざつくばらんにつきあえるようになるには、大分時間がかかりそうだ。

考えてみれば私もこの嫁と同じ年頃に結婚し、夫の両親とは一緒に住まず敬して遠ざかる方針をとってきた。しかしつきあい方は自分なりはかなり気を使って可愛がられようとつとめてきたつもりだ。別に「氣くばりのすめ」を宣伝する気はないが、これも年寄りとか幼児とか、異年齢とのつながりをあまり経験せずに育ってきた結果ではないかと思う。

〇〇の日なんてわざとらしい、と何となく反感を抱いていたが、これもいろいろな世代とのつきあい方を経験する一つの手段と見るべきなのだろうか。



第12回全国大会へのおさそい

主催 全国PTA問題研究会

◆ 参加費

予納 1,600円 当日の場合は 1,800円
参加費と引換えに参加証をお渡しします。
(2日間共通)

◆ 連絡先

〒113 東京都文都区本郷2-16-9
全P研事務局 TEL. (03) 813-4510
但し、月・水・金の12:00~15:00まで。

分科会

8月23日

大会参加のご案内

プログラム第1日

全体会

8月22日 10:00~16:30
会場 3階大ホール

〈第1部〉 10:00~12:00

I. 大会基調報告 大会実行委員会
おとなの教育責任の再確認と、各分科会への問題提起

II. 〈記念講演〉

講師 林 竹 二 (元宮城教育大学学長)

きゆうけい

(舞台で演奏または演芸の予定)

〈第2部〉 13:00~16:30

——シンポジウム——

テーマ

パネリスト (五十音順)

永井 憲一 (法政大学教授)
宮城まり子 (ねむの木学園園長)
村田 栄一 (教育評論家)
室 俊司 (全P研代表・立教大学教授)

司会 永畑 道子 (フリーライター)

分科会No.	分科会名
第1分科会	幼児教育とPTA
PTAをよくするために	第2分科会 管理主義とPTA (小学校)
	第3分科会 進路問題とPTA (中学校)
	第4分科会 後援会からの脱皮 (高校)
第5分科会	「非行」問題とPTA
第6分科会	P連P協の問題点
第7分科会	地域の教育運動とPTA
第8分科会	教科書問題とPTA
第9分科会	働く人たちの教育参加とPTA
特別分科会	PTA規約の基本問題

三票差で次点／どこからか票が出てこぬか、こぬかと思廻せど

金縛りになったように私は動けなかった。

開票場はもう後片付けの段階に入っていて、作業の有様が時間の経過を示している。

ジャーン次点。それが判った瞬間から、何かがピタッと停止した様な気分。

三十議席に対し三十七人、獲得票数を下から数え上げていく。どうしてもなのか！も一人、も一人見当らないのか。何度も数えた。やっぱり。票数を読む、読み直す、四百十二、それから四百十五。開票場立会人の席で何十分も身じろぎしない私の体の周囲に何かがメラメラするように、自分でも感じる。さっきまでしゃべりかけていた隣席の男は私に背を向けてしまった。

三票差なんだ、たったの。どうにかならんか、無効票として束ねられたその中に「大貫よしこの票とみなせる！」と主張し得る票がありはしないか？ 私は不明確な票を検討協議したその場の記憶を懸命にたぐっていた。しかし、幾度考えてみても「票」は浮かび上

落

選

!

国立市議選レポート

ただの女が気軽に立候補できる時代がやってきた。女の描く「女たちの選挙戦」の舞台裏。政治は男たちだけのものではないのです！

WIFE ★ レポート

古川 雅子

がってこない。まして逆転当選を可能とするにはあともう一〜二票……絶望は濃くなるばかり。

得票は一般公表される時は数ではないが立会いの場にいると各候補のつかんだ票の質までが見えてくる。

誤字、当て字、例えば河合を川井とかく、学校の試験ならあきらかに落とされるようなひどい当て字でも、選挙の票なら無効にならない。氏名一部がちがったもの脱けたもの、それも有効。氏だけの記入あるいは名だけの、同氏あるいは同名の候補者のいる場合は両方の総得票数によって比例案分となる。

判読の困難な字も立合人の大部分が××○〇と読める、と判断すると、有効票に加えられる。

協議の必要になる票は、保守無所属と公明党に多かった。

ところで我が候補者「大貫よしこ」の票のなんと見事だったこと、協議が必要な紛らわしい票がまるでなかった。かなり確信度の高い一票一票であったと言えるだろう。だからこそ、大貫選対派遣の立会人としての私は手も足も出ない——文字通り、身じろぎで

で 点 次

二票差

かったのだ。

要するに票が不足してたのだ。読みが甘かった。しかし——三人ほどの顔が頭の中に浮び上がる。調子よい返事をしても投票したかどうか怪しい顔・顔・顔……、チッキショウメ！

立会人の中から唯一人歩み寄ったのは商店街の候補者（保守）の事務所に座りながら実は（かくれ）元・社会黨員のお茶屋さん「残念ですホントに、惜しかったです。あの方は三人前の働きのできる人なのに……」どっと顔がクシャクシャになり私の手も攣まんばかり、「よろしく申して……」とソソくさ。

最後に渡された立会人手当八千円の中から、帰途、ローソクの炎を思わせるバラのつばみ二十本を買って私は事務所に戻った。

スタート出おくれポカ とドジの連続の選挙戦 だったが……

不足した三票から五票を追ううち、私たちは意外なところにそれを発見した。熱心にかきまわっていた学生——市内に幾年も住み、「反核都市宣言」を市議会に通させた実績を持つ——それなのに彼らが住民票を当市に持っていないからである。「何だ何だおまえ！」芋づるを引はるともう一票、また一票とつぎつぎ……。

投票権は、投票日から逆算三カ月以前に当市に居住をはじめた者である。今回は一月二十二日だが、そのとき大貫選対は胎動期、陣痛さえ起っていないからである。彼らのドジばかりを責められない。

もっとも昨年暮れに立候補の意向をきくとすぐ、「すわ住民票を！」と取寄せられたのも二十票はどであった。選挙の準備にはそんな

ことも含まれることも、私たちは思い知らされた。

よくもあんなハチャメチャ選対で次点までいったものよ。外部の評価も参加した者の反省もそんな辺りらしい。案外「玉」にインパクトがあったのだ。そう、ハチャメチャは候補者の持味でもあった。

スタートが出おくれた。立候補の意向を聞いたのが年末、やっとその意志の固まったのが一月末、動きが始められたのはもう二月。

投票まで数えても十二週間でやったのである。

第一に選挙運動の経験者というのが、元社会党員で酔ってポスター破って三日間ブタ箱入りしたという人と、かく申す私だけ。一応「選挙責任者」を引き受けた沢田君、かつて「西田医院の大貫さん不当解雇を許さない会」で中枢をやり抜いた実績で再び押出され、しかし年休どころか休暇もめったに取れない職場ゆえ、選挙戦公示後も勤め帰りに事務所に現れる委員長ごんだった。しかし、選挙技術の資料から名簿入手、票田開発、終盤の票読みなどためにキッチリやりましたよ。

彼の代行兼、準備期間中ただ一人の専従者は、失業者のガバチョ氏、ダルマのような風

格と立派な体と腕力、彼の乗り回す小型トラック、マフラーが痛んでオートバイと間違えられそうなバリッパバリッパタバタというのが、貧乏選対の唯一の機動力であった。この人が頼もしそうに見えてノンキさもケタ外れ、ポカをやる、スッポかす。しかし飲むと驚くほどの理論家になって議論に飽かないのだった。

さて宣伝カーだけは不似合いに立派な乗用車、不動産セールスマン大上氏の提供。ところが抜かった、車の置場がない。大体駐車場の主というのは保守支持であり、まして車を置かして他の候補者に何やら痛くもない腹を探られても、というのか。やっと隣の府中市の法政寮に置けることになったが、朝晩ここまで車を運ぶのが運転手君のもう一つの仕事になったのである。

肝心な選挙事務所の件だが、とうとう裏通りのまた他家の裏手の大貫さんの借家——六畳、四畳半で始まってしまった。参加者・支持者見回せど見回せどこれまた裏通りのまた裏の住人、アパートの二階の住人らばかり、持ち家の住人すらもない——年齢層も三十代主流、若かった。まして空室・倉庫はない。

借り出す金も無論ない。そして公示後は候補者の安眠を理由に一軒置いた家の二階に、夜は大貫さんに出ていってもらうことにした。

いよいよ宣伝カーがハリ切って出掛けたものの、この全通青年部のスピーカー六〇Wが、他の車の一〇〇W一二〇W級に押しまくられてお待ちかねの支持者つまり路地裏のほうに声が届かないことが分かった。これほど「弱小〇〇」をくやしき思い知らされたことはなかったが、五日目から保谷の市議加賀美氏に貸してもらってから、やっと遜色なく声が通るようになった。この日がちょうど選挙戦の中日。このころになってようやくどうやら選挙戦のやり方も陣容も人手も、うぐいす嬢も応援弁士も、差入れもカンパも整い、うまくなり、活気付き、たのしく個性的になってきた。素人がドジってばかりいたのに、ようやく本領を発揮し始めたのだ。

候補者のタスキがシルクスクリーンで美しく刷り上がって持ちこまれたのもこの日。日の出町の田村さんの持ち込みで候補者はお色直し。紺のブレザーに白いパンタロン、タスキが映え、おカッパの大貫さんは「ようよう

オリンピック」とはやされる。彼女の娘さち子さんが、白手袋で手を振るのを嫌う母さんのために考えたのが、顔よりも大きなたなごころを造って車の窓で振ること。魚の箱の発泡スチロールと竹ひごのたなごころはピョコピョコと揺れて、行き交う人の顔がついほころぶのが見られ、子供の人気を集めた。

委員長発案で登記子の「バリの五月」を送のBGMに流す。やがてまねる候補者も。いくらうまくなっても二人ではうぐいす嬢も大変、とウグイスボーイをどんどん採用、元黒テントの俳優井村昂氏と赤絵岬さん夫妻の掛け合い、喜劇性豊かな人なので車の中で笑えてならなかった由。東大自主講座（公害摘発で有名）の河野君の「さっすがア慣れている」アジ——しかし現在のは「全共闘」節ではないのだそう。

次にはマダムキラーではないかという低音の魅力を見込んで、終りの二日間団地に送り出したのは二部の経済学部斉藤君。バカでかい音量で威圧しまくった谷（保守）市長のスピーカーと行き会ったとき、押し黙らずに競馬の中継よろしくまくし立て通したのは、このマダムキラーボイス君一人だった由。河野君

と斉藤君、戦い終った夜シンとなってから、口々に「もう二・三日やりたいなァ」

最後の午後は、「とにかくもう何かやるしかない」と勝手連が土曜日の銀行の前でミニコンサート。リターンマッチの石塚（革新）前市長も加えて、「候補者に問う」なんてことをやってみる。この時の大貫さんの話が選挙期間を通して一番よかったという評価。この人、街頭演説っての下手なんですよネ、本当のところ、私もピエロの扮装つけて客寄せの熱演、これはやり過ぎた、とも評あり。

応援弁士、これは候補者がどんな人かを証す最も大切な役どころ。各々話のうまさももう定評の人達。ここは紹介のみ。

第一は当「わいふ」の編集者、田中喜美子さん——主婦大貫さんの自立の物語を知る人、二期目の井上スズ選対委員長を務めた人、角野孝弘氏——国立市の市民運動について思うこと、市民運動を母親が主婦がやること。

高橋暁正氏——東大講師「日本の薬漬け医療公害」の告発で知られ、西田医師と過剰投薬・過剰検査・不用意なレントゲン操作を批判してくびにされた大貫さんを評価する人。

船瀬俊介氏——現在大貫さんが運営委員と

なっている日本消費者連盟の同僚。

シツチャカメツチャカながら、活気と理念においては結構レベル高い選挙をやったと思っているのである。ともあれ参加者一同がもう選挙はコリゴリと言わなかったこと、次回もやる気の人、他の選挙やってもいいと言う人、新しい友だちと付き合い始めている人がいることが何よりであった。

「ガバツとお金よこして」 「ハイッ」と出たのが たつた二万円の勝手もと

私は食事こしらえを担当した。引受けたはよいが、何人分用意したものか見当もつがず、相談しようもない。とにかく金をかけられない選挙、と覚悟してはいたものの、公示前日誰が会計か分からぬままに候補者に要請した。「さア台所にお金頂戴、予算全額とは言わんけど、バサツと寄越して」「ハイッ」とがま口開いて二万円。あぜんたる私の顔も見ず出掛けてしまう。翌々日、またもやバサツと捕えて「後のお金早う……」受取ったばかりのカンパ袋切って「ハイッ」

驚いた、コリヤ考えてたより深刻なんだ、



私の主張

もう成人した二人の子供の母親として、本当の意味で子供の幸せを守りたいとさまざまな運動に参加してきました。家の中にばかりいては安全な食べ物ひとつ手に入らない現状を知るにつれ、それは単に食べ物が変質したというにとどまらず現在の政治の矛盾と深くかわわっていることに気づきます。

しかし働く人にひもじい思いさせてはならじ、おまけに幾らでも食べられそうな顔・顔……。安価でポリウムがあつて人気のありそうなメニューを三日程打出したが、知恵の種もつきそう。つらい心中、主婦の皆さんよく分かるでしょう。

四日目から、大貫さんの同志、各地域の「これからの会」——『たまごの会』とたもとを分かち結成した。から昼食までに、交替で差入れが始まった。同じおにぎり一つにしても作る人が違えば型も味も違う。しかも材料は生産者の顔が見えてくる確かな品ばかり、調味料だってすべて薬物無添加。それはこの台所製だってそうなのだけれど、国立で一番良い食事の出た事務所だったのではなからうか。この昼の差入れに一番助けられたのはこの私だったかも知れない、チエも体力も枯渇せずにすんだもの。

台所の面積というのがこれまた一坪、その中に流し・水切り・コンロ台・物入れ、足まわりは四尺そこそこ、人が二人立つともう一杯。つまり家庭用としても三人分ぐらゐの能力なのである。

私の仕事は準備期間にこのスペースの能力

を上げるための大掃除・改造・整理から始まった。炊飯器・鍋などは可能な限り大きいものを用意した。直径三十センチの鍋、一升炊き電気釜、大きなバット。それらを買わずに、借りる、持ち込む、もらって来る、拾って来る。コップなどはクリスタルなんかしまい込み、「ワンカップ大関」をズラリ。

見当もつかなかった食事も二日目には方針が立った。器具の能力一杯に作る、鍋一杯の煮物、汁、大ボール一杯のサラダ、揚物はあ

るだけの皿に盛上げる。

食卓だっていすは四ツ、立って食べても食器そのものも五、六人分。どうせ揃って食べるわけだし、食卓の上に出して置き「ゴハンですよ」という次第。仕事に出る人から急ぐ人から、居る人からどんどん食べてくれ、どれか早くなくなっても「アラ運が悪かったね、次の機会ね」と気にしない。

高値のたけのこ、一度たけのこごはんでもと考えていたらこれまたみかん箱三つも差入れ、無農薬茶と水車製茶に取組む水車村から、大貫さん激励だった。おかげでたけのこは皆飽きる程食べた。

ところで、選挙も終り反省会の席上、私が

政治の現状がこのままでは人間が人間らしく生きる社会の実現は望むべくもなく、世直しは日常生活を問い直し、地域の人々とともに足元をみつめて恒常的なたたかいを継続させていくことだと思います。

大貫よしこ



カンバ袋の封を切っては一万、二万と渡された台所の切なかったこととこぼしたら、ナンとナンと「ごめんお金は用意してたのよ、そんな苦労させたなんて」「バサッ」と寄越してたら、たった二万円出てくるんだからもう、どうしようも肝が冷えたわ」「ごめん、バサッ」とたって、私のバサッというのは多分二万円ぐらいのよネ」「あんたッ、何人分食事作ってんの？ それにね何です、カンパなんてもんは選挙の間中棚の上にでもズラ」とありがたそうに飾っとくもんヨ」「ウンウンでもすぐに役に立てたんだからヨッポドありがたかったんじゃないの」つまり大貫さんとはこんなところもある、という人なんだ、何が一番驚いたって、ついに会計係が決らぬまんま、候補者のガマ口から「ハイ」式で終ってしまったということである。

もちろん記帳と領収書保管だけやる人はあったわけで、大三菱を六年目に惜しげもなく辞めたエリート失業者のS君であるが、ガンコに金の管理のほうを拒否したからだった。

ハチャメチャも極まりであるが、絞りに絞った台所、費用総額十二万円にもならなかったのである。

選挙につきものの誹謗 中傷革新陣営の足ひっぱりっこ

大貫さんの出馬は、国立市のみならず東京

都規模で風波を立てた。すでに四期にわたり唯一の革新無所属を自認してきた井上スズさんとお票をどう分けることになるのだろうか？という革新すずめ共のピーチクパーチク。十年の昔にはラジカルな言辞と「文教市」らしい運動の先頭に見えていた井上さんの隊列の中に四十歳頃の大貫さんもいた。「国立救済会の井上」で左側陣営に聞こえ、工業化する農業から、農の自然を取戻す運動の先駆となった「たまごの会」の大世帯主として市民運動家に知られている井上さんであった。

しかし十余年の間に、政治情勢も、市民運動自体も、運動している人の生活も、井上さんの意識もずい分と変化したのである。四期の間井上議員がつかんだ市民信頼もあらう代りに、幻想の「革新無所属」に失望して去った人達も累積している。井上さんにしてみれば大貫さんは腹に据えかねる造反分子だったのであろう。

「大貫さんが私の票田を荒らす！」その言葉はついに公示後の毎日新聞に「女のたたかい」とゴシップ扱いされた。「革新は井上ただ一人」を表に、裏をひた走ったのは大貫さんへの中傷。

中傷は選挙につきものと常識みたいな認識はあったが、やはり悩まされた。明らかな敵側の中傷というのは野次馬気分で聞き、ヤッテルなァと突き抜けてしまうが、仲間が仲間内にささやいていく中傷は、何やらリアリティがあり、効果がある。中でもいかにも「ご婦人向け」の感のあった中傷は、「大貫さんは離婚をしている」「男の出入りが多い」……この二つは確かに事実ではあるが、妙なフィリングや目配ばせまじりにささやかれると、全く妙なイメージとなる。その二つの実態をよく知っている人はブツと吹き出してしまっただが。

も一つ、こればかりは問題化すべきだと真面目な労働者を怒らした中傷があり、「西田医院の不当解雇撤回」で一年ぐらいの争議の後、弁護士を通して得た和解金のことを「医者から脅し取ったその金で立候補した」というものである。脅し取る……との言葉のニュ

アンスに女の人をおびえさせるものがあり、労働争議やその和解金というものを自分の身に引きつけて考えることができない——それを真に受ける、社会的常識の幼なさ、それも女の実態であることを考えさせられたものである。

大貫さんが立候補の意向を周囲に打診した際、バツと集まった十数人はすべて男だった。女の人は？とガツカリした彼女を慰めて私は言った「なァに年末で女は手が離せないのよ、それにネ、男って政治が好きなんだから」しかし表面だけ見ると、確かに選挙期間を通して「大貫選対」には男が多かった。

これは、他の消費者問題・反公害・地域市民運動を背負って出た女の候補者と比べても特色であった。他から応援に來た人も「アララここには若い男がいっぱいネ」それもヒゲ面で優しい目をした男達——企業社会・学歴社会で、他を踏み越えけ落す戦列を、自ら放棄してきた様子を漂わせている男たちが多かった。



負けても朗らか、責任をなすり合う人たちは一人もなく

先に述べたようにピーチクパーチク「井上票を荒らすかどうか？」と騒がしいころ、私は大貫さんの肩をたたいた。「ヨオシ一つ今まで投票しなかった人の票をもらおう、ネ！」別に深く考えてそう言ったわけでないが、そんな人達が集まってきたのだ。正確にはそれが何票であつたか分らないが、社・共も井上さんも引き出し得なかった人達を大貫さんは引付けたのだ。

選挙運動どころか、投票さえしたこともない者が多数まじって、初めて、の体験に生き生きとぶつかると。共産・公明の票にだって切り込んでいく。

チツともノンポリなんかじゃない。彼らが選挙に背を向けていたのは其感を感じる候補者がなかっただけのこと。

今日あの政党もこの政党も、あの人もこの人も「弱き者の立場……」と唱えはするが、実際には定職・定住所を持ち得ない人や、チヨツと変った家族構成でくらす人、複雑で厄



介な事情をたくさん背負っている人達に対しては、ぐうたら・すねもの・やっかい、と一人前に扱わないだけでなく欠陥人間、不良分子として締め出し外そうとする。

大貫選対には初めからそんな空気がなかった。そうした存在自体が現政治体制への批判、というとらえ方と心があった。大貫さんが離婚した女で職を奪われた人だったからだし、人なつこい彼女の人は、とても柔軟で吸収紙のように新しい事柄に向かう快さがある。自分だけの価値観や好みだけで人を切らない。

「弱者をノ」猫なで声でやられてソッポ向く人達も、大貫さんは自分と同じようなものがスツと通う、と思うらしかった。

初めのうち、人手不足で苦しかった選挙事務所は、次第にこうした人もゾクゾク入って来て何やら風変わりで暖かい空気がかもし出された。後にくわしく述べたいが、全体を通してツギハギだらけ、ヒッチャカメツチャカの大貫選挙だったが、教条・原則で非難追求をしだす者はなく、三票差次点という結果に無念がっても、責任のなすり合いを起して後味の悪い思いをさせる人もなかった。とても素晴らしいことだったと思う。

傷つくのがこわい女たちの逃げ腰応援

大貫選挙では女手が少なかったが、彼女が女に人気がないからではない。国立市での事情、井上議員との間で途方にくれた女もいたのだ。どちら支持かハッキリ示してしまっ

は、後日付合いづらから玉虫色になろう。井上さんのほうの仕事をしなからこちらと出会うとニツとウィンクする。せつせと電話を

くれて、情報だけでなしに例の中傷まで話してくれ、大貫さんをカッカさせてしまう。これが中年層の主婦に多かった。

中には泣かんばかりに立候補を思い止まらせようとして「今からではおそい、とても太刀打ちならないわ、落ちたらあなたが傷つくのよ、見てられない……」あの「西田医院不当解雇撤回」の争議の際、大貫さんをシッカリ支えたこの人は、今度は確実性のあるほうを選んで、井上陣営にとどまった。

いつもいつも茶のみ話では「大貫さん議員ビッターじゃない、ネ応援するわ」それが革新すずめどものピーチク評定をさんざん聞くと「今から票が集まるもんかしら？ 彼女が議員にふさわしいかどうか……手伝うったって、私も残業多いしウーン」。周囲に振り回されて判断が定まらず、逃げ腰。

「私、吉武選挙やって傷つきました。イヤなの。選挙って怖いわね、人間関係にヒビが入ったりするし……」(楽しいこともあるよ)

優生保護法改悪阻止のため、市議会への陳情署名集め傍聴とガン張った人なのに「私投票したことないの(誇らしげ)。議会政治で何ができて？」(あんだ、じゃ何やったん?)

まゆをひそめてこう言った人。「女の人の集まりが悪いって？ 問題ねエ、そんなじゃどうなのかねエ」(あんだどうした、あんだが来たなら?)

「大貫さん、運動やりながら食べていけるから議員になりたい、と言っんですって？ そんなの支持できない。まずは定職に就くことね、解雇撤回もできずに和解金使っ立候補

するか●大貫さん



竹内直一

私が大貫さんとおつきあいを始めてからもう10年くらいになります。国立で牛乳の産直運動の世話役としてご相談を受けたのがきっかけとなって以来、いろいろな運動で大変親しくしていただいています。大貫さんは一口でいえば、非常にスカッとしたご性格でスジを通すことに厳しく、それでいてあたたかい心をもつ、私の好きなタイプの人です。

だなんて……」(議員の給料で食って悪けりや組合の専従とかはどうなんだろう？ 和解金をどう使おうと勝手でしょ？ 原則主義や現実無視の観念論は引っ込め、失業や無資格の苦しさが大卒のあなたにワカるもんか、)これまでの関係の上で旗色を明らかにしても別にどうでもない、と思える女なのに、「あれは井上派これは大貫派なんて見られるのは困る」と、選挙の間中ではできるだけ近付くまいという様子に見えた人もあった。

負けるかも知れない戦は不安で不安でついてけないと逃げ腰。それを何とか「正当化」したい理屈や非難。どっちにも良い顔しい、どっちにいつでも転がろうとするずるさ、憶病さ。一緒に何かの運動をやったあのひと、学習の場で意志一致していたこのひと……それなのに。

私はついムカッ腹ではえてみた。「私は理屈なんかじゃないのよね、義理と人情でね。大貫さんとは戦友ですからね、一緒に並んで鉄砲打つ、傷つきや担いでいく。あなたの友情はどうしたの？ あんだ友達ではなかったの？」

けれどさわやかな女も無難いたのです。赤ン坊の寝た間に、電話でオルグからの票集め、候補者の激励と、せっせとやったノラさん、彼女は動かない女を責めるのヨシナと私に言っ、「大貫さんの人間関係きつと選挙で変わるだろうけど、新しい人もふえるし、それもいいじゃない。何かハッキリしちゃうのもいいじゃない」

ある日大貫さんの庭に小さい子を二人連れてた女が現れて「アァ想像してた通りの人だったわ」とニッコリ。彼女カッパさん、子ども連れで通ってハガキ書きやら名簿作りをせつせとしながら、走り回る子を叱り飛ばしたりなだめたり、それがチツとも子どもに煩わされてる感じがしない。子ども絡みを当然のことと、どこでもコブ付きで走り回り、要領よくその辺の男をニコニコ巻きぞえにしてしまう。たまにはウルサイと思うこともあれど、大体は天晴れナとニッコリさせられてしまう。

総じて男達が選手を、政治を、ギャンブルのごとく、スポーツのごとく、知恵にも精神にも汗吹かせて、結果的には楽しんでいたのに比べて、女達はまじめにがまん強く、時に少々重たけなであった。

議会の風通しをよく



男は政治好き 女は政治ギライ というのはウソツパチ

男は政治が好き——本当の意味でノンポリはめったにいない、と私は見る。ある男が政治的でない——というのは男社会を下りていくのと同義だとさえ思う。男は「力量」というものに敏感で、絶えず、集団や、そこにいる相手との力や距離を測っている。そして、それをどう自分に有利にするか？ 自分が向こうを引回すか、相手に取入って難を避け、おこぼれもらうが得か、生死をかけて争ってみるか、政治の正体はそんな「人間力学」なのだと私は見る。

男たちはもうホンのガキ時分からその態度をたたき込まれて育っていくが、本当のところ、その態度は男のみ必要で女に不要ということはない。男の……というよりは「生きる」ということの上で不可欠の態度と能力でさえある。

読者の中では、私の言葉に異議をはさみた人があると思う。女だってなかなか「人間力学」に敏感であり、それを駆使できる人

もいる——と。そんなだけれど——その力学を使う「場」が異なってるんですね。「結婚」こそ女の政治性が火花を散らせ合っている場、だから女の「天下国家」は「家庭」なのであり、「家」の中で発揮されてきた女のマキャヴェリズムというのも、古今東西すごいものがあるでしょう。

私がこのことに気付いたのは結婚生活がはたんしだして夫との主導権争い、肉を切らせて骨を切る類の駆け引き……そうしたある日フト「ナンヤァこれ、国際情勢に似たところあるナ」と思ったのである。そうしたら、新聞読んでいても親近感ではないが、グッと身近くなってきた。

女は政治に無関心、嫌いだと思われていて、男のほうではそれを女の本質のごとく言う。その傾向は雑誌を見ると一目りょうぜんで、男の雑誌では「ガキもの」「ミィハーもの」でも「力と天下国家」であるし、女の雑誌は少女マンガはいうに及ばず、相当ハードなものやインテリ向けであっても「愛と結婚」で編集されている。

女の雑誌で、天下国家はもう料理のスパイスみたいようなもので、男にとっては愛も家

庭も、SEXという項目にブチ込まれた一部でしかない。女の人達は「政治」つまり天下国家の問題のことで——男の領分だからワタシ知らんワと思っっている人が多い——というのがつまり「女は政治がキライ」という論なのだと思う。これを男の側にヒックリ返して見ると「家庭内の雑事や子育てとかP・T・Aなんぞ男子たるもののやることかオレ知らん」になる。

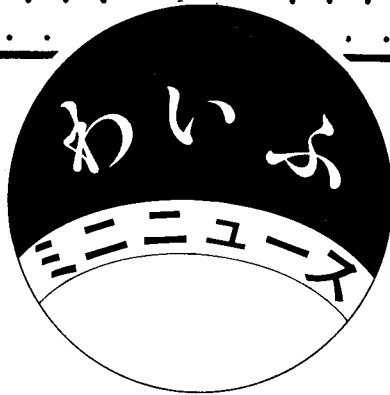
この二種の政治の男女役割分業のようす、ずっと何千年かこれだて来てるんだからいいではないか？ と「めんどくさい論」がすぐに出て来るが、やはりよくない。

女のほうでどれだけ「愛が、家庭が、子どもが、結婚の神聖を」と男の誠意とかに訴えても幻滅させられる悲劇が後を絶たないの、しよせんは男どもにとって天下国家こそがオレの生きる場所であり、家庭なんぞ寝室か食卓か風呂トイレでしかないからだ。

女の側も「お国だのお政治だのヤヤコシイし、駆け引きづくめでキタナイし、考えるのも関わるのもいやだわ」と戸閉りして、家の中だけきれいにたのしく暮らしていても、しよせんは天下国家の下のこと、いつなんどき「政

治」の台風や地震で「家庭」の屋根が吹き飛び、柱が折れ崩れるかわからない。

それでも少し昔までは、天下国家の荒れ日以外は「家庭のささやかな幸福」は安泰だったが、文明生活の現代はかえって日常的に脅かされる事柄は増えているようすなのだ。電気・ガス・水・食品・教育（学校）これら皆「政治」の問題そのものであり、まるで私達は政治を燃やして煮炊きし、政治を食べて、政治を着て、政治で洗濯し、子供を政治に生ませてもらって、政治んどこに通わせて……とアアもうヘドが出そ……本当なんですもう。家庭の幸福なんて主婦一人ガン張ったって守り切れるものじゃない——というわけで、大貫さんも私もかつて「東京ガスK・K」が「天然ガス転換」工事強行をした時、「東京電力K・K」がいかかわしい料金値上げをした時、自分の家のかわらが吹き飛んでそこから「なんだなんだ？」と身を乗り出して、ついに天下国家と対決しちまって、ついでのことに離婚もして、崩れた家は取り片付けて、家内中で天下国家の直下に住むことになった。詰めて話せば、大貫淑子さんの立候補までのそれが道筋だったのです。



●指輪がぬけないヨー！
昭和五十七年の一年間、東京消防庁に「指輪がぬけない！」とかけこんだ人の数、およそ七百人。原因の第一位は肥満。第二位は

●優生保護法改悪、逆転抑えこみ
「経済的理由」による妊娠中絶を禁止しようと「生長の家」が音頭をとり、「生命尊重議員連盟」を作って法律改正に動き出した大キヤ

むくみと、ために無理にはめてとれなくなった場合。その他やけど、骨折、突き指など。

消防庁いわく、イチイチこちらにかけこまなくとも、そんな場合はできるだけ百貨店や貴金属店のリングカッターでやってもらいたい、私どもにはもっと大事な役目がある、と。そうだらうな！。

無理にはめてとれなくなった場合はすぐに指にコールドクリームをぬると意外にスムーズにとれる。弄りまわして指が腫れてこないうちに、この手で早目にとることに。

ンペーンが、三月の国会で一時期棚上げ。これも女たちの運動のつき上げがあればこそ。

「生長の家」では中絶反対の署名七百万人を集めたと豪語、「議員連盟」の結成大会の壇上に署名簿を山と積み上げて氣勢をあげていたが、これが見せかけだけの紙の

●軽いタバコも実害は同じ
肺ガンがこわくて低ニコチン・低タールの軽いシガレットを吸っている人の数は世界中でうなぎ昇り、八二年までの十五年間で三倍強の五九兆にもふえている。とこ

ろがカナダのタバコ専門家、W・リッカート氏の研究によると、軽いので本数もふえ、吸い込み方も深いので結核には害は同じだという。ムム！。

(ウイニベグ時事)

●女同志の熱いたたかい

武蔵野市の職員の退職金問題をめぐって、火つけ役の婦人有権者同盟を批判する声がチラホラ。

四千万円もらうのが何がわるいんですか」と舌鋒鋭いのが埼玉県会議員の小沢遼子さん。

「市政をよくする会」のやり方がいかり立つのは夫に養われている主婦。だから主婦はイヤ」といって、「掃除婦のオバさんが退職金う。あなたはと思う？」

山。実際に厚生省に持ち込まれた署名数は百万人そこそこ。

町村、反対二二六市町村。形勢はまさに逆転、ヤッター！

自民党内には森山真弓議員を中心に中絶禁止に反対する議員連盟も結成され、女性グループや医師たちの反対運動も盛り上って、三月末には反対署名は一四四万、地方自治体での決議は賛成一二九市

投稿ホットライン——ずっとこけた・ぶつたまげた・頭にきた・ジーンときた

エッセイスト・クラブ

あの日のこと、この日のこと、つれづれなるままに……書いてみよう。
読んで面白い、読ませて喜ばれる、大傑作集

パセリどろぼう

大阪府豊中市

高宮みか

イタリア・パセリの種をもらった。
勝手口を出たすぐのところに、買って
きた土ねぎが束のまま埋めてある。
パセリが四、五株植えてあり、とうが
立ち花の咲いた株の根もとに、来年の

ための新株がもう育ってきている。そ
んな裏庭のあるくらしが理想的なのだ
けれど、出口も入口も一つしかないア
パートの二階ぐらしではそうもゆかな
い。仕方がないので花のおわったプラ

ンターをほりかえし、腐葉土などを加
えて地ならしをする。

パセリが二年草であることは知って
いたから、種は半分まいた。残りは来
年まக்குりである。こうすると、あ

とは放っておいても次から次へ落ちた種から芽がでて、遠慮なく葉が摘めるという計算なのである。

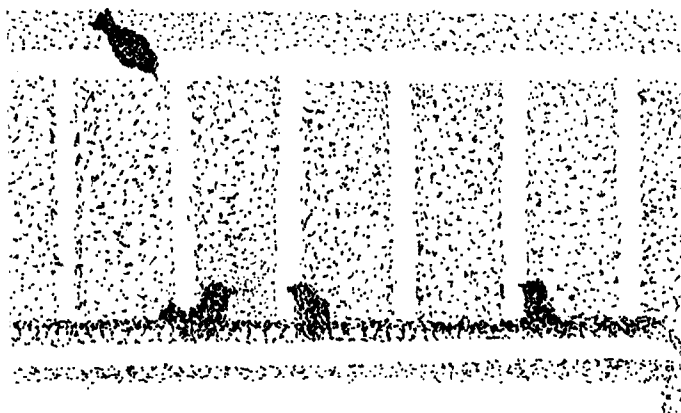
水をやり、やりすぎやしなかったかと心配し、そうこうしているうちにうれしやほとんど透明に近い、うすみどりのものが、によきにょきとでてきた。こうなると、コンクリートで固められたベランダも、呼吸をしているという感じになってくるから不思議である。

透明なうすみどりの茎から、くしゃくしゃ縮れた双葉がでてきて、ほんの二、三日で、パセリと違ってみれば、確かにパセリらしい葉がでてくる。水を朝に晩にかけてやりたいのだけれど、ジョーロのやわらかいシャワーでさえ、根まで洗いだされてかたむいてしまうのもあり、いけない、いけない、と自制する。

朝起きると一番にプランターをのぞく。

しまった、種をまくとき、ここに少

し固まりすぎた。こっちはまばらだ。プランターにみどりの地図があらわれてくる。まだ葉は二枚ずつしかついていない。うっかりひっぱったら根ごと抜けてきてしまう。



だんだんみどりが濃くなって、そうなるベランダにパセリのプランター一つでは物足りない、もう一つプランターを並べよう、何を植えたらよいか。考えているうちにまた二、三日がすぎ、パセリの丈がのびて、みどりの地図は色がますます深くなる。双葉のまん中に、またみどりのくしゃくしゃしたかたまりがでてきているのである。

ある朝、ベランダに向いた戸のブラインドをそっとひいてのぞいてみると、すずめが四、五羽きている。プランターのまわりをチュンチュンと歩いている。

わあ、パセリのみどりにきてくれたの。新芽をつついて食べる気かな。パセリの香、きつすぎない？ わ、ケチ。パセリの新芽をつつかれたくないんでしょ。ちがうわよ、うれしいじゃない、これでも立派にみどりという証拠だもの。少しならどうぞ。

そんな期待と心配の入りまじった日があつて、突然、なにかみどりの地図に異変を感じた。ころなし、うすはげができてゐる。次の日もやっぱりそう思う。昨日よりも一つみどりがうすい。

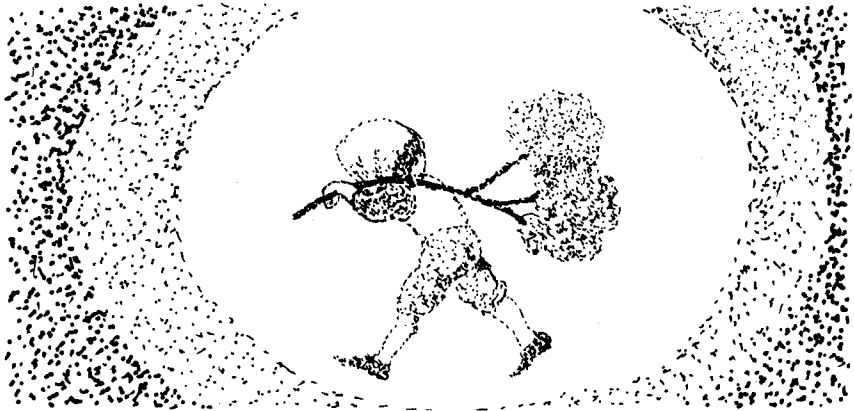
ついに近目用のめがねをだして、プランターの側にしゃがみこんだ。みると茎だけが立ってゐて葉のないものがある、ここにもある。

青虫でもいるのだろうか。そう思つて注意深くみつけたが、虫らしきものは影も形もみえない。

やっぱりすずめだろうか。でも葉をついばんでゐる姿はみなかったし、それにこのところ訪ねてきた様子もない。

日中、パセリを好物とする虫がどこからか飛んでくるのだろうか。

翌朝、起きぬけにベランダにとびだして驚いた。もう疑う余地はない。何者かが私のパセリを食べてゐる。プラ



ンターのみどりは昨日にくらべて明らかに減り、うすみどりの茎だけが寒々と身を寄せあつてゐる。

もう許せない。誰だ、私のパセリを、それも新芽のパセリを盗む奴は。

まさか、とは思つたが、ベランダから首を出して下をのぞく。一階の住人が優先的に庭をつかつて、花など植えるのを羨んでいた気が裏がえしになつて、もしや下の花壇から虫が這い上つてきたのかと恨みがましくのぞいてみたが、とてもとても虫が這つて登つたり降りたりできる距離ではなかった。私は一日、落ちつきなく過した。

ひんぱんにベランダをのぞき、飛んでくる虫がいるなら現場をおさえるつもりで、戸を開けておいたり、閉めたりした。そんな日に限つて小鳥一羽、飛んでこないのはどういふわけだろう。夕刻になると、夕暮れを好む虫はいないか思案し、夜行性のゴキブリがパセリを好むか疑問に思つた。

まる一日が過ぎて、やがて夜になった。残された道は一つしかない。

台所もすっかり片づき、明日のお弁当の米もとぎ、時計を何度も見上げて待った。頃合いもよしと立ち上ったのは、十時もまわってからである。

食卓の上を広々とあけてから、ベランダへでるとブランターを両手で持ちあげた。一刻の猶予も与えてはならない。私は蛍光灯かがやくテーブルの上にブランターを置いた。

「ウヒャー」

やっと五センチほどにのびたパセリの茎に、いるわ、いるわ、茎の太さの数倍もあるいも虫があちらの茎にピタッ、こっちにもピタッ、とへばりつき、葉を食いつくしたパセリの茎をまだなめているらしい。みるからに憎らしい暗褐色の虫で、灰黄色のたて線まではいっている。

ねらい通りだったのだから、驚くに



は当らないと思えるのに、思わくが当りすぎて悲鳴をあげた。

憎らしいいも虫は、その名のとおり夜盗虫といって、ヨトウガの幼虫なのだそうである。昼間はだいたい土の中にかくれ、夜になるとでてきて野菜類を食害するという。最近では防虫剤で簡単に駆除できるが、昔は、やっぱり、夜、懐中電燈をもって畑へ行き、一匹一匹みつけて退治したものだという。

「やっぱり、昼間は土の中にかくれていたんだ、誰か捕ってえ！」

私の悲鳴に、息子が割箸で一匹一匹、ひねりつぶしながら捕ってくれた。

それから十日ほどたって、うすはげは消え、見事なみどりの地図が復活した。それから日ごとに力をつけ、やがてしめじのバターのために気前よく放りこまれたり、スープの身に浮いたりして、私の期待にこたえてくれている。

我が愛車、その名はポンコツ

神奈川県横浜市

渡辺コト

わが家の車を黒地に赤の水玉模様
に塗り替えてみようとは思ひもしないが、
もし、そのように塗り替えたとしたら、
てんとう虫そっくりの格好になると、
思うことがある。車の色は初めからグ
レーで、今ではどう見てもあでやかで
はない。しかも、だれの目をも驚かせ
るのは神奈川県ナンバーのプレートが付
けていることである。いかに古いかを
このナンバープレートが証明する。と
ころが、エンジンは好調子で出足のよ
さはまことに快い。外見はポンコツ車
のようでも捨て切れない思い出と愛着
がこもっている。多分これを廃車とす
るときは、わたしの肉体が廃車同様と
なるときだろうと思っている。

ある親戚にこの車に乗って行くこと

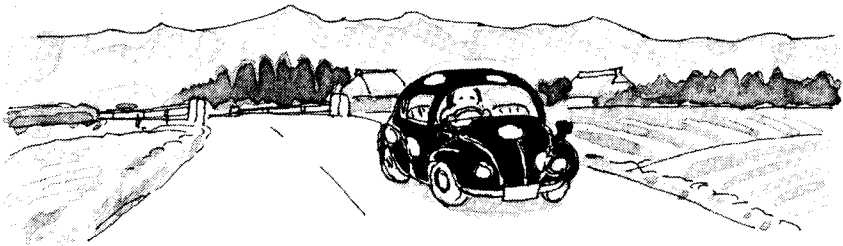
がよくあったが、そのたびに、その
甥に「おばさんいいかげんに車を買
い替えたら……」と笑いながら言われ
たものだが、それから何年かたったの
ごろは、その同じ甥が「おばさんこの
車を盗まれないように気をつけたほう
がいいよ、今はね若い人たちがこう
いう小さい車を赤や真黒に塗って、ド
ライプするのが流行していて、こう
いう車を欲しがっている人がいっぱい
いるから、高く売れるんだよ」と、そ
んなことを言う。「からかうんじゃない
よそれ本当かい」と答えながらも、世
の中の変わっていくさまをつかみきれ
ない自分に、ふっと気づくのであつた。
わたしが車の免許を取ろうと思つた
のは、夫がときどきひどいぎつ

り腰になったので、そのたびに自動
車があつても運転ができなため、リ
ヤカーを引いて山坂のある田畑に行
かなければならなかつたこともあつ
て、骨が折れるうえに仕事の能率が
あがらない。そこで何としても免許
をとらなくてはならないと思うよう
になったのがきっかけで、そのころ
の家庭状況からでは、到底自動車学
校へ行かれるはずがなかつたので、
運転免許を取るための問題集や、必
須法規と構造を解説したある参考書
を買ひ畑仕事の行き帰りにトイレの
中、舅や姑の腰をもみながらその問
題集などを読んで暗記をした。人のあ
まり通らない山路を抜けて田んぼに
行くとき問題集を読みながら歩いて
いると「あらよおコトさんおめえ

は二の宮金次郎みてえじゃないかよ」と言われびっくりしたのもそのころであつた。その人は近所でも親切で世話やきのおカネさんというおばさんだったが、もうこの世にはいない。

運転技能は畑の道で夫に教えてもらった。長いことかかつてようやく念願がかない神奈川県警自動車試験場で合格し、免許を獲得できたときはうれしかった。そしてかえりみて、努力のかがあつたことに感慨無量なものを覚えてた。

免許証はすぐ生活に役立った。秋には稲束を運び、堆肥運びや野菜を売りと仕事の能率が上がり自分にも張りができた。そして老いた義父母の言うがままに病院へ鎮守様へまたドライブへと乗せてよるこんでもらつた。なかでも姑が半身不随となり寝たつきりになつてから、時どき鎮守様へお詣りに連れていってくれと頼まれるようになった。身体のきかない姑を毛布にくる



み、夫と二人で車に乗せ夫が運転してわたしが姑を抱え、鎮守様から屏風ヶ浦方面をドライブして帰るようになると、車の中で「ありがとうよありがとうよ」と姑は声をつまらせて泣かれた。わたしは「おばあちゃん泣いていたんじゃ外の景色が見られないよ、ほら外の景色をようく見てね」と言いながら姑の頬に流れる涙を拭き共に泣いた。運転している夫も泣きながらハンドルを握りしめていたのではないかとこのごろになって思うようになった。今も車にのるとその時の姑の泣き声が聞こえるような気がする。

義父母が他界して何年か後に実家の母が倒れて亡くなるまで、六日に一度ずつ泊りがけで母の看病に行き、母を喜ばすことのできたのも、夫の理解と車があつたお蔭で悔を残すことがない。たとえ外形は小さなボンコツ車に見えようとも、捨て切れない思い出のかずかずは、乗せきれないほど詰まっている。

(え・早乙女光子)

少年非行は日教組のせいではない！

風間ゆり

一八二号の誌上論争「少年非行の原因を探る」を読んできました。岡田氏のお話は細かい点では、ある程度共感できる部分もあります。ですが大筋で全くまちがっていると思われるのです。駒野氏の言い分は正しいと思うのですが、もう少し切りこんでほしいかと思ういます。読んでいるうちにカッカとなってペンをとりましたが、やはり未熟者です。水ももらさぬ論陣など張れるわけがありません。

無学な一母親の教育に対する関心と情熱をくみとっていただければと原稿用紙を二十数枚も反故にしてこの一文をしたためました。

岡田氏の言う、
競争原理のない
教育ということに
対しての疑問。

岡田氏は学校の経営に関する部分で、学校を民営化して、競争原理を導入して良いものだけを残すと言っておられます。その上教育内容についても、競争原理のないタマリ水のようなものと言っています。本当に競争のない教育が行われているのでしょうか？氏は学校経営の競争と子どもひとりひとりの発達の過程での競争と同じに考えているのでしょうか？ 次の例を見て下さい。

「中学校へ入ったんだから、今までのような生ぬるいことでは駄目ですよ。きびしい競争があり点数で進路が違ってきます。あなたたちの点数は、好むと好まざるにかかわらず、社会では金に換算されます。点の少ない者は安給料しかとれませんよ」私の息子が中学校へ入った時の担任教師の言葉です。

「点の一点や二点と馬鹿にするな。その一点二点で、大学入学のランクが異なってくる、一流大学に入れないと、さきへ行って年収何百万の違いが出ることを忘れるな」高校教師

の受験への励まし（？）の言葉です。

そして教師自身は「○○校から△△高校へ何名合格、進路指導教師何野何夫先生」ということで他校と競争しています。教師や学校の「上級学校合格者数競争」のために、子どもは、行きたい学校への志望をさまたげられ、望みもしない学校へ無理に願書を出させられたりして、暗い学校生活を余儀なくさせられています。

「僕たちはまるで競馬の馬のようなものだ、一列に並べられ追いたてられる。目の両側に目かくしをたてられ、ただひたすらに走られる。何のため走るのか考えることも許されず、ただ走らされる。勝った馬はみんなにほめそやされるが、負けた馬は見向きもされない。負けた馬だってせいはいっぱい走ったというのに……」この悲痛な声は、高校三年で大学受験に失敗した子どもの作文の一部分です。こんな教育を何年となくつづけてきたのは誰ですか。岡田氏は競争原理が教育に大切な

ことのように言っていますが、このような競争原理で教育された子ども達のうめき、なげきが、たまりたまつて、今のような非行多発の時代をつくったのではないのでしょうか。

しかもこのやり方は決して日教組がはじめたものでないことを私たちは知っています。文部省の指導通りにやっていますと主張している教師たちの手で行われているのです。親が何を言っても「教育委員会の指示通りにやっているんですから……」という答しか得られないのです。

学校の秘密主義、 事なかれ主義は、 誰が つくりだしたのか？

岡田氏の出された例は必ずしも、その学校だけのものではないことを私どもは知っています。どこの学校でも多かれ少なかれあると

思います。それを他人事のように言っておられる岡田氏の神経にはおどろかされます。校長も注意出来ない内部事情をつくっているのは何なのでしょう。どうして秘密にしておかなくてはならないのでしょうか？ それは、学校が管理統制されているからではないでしょうか。つまり文部省がこわいから……ということです。

私の子どもの小学生の時の経験ですが、子どもが校庭でケガをしたと、報告が校長室に入ったのです。丁度私はその場に居ました。PTAの副会長をやった時なので何か校長をまじえて会議をしたのです。

「教育委員会への報告はうまく出来る状態ですか、保健室の先生と連絡とってうまくつくって下さい」

これが第一声でした。ケガの程度も、子ども状態もききませんでした。しばらくたって言い訳がましく「何しろ教委がうるさいもんで、事故があるとまっさきにそのことが頭に浮かんで……」と言ったものです。

校長がその通りですから下も右へならえ……

……子どものことを考えるより上っ方のおぼしめしが気になるのです。教育内容についても又しかりです。

あるお母さんは、あまりにも子どもが算数を解らないことにあきれ、自分で少し勉強して、子どもに教えてみたそうです。とてもよくわかったので母子ともに喜んで宿題にとりくんでいたら、学校から呼び出しを受けたそうです。担任教師いわく、

「このやり方は、文部省で認めていない○○方式です。こんなことを教えては困ります。今後一切こんな事しないで下さい」

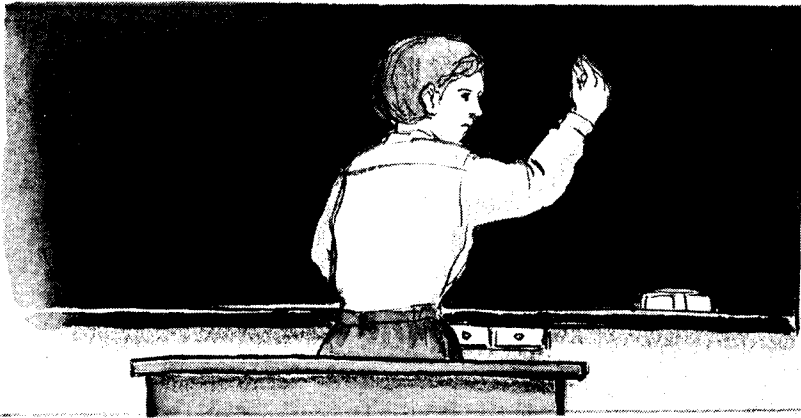
文部省のおめがねにかなわないことは一切まかりならんという事でしょうか。子どもにとつて解ることより、文部省の思惑の方がさきなのです。

こんな形で教育がすすめられているのですから、子どもが良くなるはずはありません。まずい事はみんなかくし、表面だけつくり自分の学校の優秀さを誇示する。それが良いことと信じてうたがわれない……その結果が学校の秘密主義となってしまうと私は思います。

ある面では岡田氏のいわれるように公立であることが、学校をだめになっているという事が真実であることは認めざるを得ませんが、それは日教組によってそうなったのでは決してありません。文部省が、権力に物言わせて子どもを（国民を）統制しようとしている（教育を通じて）からではないでしょうか。そしてその文部省は、さらに他の誰かの意志によって動かされているとは思えません。

教育の荒廃は 日教組の せいではない！

岡田氏の言うところによると、日教組というものは余程おそろしい、大変な力のあるものなのですが、果して本当なのでしょう？ 私は今まで本当に子どもの事を考え、子どもに解るように教えてくれる素晴らしい教師を何人もみてきました。前に誌したようなつまらない言葉を出す教師に失望しながらも



なおかつ学校教育に信をおき、のぞみを託す気持をすて得ないのは、今の学校にも良い教師はいるし、努力していてくれる教師もいる。という事実があるからです。私の経験ではそういう教師は教員組合の活動もしっかりやっている人たちでした。日教組の教師が教育を革命の手段にしようとしているなどと岡田氏は言われますが、私の経験では、そういう教師に全く出合ったことはないのです。

次の事例は日教組活動家の教師のエピソードです。その教師は若くて独身の男性で、愛想のない父母受けのしない人でした。彼が中学三年を受持った二学期、十一月頃、結婚して休暇を五、六日とりました。当然親たちの中に不満の声がでました。

「あと一月もすれば冬休みなんだから、そのころにすれば良いのに……この大事な時期にねえ……」

ところが、受持たれている子どもからはねかえて来た言葉……。

「あの先生に限っては絶対そういうことを言ってもらいたくないよナ。あの先生は、生徒

のために不利なことは決してしないんだ。ちやんと学級生活にも、学習にも支障のないように準備してくれてるんだから……」

休暇をとる前に、生徒たちと話し合い、予定をたて、教師は生徒を、生徒は教師を信頼の上でのことだったのです。帰ってきてから昼休みや土曜の午後を利用して、休んだ授業の補充までやっています。この教師をみて誰が日教組の組合員だから教育を革命の手段として使つてると言えるでしょうか。

駒野氏のおっしゃる通り、教育の実践の問題に関しては、組合員も、非組合員もないと思います。

教科書の検定はきびしくする、指導要領の拘束力は増す、勤務評定で教師をしばる、更にこれからは教師の免許状まで段階つけて、教師の世界に差別をもちこもうとする……。

こういう力で、教育を型にはめ教師の自由な発想をさまたげているのは文部省ではありませんか。今私たちの見るところではこれをねつける程の力が日教組にはありません。

こうした上（まさにおかみです）からの教

育で私たちは、軍国主義少女に育ち戦争に何ひとつ反対せず、むしろ喜んで、あの地獄のような戦争にはまりこんでいました。教育を通して、子どもを一定方向に持っていくことの出来るのは権力としての文部省の方であり、決して日教組ではないと断言できます。

岡田氏の拠って立つ 教育の基本は、 どこにあるのですか。

このことについていろいろ言いたいのですが、この対談の中に出てくる岡田氏の言葉の中から、どうしても……と思われることを出してみます。

。文部省がつくる学習指導要領などの目安は平均の知能より少し低いところで作っているんじゃないかな。

。私は校長としていろんな学校を回りましたが、ひどいところ、ドサ回りのひどいところばかり回されてね。

。皆さん塾やおけいこごとで、大変なお金を

使っていらっしやるじゃないですか。

。弁解するのもおかしいが、むこうが（こま書房）資料を持って来たんですよ。ちよっと私もうやらしいと思いましたが。もっとひどいのがあったんだ、教師にワイロを送る法」という……それはもう断然ことわって書かなかったです。

以上の言葉からみる限り、教育者としての良心はどこにあるか？ と言いたくなります。日本の未来の国民の一人一人がかしく育ち、立派にくらしていくために、私たちは、税金を払い、よりよく教育してくれる専門家（教師）の手に我が子を託しているのです。

その取りまとめをするために文部省は必要なのではありませんか。それを平均より低い知能を目安にしてる指導要領とか、まるで自分が不当な扱いをうけているかのように、ドサ回りのひどいところとか……。どんな地域にでも人びとの真剣な生きる努力はあるのです。その人たちの子どもはやはり大切な日本の国民なのです。まるで自分がそこへ回されたことは自分の価値をみとめていない誰かのせい

のような発言は、そこに生きる人を馬鹿にしていることはありませんか。

たとえその地域がひどいところだとしてもそれは子どものせいではないはず、大人の世界が荒れ汚れている、そのすがたが子ども達に反映しているのです。教師はその子どもたちのために存在しているではありませんか。校長は、自分も一人の教師として部下の教師といっしょに、実践にとりくむべきでしょう。悪いのは日教組だなんて言っていないで……。

良い教師を育てることこそ校長のつとめではありませんか。

子どもは大人のすることを見て育ちます。少年の非行はすべて、大人の非行を見ながらいると言えるではありませんか？ 権力に弱く、金力を崇拜し、出世をめざし、弱い者は切りすて、もうけのための手段はえらばず、自分のしたいことのためには相手の立場を無視する……こんな状況が充滿している今の世で、子どもにだけ「清く正しく美しく」と望んだって無理でしょう。子どもと一緒に苦しみ、一緒にたたかってくれる大人を、子



どもは欲しているのだと思います。

公教育がだめだから私塾にしろなどいい加減なことを言っている、国民すべて教育を受ける権利がふみにじられます。国民一般の生活をもっと知るべきでしょう。

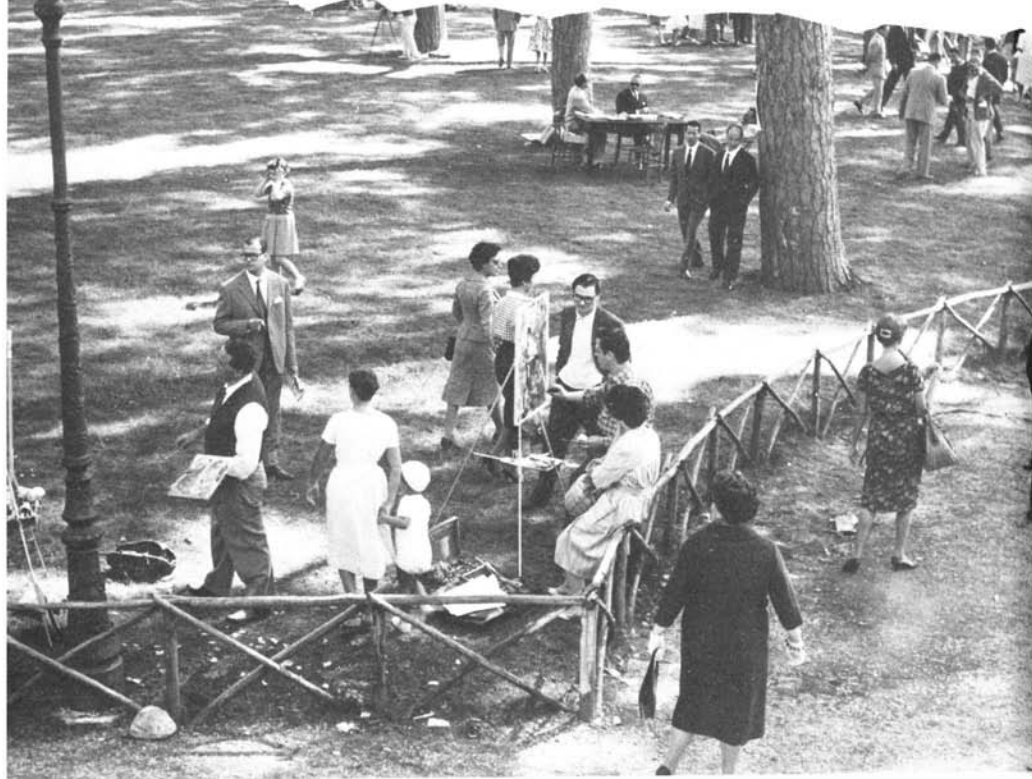
世に書物を刊行するのに出版社受けするものを、とのが先行している（金になる俗うけする）ことを教育者として恥じませんか。

最後に、岡田氏よ、二言目には「日教組がわるい」と言っておられますが、日教組が困難の中で、教師が人なみの給与を得る、ことに（それも良い教育をしたいからこそ）一所懸命になったことの結果として、校長の処遇も著しく向上した事実をどう思われますか。

まだまだ論じたいことはたくさんありますが、字数に限りがあるので又の機会にします。因みに申し添えますが、私は教師をしたこともなく、まして日教組員であったこともありません。不勉強故の誤解がありましたら、いづれよりのお叱りも甘んじて受けます。

（え・早乙女光子）

私を見たイタリア



私を見たイタリア家庭

在ミラノ

矢島みゆき

ついこの間までといってもよい、イタリアという国は、いくつかの都市国家の集合体だった。

統一後わずか百年。言語、食物、習慣、思想、各地方でてんでに違うイタリアを、ひっくり返しては語れない。

だからここに記すのは、ここ四年間で私が見た、イタリア北部の人々の話である。

●主婦は家庭で大働き

七時〜七時半 起床。コーヒー、ビスケットの朝食。夫と子供も一緒に。

八時 夫と子供は家を出る。小学生は親の側に付き添いの義務がある。

九時〜十一時 掃除。じゅうたんを叩き、窓ガラスを拭き、床を磨いて家

具を整える。洗濯機をまわす。

十一時～十二時 食品の買い出し。

十二時～十三時 昼食の準備（スパゲッティかごはん、肉、野菜、お菓子、コーヒー）。夫、子供は帰宅する。学校は普通、午前中のみ。

十三時～十四時 昼食。夫は再び出社。

十四時～十六時 子供の勉強を見たり、話相手になったりして過ごす。

十六時～十八時 アイロンかけ。買物。午前中やり残した掃除など。台所の掃除は毎日、念入りに行なう。（レンジはどの家でも新品同様である）

十八時～十九時 夕食の仕度。夫の帰宅。

十九時～二十時 夕食。

二十時～二十二時 夕食の片付け。子供の面倒を見る。時に友人がやってきたり、夫婦で芝居やオペラに出かける。

二十二時三十分 就寝。

●まかり通る男らしさ女らしさ

イタリア人の夫婦は、一般に妻と夫の役割を明確に固定した関係にある。

従って、彼らは常に妻と夫あるいは男と女の一对を単位として行動する。旅

も、パーティへの参加も、友人の家を訪ねることも、レストランでの食事も（イタリアのレストランで女一人の食

事するのは何ともバツが悪い。どの店も一対で食事する客が圧倒的に多い

からだ。一人で入ると、当然の如く、レストラン中の人々の視線を浴びてし

まう）カフェに女一人で座ろうものなら、娼婦と間違われかねない。既婚

の女性の一人旅は浮気を目的にしたもの、と彼らの発想というのは飛躍する

のである。

若い世代の間では次第にこうした人間関係は崩れつつあると聞くが、私の目にはまだまだ根強く残っているよう

に映る。

そもそも彼らの人間関係は、性そのものをなかにして成立しているようだ。男も女も、自分の性を深く意識している。セックス・アピールこそが重要な魅力のポイントなのだと考えているようでもある。

セックス・アピールに溢れ、服や持ち物の趣味が良く、また何故か身長が高いことがより素敵な存在なのであって、才知にたけているとか、仕事ができるとか、判断力が適確であるとか創造力に富むということなどは、その後問題とされることなのだ。

女は自らを「弱い者」と規定しており、男のことを「強い者」と信じている。

女は一人で旅などするものではないと信じているし、女が重たいカバンなど運ぶものではないと思っている。扉は男が開けるもの、レストランや劇場は二人で出かける場合でも男が決め、男が予約を入れるものと信じている。

伝統的なレースあみにいそしむ



列車に乗っても、まだビチビチとした二十歳前後の女の子が、自分のカバンを自分で持ち上げようとはしない。男性の方も心得たもので、見ず知らずのその女の子の重たいカバンを何も言われずとも引き上げてやるのである。

混んだバスの中で、足を踏まれた女性には周囲も驚く程の声を上げるが、自分が男性の足を踏んでも決して謝りはない。踏まれた男の方が謝まったりするくらいである。

地図も時刻表すらも読めない女性が

いかに多いことだろう。しかも彼女らはそのことに、いささかのやましさも恥ずかしさをも感じていない。なぜならそうした行為は男の仕事と心得ているからである。新聞を読む女性が少ないのも同様なことである。

その代わり、彼女らは料理と家のインテリアに関しては一家言を持っている。それこそが女たるにふさわしい能力と規定しているのである。

男は男で自らを「強いもの」と信じており、女を弱い者とみなしている。従って、男は家事や育児のできる必要はないが、それ以外の大方の仕事は自分がやらねばならないと気負っている。妻に何かを聞かれた時、少なくとも何かしらの解答を与えられねばならなくと考えている。

女の期待を一身に背負ってがんばっているのがイタリヤの男性である。そういう妻と夫の関係である。

●日本なみ「女は家庭」の思い込み

当然、外で働く女性の数は決して多くはない。近年、毎年二十%近いインフレで経済的に困窮し始めた都会生活者の中に、パート・タイムで外に出始めた女性も出てきたが、考え方の根本はさして変わっていない。

全国五五四〇万人の女性のうち、五分の一弱の千二百万が主婦といわれる。働く女性の割合は進歩的な都会人が多いと言われるミラノで五割。その他の都市では二割しかない。平均三割の就業率である。

不況で働き口が少ないということもあるが、それよりも意識の問題だろう。夫の賛成が得られないのであれば、妻は外で働くべきではないと考える女性、三十五歳以下の人でも四十二%あり、五十一歳以上の女性では六十九%がそう考えている。というアンケート結果もそれを裏付けている。

●大人になりたい子どもたち

子にとって親は絶対的な存在である。法律的に成人と見なされる十八歳までは、親が服従を命じれば、子はそれに従わざるを得ない。

親の言葉ひとつで子供達は親の手伝いもすれば、イスに座りもする。

バカンスや週末を家族と離れて友人と過ごすようになるのも二十歳以降のことだ。

親の権威が絶対的なので、親の客が来れば子供も部屋から必ず出てきて挨拶をする。客のコートを預かるのも子

供の役目である。客の退出時にも、再び子供達は部屋から出て来て挨拶をする。

着る物も子供の時代には、皆質素である。金持ちのお洒落なブルジョワ連中の子供でも、九十七％は安いベネトンやフィオルツ社の服を着せられている。デートで外出しても門限がはつきりと定められており、十二時頃まで外出できるのは週に一度、土曜日だけのことだ。お小遣いも実に少ない。

彼らはこうして子供の頃から、早く大人になって親のしているように自由に着たい物を着、食べたい物を食べたい時に食べられるようになりたいとい

う願望に支えられて育っていくのである。

●ひげ面の息子を可愛がる「マンミズモ」

イタリアの親子関係を語る時、母親と息子の関係を述べることを忘れるわけにはいかない。

妻との関係で、常に子供のような妻を親のようになって面倒を見なければならず、子供に対しても強い父親でなくてはならぬ男達が、心の慰めを求めるのが母親の存在である。

「マンミズモ」

母親からいつ迄も離れられない傾向をイタリアではそう呼んでいる。

バスの中でひげ面の息子の顔をなでる老婆の姿を見かけることもあれば、母親と腕を組み、まるで恋人のように歩く大学生の息子の姿に出会うことも少なくない。

長い旅発ちの前と後の、息子と母親の抱擁は一段と長い。





料理をとりわけるのは夫

五十歳になっても六十になっても、男達は何か起きればすぐに母親に相談する。

日本の男性の場合も、深層には同様な部分を持っていると思うが、日本の家庭では、妻達がこぞって母親の役目までも引き受けているし、また実生活において幸か不幸か、女が男に期待す

るものも少ないから、せいぜい「おふくろの味」が恋しいくらいのことと済むのかもしれない。

イタリアは上記のようにマンミズモが強い国であるから、当然嫁と姑の間には相応の波が立つ。

しかし、彼ら自身、それを知っているからだろう。最初からお互いの同居を避けるのである。近くに住み、週末に食事を一緒にすることはあっても一緒に暮らすことはない。

●これはこれなりのイタリア的 バランス

彼らの生き方は確かに世界中の動きと比べると、一歩ずれているかもしれない。しかし、私には、イタリアの場合、これはこれで十分にバランスのとれた男女の暮らし方、つき合い方をしているように見える。

男と女、妻と夫の間の力関係、それを補う男あるいは夫とその母親の間の関係。そして妻あるいは母と彼らの息

子との関係。

それらが決して細切れにならず、うまく連鎖してバランスを保っている。

法的には離婚も認められていれば、育児休暇も有給の六カ月の他に一年の無給休暇がどんな職業の人にも与えられているし、賃金も男女間に格差がないなど、随分改革された内容を持ち始めている。

そうした主張を行なうのは、ほんの一握りのフェミニスト連や進歩的男性達だが、そのパワーが強力であるからこうして改革が進んでいるのである。しかし、残りの多くの人々は、そうした恩恵を時とすると知らないまま過ごしてしまっている。

彼らにはあまり必要のない問題なのである。彼らの心を本当に揺さぶるのはかえって、税金や政治の混乱、マフィア事件などであって、彼らは現在の日常、彼らの置かれた各家庭の在りようを自信を持って享受している。



ロックよ、静かに流れよ



文●吉岡 紗千子



運命の夜

十月も半ばに入ると、朝晩はめっきり冷え込む。それでいて日中は、晴れていると汗ばむほどの陽気だ。標高六〇〇メートルのなせるわざである。私がほかほか亭へ出発する午後三時半は、そんな暑さと寒さのせめぎ合う時間帯だ。

徒歩で二十分余り、バスもあるにはあるが一時間に一本、それも時間通りには来ない。自分の足がいちばん確かだ。果樹園をつつ切って近道する。ぶどうもりんごも摘み取られたあとは、コスモスの天下になっている。

四時五分前、店へ入ると休む間もなく床磨きだ。リノリウムの床には、昼の奮闘の跡が浸みついている。何よりひどいのが油だ。おかずの殆んどが揚げものだから無理もない。

空いている時間に、これを片づけて

おかないと大鍋を抱えたままズデーンということになる。洗剤を撒き、デッキブラシで入念にこすってから、ざあざあと水を流す。

五時になると、一人二人とお客があらわれる。ついこの間までは午後六時から二時間が混んだのに、日没が早くなると時間に関わりなくお腹が空くらしい。科学万能時代と言っても、人間ってやっぱりお天道さま次第なんだ。

センセイのバイト禁止令が続行中なので、月金はトモと私、木金はミネと私が夜を固めるメンバーである。

十月二十六日火曜日の夜も、トモと私が配置についていた。「今日はヒマだね……」と言い合っているとき、ふいにバイクのとどろきがして「ヨッ／＼元氣？」とトンダがやってきた。

無期停学中の彼は、とうとう堪忍袋をちよん切ってしまった。今日退学届を出してきたところ、と威勢良くまくし立てる。ぶらぶらしているわけにいかないの、アルバイトを探しに来た

のだと言う。うーん困ったな。この小さな店に学生が四人、パートのおばさんが私を入れると五人、ひしめいている。

それに何といってもトンダだ。ケンカっ早さと腕つぶしの強さでは右に出るものがない。それが理由で停学になってしまったのだ。どうひいき目に見ても客商売向き、とは言えない。

そこへ店長があらわれた。井当屋の看板みたいに肥った体に、これまた太い腕を組み合わせて困っている。別に困ることはないのだ。

どんな素晴らしいコックでも今は入りこむ余地がない、そう言って断れればいい。しかし、店長は何か組み込むと首をひねっている。男氣というのも辛いものだ。

ああでもない、こうでもないと言い合っている時間もそう長くはなかった。信州大学の学生がドカンと二十個の注文を持ってきたからだ。それも、カレーが二個、かき揚げ弁当が三コ、のり

弁当一コ……という具合だ。

それと一緒に店内を走りまわる。トンダも入りこみたい一心で手伝ってくれるが、要領をのみこまないのがウロウロしたって邪魔になるばかりだ。

八時をまわってまたヒマになる。店先で再びすさまじいバイクの音がした。あらわれたのは思いがけずミネさだ。十月に入ってから「バイクに乗りてえ」と幾度かつぶやいていた。でも、それは高校生の合言葉みたいなものと聞き流してきた。心も猫背でオジン奥い彼にはやっぱキーク、キークと鳴る自転車似合いだ。

ミネさの背後には、中学・高校と一緒にのI君がいた。ヘルメットを小脇に挟んで、二人とも一流のバイク乗りを気取っている。「ちょっとそこら廻ってきたとこ……」ミネさの顔がいつになく上気している。

トンダが先聲を吹かす。「今日は『安全日』で、おまわり出てるぜ、気

いつけるや」ミネさは「うん」と頷くと「ほいじゃあ」と出てゆこうとする。店長が、その後姿に声をかけた。「ヒマなら手伝っていけや」

「うん」とも「いや」ともつかない声をこもらせてミネさは出ていった。

店先のガラス戸越しにI君がバイクにまたがるのが見えた。その後ろでミネさは、新しいおもちゃをもらった子供のようにつめた。手まで振った。

「おい、どうかしてるじー」そう思ったのはトモだけではなかった。ミネさが、あんな顔をして笑うなんて、手を振るなんて、考えられないことだ。バイクの轟音が去ってゆくのを聞きながら店長が言う。「あいつ、何しに来たのかなあ……」

「アッ、いきなりトモが飛び上る「あいつら無免だじー」

「ちえっ、どうりで嬉しそうなのさ。あ」トンダがブッシュマン頭を抱えこむ。「つかまるくらい、どうってこと

ないけどさ、学校へ知れたらエライぞら」トモの心配も、もっともだ。「良くて謹慎、悪くすりゃあオレみたいになるぜ、まして無免じゃあな」とトンダが言う。経験者の言葉には、ずしりと重みがあった。「まったく考えなしだ」店長が心配顔でまた腕を組んだ。

バイク、バイク、寄るとさわるとその話題だ。彼らにとってバイクは自分の力を数倍にふくれ上らせるマシンだ。生命すれすれのところで味わうスビード感、それはこたえられない魅力にちがいない。かく言う私も二タ昔前「カミカゼ」と呼ばれる猛烈スキーヤーだったのだ。

トンダは店長にくどくどと頼みこんで帰っていった。「あいつが入ったら店の風紀が乱れるじー」、トモが自分のことを棚に上げてこきおろす。と、今出ていったはずのトンダが店先のガラスを叩いてわめいている。「奴ら、



つかまってるぜ」

「なにーっ」 店長が横とびに外へ飛び出す。私もトモも後につづいた。

「すぐそこさ、信大病院の前で……事故ったのかもしれないねえ」 トンダの言葉に私は身ぶるいした。「ミ……ミネさは……？」 声が震えているのがわかった。

「居ねえんだよ、Iの奴しか……」

トンダの顔が妙に赤い。「あ……あいっ……意外と逃げ足早いから……なあ」 トモの声も震えている。

「オレ、もう一べん見てくる」 ト

ンダはまたバイクにまたがった。「氣いつけるな」 トモの声が妙にカン高い。「俺も行って見るわ、知ってるおまわりがいれば何とかなるかも知れねえしな。あと、頼むで」 店長が自転車でトンダの後を追った。

トモと二人きりになってみると、にわかに胃のあたりがシーンと冷たくなった。ソクソクと背をはい上る悪い予感、私は急いでダイヤルを廻した。息

子のシュンスケは、毎日六時から八時までスイミング・スクールにいる、丁度、帰宅するところだ。とにかく知らせておこう。ミネさは彼の親友なのだから……。わけのわからない電話をかけたシュンスケは「すぐ行く」と言うなり電話を切ろうとする。私は思わずトモと同じ言葉を呼んだ。「気をつけてねっ！」

月が出ていた。冷たい光がかえって闇を濃くしていた。木々のシルエツトが禍々しく黒かった。

バイクが帰ってきた。トンダはヘルメットも取らずに怒鳴る。「ミネさ救急車で運ばれたって……お城の側の病院へ……」

「怪我したの?」「どんな具合?」トモも私も飛びついて尋ねる。「何もわかんねえ、Iの野郎はピーピー泣いてるし、おまわりは知らん顔だし……でもさ、ミネさの靴が片っぽだけ、すげえ遠くにころがってて……」

トモがガタガタふるえ出した。

「オレ、病院行つて見るわ、電話すぐ入れるから……大丈夫、骨の一本や二本、どうってことねえさ、男だもんな」ヘルメットの中でトンダは無理に笑った。

九時近くになっても電話はかかってこない。店長もあれきりだ。トモはカウスターにつかまって外をにらみつけている。

ようやくシュンスケがやって来た。

バイクが撒きちらしたガソリンの後始末をしていたのだという。「大丈夫さ、信大病院の前で事故ったんだ。大怪我ならそのままそこへ入ってるはずだろう。お城の方まで運んだってことは、たいしたことないんだよ」シュンスケがくり返して言う。そうならばよい、そうあって欲しい、いいや、そうに決まっている。明日になれば、ミネさの奴をドジ、マヌケとののしってやれるさ。

電話が鳴った。トモが飛びつく。

「はい、ええっ! そ……そんなあ……ウ……ウソーっ、からかっているんだろ」私の脳裏に電話の向方の人物が浮かんだ。ミネさだ。ちゃっかり家へ帰りついた彼が、ニコニコとしゃべっている、今までの心配なんて、みんな嘘なんだ。振り向いたトモの顔は笑っているように見えた。

「ミネさ……死んじまったって……」誰も何も言えなかった。

タクシーにトモとシュンスケを押し込むと私は店のシャッターを閉め、ネオンを消した。片づけて、そうじして……手を動かしていよう。店長が戻るまではここを動けないのだから……。

「人間って、やり直せるんだね」とミネさが言ったのはつい三日前のことだ。「あたり前じゃない」と答えた私の言葉は彼に届いただろうか。

成績が悪い、親や教師に逆らった、

人をなぐった……彼がやったのはどれ
も、ささいなことだ。一度ワツと叱ら
れれば帳消しになることだ。しかし、
そう言えるのは私が大人になっている
からである。

十六年の経験しかない子供にとって
は、そのささいな出来事こそが大問題
であり、再びやり直せない汚れなのだ。
「敗者復活」と高らかに叫んだトモも、
同調して笑ったセンセイやシュンスケ
も……あのトンダさえもが、こうした
重い荷を背負っている。「ツツパッて
なきやあ、やってられねえや」……そ
ういうわけなのである。

だがミネさは誰よりも先にそれを吹
き飛ばした。吹き飛ばせる自信がつい
ていた。「やり直せるね」と言ったと
き、彼は過去よりもっと大切な未来
があることに気付いたのだ。ことばに
ふさわしい自分になるための道すじが
見えていたはずだ。

その晴れやかな視界を、もう誰も見
ることができない。

私が病院にたどり着いたのは十時近
くだった。廊下にセンセイ、トモ、シ
ュンスケが寄りそって立っている。ト
ンダもいる。

大人たちの泣き声の中で彼らは誰も
泣いていなかった。四人とも目を光ら
せ、こぶしをふるわせている。あまり
にも理不尽な事実を腹を立てているの
だ。

途切れ途切れにトンダが説明してく
れる。「Iの奴が、自転車を避けそこ
なって……電柱に……百キロ超えてた
みてえ……それで、ミネさがふっとん
で……首と腹打って……オレが来たと
きは、まだ心臓動いてて……」

I君の方は全く無傷なのだと言う。
床にしゃがみこんで泣いているのはI
君のお母さんだ。しきりにあやまって
いるのだからが嗚咽で何を言っている
のかわからない。ひれ伏すように頭を
床にすりつけては泣いている。たまた
ない重苦しさが立ちこめていた。

処置が終ってミネさが運び出される。
両親が抱きかかえるように車に乗せる。
真新しい浴衣を着せられたミネさは、
お祭りに出かける子供ののように幼く
見えた。白々と輝きのない月が中空に
大きかった。

その夜シュンスケも私も眠らなかつ
た。だからと言ってしゃべる気もしな
い。言うべき言葉などなかった。

とうに夜半をすぎていた。玄関の鍵
を掛け忘れたのに気付いて立った私に
シュンスケが言った。「今夜、本の続
き借りにくるって……そう言ったんだ、
あいつ……だからさ……」

私が貸した「龍馬が行く」一巻から
四巻までを一週間で読み終えたミネさ
は、今夜次の巻を借りたいと電話して
きたのだという。彼のことだ。ひょっ
こり入ってくるかもしれない。いつも
のように照れながら……。

その夜、わが家の玄関は、来るべく
もない人を待って半開きのままだった。

ロックよ、静かに流れよ

翌朝、朝刊を開くと三面記事の下段に小さな記事があった。「高校生バイクで死亡」たった二十行のありふれた記事の中にミネサの名がある。どこにぶつけようのない怒りがこみあげてきた。

私にとって仲間たちにとって彼の死はニュースでも事件でもない。身ぐるみの体験だ。魂の奥底まで震わせる深い悲しみの体験なのだ。彼が死んだ、という事実でなく、いかに生きたかを知らせたい。

ふと二カ月前を思い出した。郷土提言賞、そうだ、あれがあった。毎日新聞社ならば、それができるかもしれない。

電話に出た支局長は事故のことはすでに知っていた。しかし、まさか論文と結びつくとは思ってもいなかったらしい。「あの論文の代表者が……」

そう、私はそう言って欲しかったのだ。支局長は必ず記事にすると約束してくれた。

十時にオバが息せき切ってやってきた。長野市から飛んできたのだ。眠らない赤い目だった。「ゆうべ、病院からトモが電話してきてね、よっぽどタクシー飛ばそうかと思ったんじ、でも母ちゃんに叱られちゃった。途中で事故でも起きたらどうするって……そうだよな、いくら急いだって、どうしてやりようもないんだもん」彼も私と同じ想いを抱いているのだ。

屋近くトンダがやって来る。今日はバイクの音をさせない。バスで来たと言う。彼の家は松本市でも南のはずれにあるので二本乗り継がないと、ここまで来れないのだ。「だってさ、ミネサの家の人、バイクの音聞きたくないだろう……」

午後になるとシュンスケとトモが連れ立って帰ってきた。二人は同じ高校へ通っているのだが、どうやらしめし

合せて早退したらしい。しばらくしてセンセイが細い体をふらりとあらわし、これで全員が揃った。

それでなくても狭い四帖半は、完全に満員だ。それなのに一カ所、ちょうど一人座るだけ無理矢理に空けてある。わが家へ来ると、決まってミネサが座るあたりだ。

オバが野球少年特有のしゃがれ声でまくしたてる。「トモの電話じゃあ、さっぱり訳がわかんなくて病院に電話したんだ。そうしたらさ、看護婦たら『ちよっとお待ち下さい』って言ったまんま、もう一人の女とべちゃくちやしゃべって、おまけに笑いやがんの」「あー、あんな時な。ツッパリの死にざまなんてこんなものって……そういう目付きだったじ」とトモが頷く。

「ひでえよなあ」オバが悔しがった。「ひでえのはサツさ」トンダがつづける。「まだ心臓マッサージしてる最中だってえのに、トランシーバーをガアガア鳴らして、ドカドカ入ってい

きやがんの、それも一人や二人じゃないんだぜ」額に青筋が浮かび上っている。「こっちは必死でさあ、助けてくれて折ってるのに……何とも思っちゃいねえんだ、あいつら」

「いったい何しに入っていくわけ？」私には信じられない。「事故報告ってヤツだろう、つまりさあ、まだ死なねえかって……」トンダの目にはつきりと敵意が見えていた。「何てこと、時と場所もわきまえないで……ルールを教える側じゃないの」。私はトンダの顔をのぞきこんだ。

「へえーっ、とんでもねえ、ルールもへったくれもねえよ。バイク乗っててせめられるとき、スピード違反も何もしてなかったって、『この小僧』だぜ。ちっとでもオーバーして見なよ、いきなり襟がみつかんでパトカーにひきずりこまれるんだ。逆らったら足ばらいかけておいてブンなぐる」

「まさか……」と言う私にセンセイが話し始めた。「それ本当だよ。オレ

がバイト禁止になった事件、知ってるじゃん」

自転車を盗んだ友人をかばってセンセイは警察へ引っぱられたのだ。「あん時なんてさ、取り調べ室へ入った途端にブンなぐられてね、座ってるイスをケツころがして、床にひっくり返されたんだ。オレ死ぬかと思った。それでさ、ほら、ここにね」センセイは膝の下に黒ずんだ傷跡を見せた。

少年法では、保護者の立ち会いなしで取り調べはできないと聞いている。私にはまだ信じられなかった。「それはさ、現行犯じゃない場合さ、スピード違反も自転車ドロも現行犯じゃん、だからだめのさ」トンダが言った。目もくらむ怒りが私の体をつきぬけた。何が補導だ、何が保護だ、無垢で柔かい心に、傷を負わせておいて……。さらに気に入らないのは周囲の大人たちだ。この事実に対して怒らないことだ。教師も親も、子のまちがい責めたてるので手いっぱいだった。まちが

いはまちがいとして叱ってもよい。しかし、それ以前に、彼らの人格を守ってやるべきではないか。

そうか、取り返しがつかないと思わせたものの、敗者だと言わせたものは、こうした積み重ねなのだ。病院の廊下で異様に目を光らせて怒っていた彼らの表情が、ありありと甦った。

友の死を心から悼み嘆いて素直に流す涙こそミネサにとつて最大の手向けである。しかし彼らは泣かない。心が悲しみていっぱいなのにどうしても泣けないのだ。大人が大人として、その役目を背負わない間は、安心して子供らしくなどってはいられない。

この子たちが心を開いて涙を流す日は、いつになったら来るのだろうか。暗たんたる想いで私は目を閉じた。その夜納棺が行われた。一同は遺体を守って一夜を明かした。

次の朝、まだ朝霧が立ちこめている中をオバとシュンスケが帰ってきた。

他の連中は弁当屋へ行ったという。

「ええっ？ トンダも……？」と私。

「ミネさの代りだっって言ってきかないんだ」シュンスケが答える。「ほら、選手交代、まるっきり、そんな感じだったじゃない」オバがいかにも野球少年らしいことを言う。そう言えばそうだ。ミネさがトンダの場所を空けてやったような気がする。「あいつ、そういう奴だもんな」シュンスケが遠い目をした。

ミネさと組んで働いていた夜、私は手に軽い火傷をしたことがあった。それからの数日、彼は一度も私に水仕事をさせなかった。片っ端から彼がやってしまうのだ。「オレがやってやるよ」なんてことは一言も言わずに……ミネさはそういう奴なのだ。

次の日は本通夜であった。各々に受付や案内などの役割りがあるので、またまたわが家へ集合となった。

弁当屋の方はこれで二日休ませてもらう。パートのおばさん達が無理算段

してくれているらしい。私と学生四人、いつもの人数の半分以上が休んでいるのだ。今朝早くトモたちが働きに行っただのも、こうした埋め合せのつもりだろう。店長の言葉が泣かせる。「めったにあるこっちゃねえんだ、できるだけのことをして、心残りのないようにな」ここは大人が皆でふんばって見せなければならぬときだ。

通夜の手伝いに出かけてゆく一行の背に私は怒鳴った。「いいわね。今日は手伝いが終わったら、まっすぐ家に帰るのよ、いくらなんでも三晩徹夜はダメよ」

それなのに、またゾロリとつながって帰ってきた。「今朝言おうと思って忘れちゃったけどさ、オレたち決心したんだよなあ」オバがどっかと座りこんだ。「うん、そう、ミネさに誓ったんだじー」トモがオバの隣に座る。「バンドやるんだ、ミネさがやりてえって前から言ってたから……」セン

セイが細い体をオバとトモの間にすべり込ませる。「それから本も出す、そうだな」トンダは威張りくさって、オバの隣に座ろうとする。「あーっ、バカ！」トモが指さして叫んだ。トンダがあわてて飛びのく。そこはミネさの指定席なのだ。「追悼コンサートさ、恰好良いだろう、母ちゃん」シュンスケがオバの大きな尻を押しつつ座る。おやおや……寝てないくせにバカに威勢が良いな、私は隅っこに小さくなって一同を眺めた。

「コンサートは年内に、本は一周忌までに」オバが力をこめて言う。

「これ、オレたちの宣戦布告」うーん、私はこみあげる涙を必死に飲み込む。ミネさのために、してあげられることがあった。彼らはそれを見つけた。怒って、怒って、そのあげくに宣戦布告か。何というパワーだろう。

「でもさ、オレたちだけで言っただって、いつの間にかウヤムヤになっちゃうと思うんだ、だからね、毎日新聞

の人に聞いてもらいたいわけ」オバの
声に「うーん」と私は再びうなる。宣
戦布告というのは公示されなくっちゃ
あ意味がないものね。

新聞社にしてみれば、いいかげんに
してくれと言いたいかもしれないが、
彼らにとって甘ったれる場所がある、
わかってくれる大人がいるということ
が最大の強味なのだ。支局長は「いい
かげんに」などとは言わず、すぐに
若い記者を派遣してくれた。

宣戦布告を記者に宣言した一同は、
ますます意気揚々となった。少年らし
い冗談がとび交い始めた。でも、彼ら
はまだ気付いていない。宣戦布告した
からには、闘わなくちゃならないの
だということに……。そして闘う相手
は、無礼な警官や間違った社会ではな
く、自分自身だということに……。

「バンドやるったって、いったいど
うやって……？」 にぎやかな話題に
切りこむには大声を出さねばならな
かった。懸賞金の半分をドラムに注ぎこ



んでおきながら練習のレの字もしていない。ギターの弦が何本あるかも知らない連中だ。

「大丈夫、オレが教えてやるぜ」

フオークギターの名手を自認するトンダが早くもリーダー面をする。「やりやあできる」トモも安うけ合いだ。

「でも……ベースギターは？ ミネさがやるはずだったんでしょ」と私。

「オレやる」思いがけないセンセイの声だ。いつになくきっぱりと言いつつ切った彼の口ぶりが私を驚かせた。センセイの称号がつく以前、彼は「のたり」と呼ばれていた。のたり、のたりとして責任とか努力とは程遠いタイプなのだ。「こいつ、やるって言ったんだ、ちゃんとミネさの前で……」とシユンスケが肩を持つ。「やりやあできるさ」

またトモが言った。「そう……それじゃあ、できるってことにして……何やるの？」私は心配でならない。「もち、パンク・ロックノ『モッズ』ってゲループの曲」トンダが答えた。やっぱり

ね、そうくると思った。「ミネさのカセットに入ってたんだよ、『モッズ』が……一晩中ミネさと皆で聴いてた」シユンスケが説明する。

「でもさあ……」トモがしんみりした顔をする。「オレ、ロックがあんなに静かで寂しく聞えるなんて思ったこともなかったじー」

すさまじいパンクの叫び、それが静かだと思えるほど寂しかった、悲しかったのだ。遺体を前にひっそりとうずくまる四人の姿が目に見えなくなった。

私は覚悟を決めた。下手でもいい。追悼にふさわしくなかつたって構やしない。生きている君たちがミネさのためにしてあげられる精一杯のことなんだものね。

翌日、葬儀が行われた。秋の陽が寝不足の目に痛い。広い会場は黒衣の人人で満ちていた。その中でひとときわ目をひく派手な髪少年がいた。金、緑、ピンクの三段染めわけである。「あい

つバカだよな、ここへ来るためにわざわざあんな頭してさ」トンダがひどく優しい声で言った。その髪は以前ミネさがやってみたいと話したものだ……ここにも自分にできる精一杯をやっている子がいたのだった。

友人代表のセンセイが弔辞の中で、きっぱりと追悼コンサートを宣言した。

ーつづくー

一九八三年一月十日

兵器製造人七百人の宴が開かれた。

新兵器を高々とかがげ

しかも民衆の面前で 堂々と。

一九八三年一月十日

この日は死の商人達の宣戦布告の日だ。

宣戦布告じゃなければなんですか。

防衛庁からやって来た二百七十九人の

顧問や相談役が揃いました。

七四式戦車 一台三億四千万円

三百九十台作るそうです。

ミサイルのエレクトロニクスは

日本の最先端、最優秀の技術だそうです。

小銃は遅れた兵器 それでも五千五十挺。

空中早期警戒機E2C 九機輸入

一機百二十二億円しめて一千九十八億円

等々。

今、世界の軍事費は六千五百億ドル

今、発展途上国の累積赤字は六千億ドル

そして今、現首相のもと

防衛力強化の講演は

「堂々と遠慮なく進めて行く」

と元防衛庁長官のたまわく。

これが、宣戦布告じゃなくてなんですか。

四方を海に囲まれ

やさしい気候に守られた

この国のわたしたちは

一見平和に見える日常の中で

苦しい国の人々を

思いやる想像力を枯らしてしまった。

空中早期警戒機E2C

九機のお値段は

十万人の難民が

約一年 生きのびる金額。

父よ 母よ 語ってください

あの戦争で

あなたの息子たちが失くした命のことを

あなたの娘たちが流した涙のことを

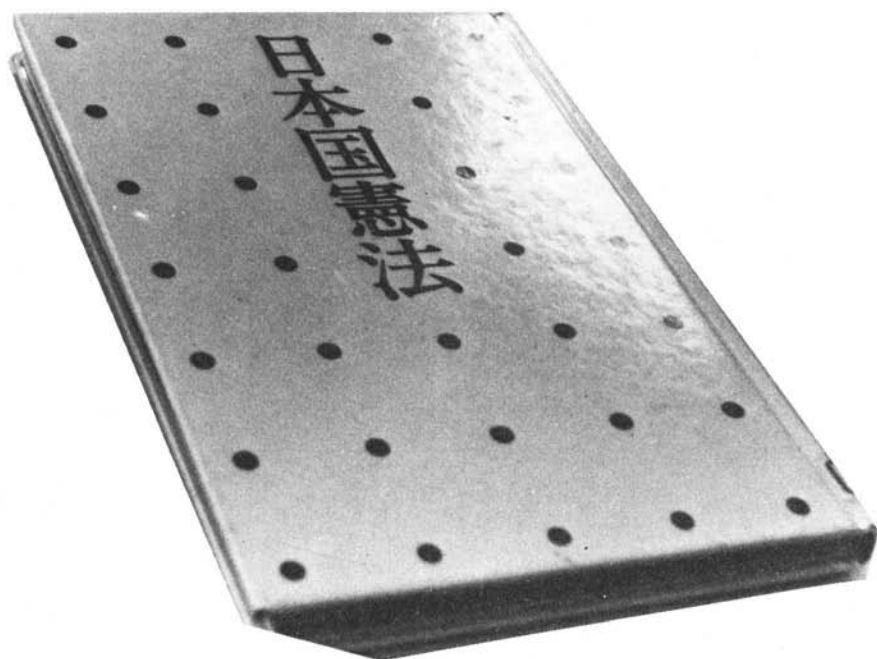
どんなに多くの人たちが

無念の死を強いられたかを。

赤い水玉表紙の憲法を愛する

今、歌わなければ

東京都新宿区 西村香那子



デジタルな、クリスタルな恋人たちよ
しっかり記憶してください。

「われらは、全世界の国民が、
ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、
平和のうちに生存する権利を
有することを確認する」

第九条は

宇宙の意志

地球の希い

生命の祈り。

わたしたちが立ち上がるのは
今日ですか。

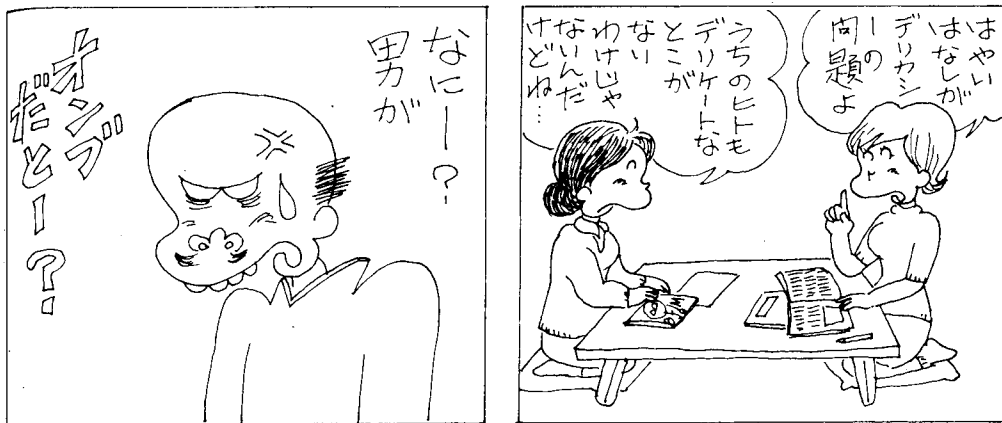
明日ですか。

もうそれ以上は待てない
遅くなってしまいうから。

平和の歌が歌えない
自由の歌が歌えない
そんなふうになってしまいうから。

(写真・長野早紀子)

禁止 禁止



投稿ホットライン——可愛さ余って憎さ百倍

うちの悪ガキ

うちの子に限って！の大集合。汝の敵を愛すべからず……

恩を仇で！わが家の名犬

東京都渋谷区 野本美希子

一人っ子である息子の情操教育のためにと、

シェットランドシープドッグの仔をもらって

きたのは息子の十一歳のときでした。それ以

来この犬は、家族の一員として元気に育ち、

現在では十一歳の老犬です。

コルトーと名づけた彼は、息子にとくにな

ついていました。いくら叱っても、息子は彼

をねどこの中に入れ、いっしょに寝ることを

やめなかったのです。

息子も中学から高校へ進み、人並に狂瀾怒

清の思春期の最中には、ずいぶん荒れていた

ことがあります。

私が意外に吾気にこの時期をきりぬけたの

は、忙しい仕事を持っていたからでしょう。

もっと息子の身辺に目を光らせていたら、

さぞかし無数の「悪事」が見つかったであ

しょう。知らぬが仏で、幸いでした。

わが家は三世代同居で、私たち夫婦は二階

を占拠し、階下には私の父母が住んでいます。

昔ながらの広い木造家屋は、廊下ばかり多く

て使える部屋が少なく、ふとんべやや女中べ

やは北側で、陽も射さず、物おき代りになっ

ています。

ある日の昼下り。二階から降りようとする

と、コルトーが妙に色めき立って私の足もと

をすりぬけ、トントン体をさかさまに急な階

段をかけ下りるのです。オヤ？と思ううち、

階段の下を一目散、玄関の横手を曲って、座

敷の北側の廊下の裏にあるふとんべやへ。

変だなーと思いながらついて行きました。

見るとコルトーはふとんべやの閉め切った

障子の前で、クンクン鼻をならしながら、し

きりに尾っぽをふり立てている。

あーっ、これはおかしい！ピンときた。

ガラリ、障子を開けると、案の定！

学校へ行っただばかり思っていた息子が、



フトンをかぶって寝てゐるではないか！

悪いやつめ！

天網恢々疎にしてもらさず、可愛がってゐた愛犬に、嗅ぎつけられたとは！

となりつけても、息子めヘラヘラ笑ってゐ

現代つぎ当て考

埼玉県江南村 志村もと子

小五の息子がめずらしく氣弱に「お母さん
ボクの学校ズボンさ、六年生の人に笑われた
」あてつぎ「って」

つぎ当てのことをあてつぎっていうのも現
代的かなと思ひながら「何言ってるの、穴の
ままだとだらしないうて笑われるけどキチン
とつぎあてがあるんだもの、どこがいけ
ないの。それがどうした」っていつてやん
なさい」

「そんなこといったら泣かされるよ、相手は
六年生だよ」とほんとに切なさう。これには
日ごろホンネで迫っている私としても胸キュ
ン。いつもだといひようにかまわれている小
三の弟もこの時ばかりは兄貴に加勢して、つ
いにつぎ当てのものは家庭着にすることで意
見が一致。

る。私もしまいはずかしくなつて笑い出す
始末。犬の鼻ってホント、すごいものですねえ。

このわるガキも今は大学三年、しごくまっ
とうな人間になつてゐる感じ。全く思春期の
男の子って、始末のわるいケダモノです。

学校側もそれなりに物を大切にするという
指導をして下さつてゐるようだが、ジャージ
の制服、それもズボンのお尻のつぎ当てとな
ると私のやりすぎかも知れない。

ふだん着よそゆきの区別をキチンとつけて
何でも姉たちの手作り品で過した少女時代が
亡き母と共に想ひ出されて胸がいっぱいにな
つた。

息子達にとつてもはや私は「昔の人」にな
りつつあるのかも知れません。

我が家には、割とよく人になつた、ヤギ
(メイ子) アヒル(あつ子) チャボ(ゆりち
ゃん) ニワトリ(ひい子) 犬(じゅり) ふな
(ふな子) がいます。

編集部のみなさま、いちどあそびにいらし
て下さいね。それぞれにとてもかわいいですよ。

むかし話はむづかし話

東京都府中市 赤井久美子

たまには昔話など聞かせてやろうかと……

「昔々、あるところに おじいさんは山に
柴刈りに……」「どうして山に行くの？ 芝
ならお庭でしょ」「その芝じゃないの。柴っ
ていうのはね、小枝のことだね……」すぐに
ひっかかつてしまつて、話がなかなか進みま
せん。

氣がついてみると、今の子供達には、昔話
にでてくるわからない単語がとても多いので
す。カマド、つづら、ウス、キネ、コツチ、
ナタ、クワ、ワラ、井戸、炭……なんと灰ま
で知らないのです。絵本をつかわずに昔話を
聞かせることは、大仕事なのです。

あなたなら
どうしますか——？

千葉県千葉市 白木紀世子

ある朝、家の前の道路で耳をつんざくよう
なちびっ子の泣き声でした。どうしたのかと
部屋の窓を開けて往來を眺めてみると、三歳

位の男の子が二人とどちらかの母親らしき人が立っていた。激しく泣いている子に、

「どうして泣いているの……」と問いかけている。「タカちゃんが頭たたいたの」ヒックヒックとしゃくりあげながら子供が説明している。タカちゃんというのは、私の家の斜め前の三歳十カ月の子供、側にいるのがタカちゃん之母親です。その母親は「トモちゃんは男の子で強いんだから泣かないんだよ」と泣いている子をなだめている。ママそこまでは子を持つ親なら一度や二度は必ず体験すること、

うちのワルガキ20歳

小学校三年。肥料のビニールのおき袋に小石をつめこんで腰にまきつけ、フーフー言いながら庭をぐるぐる走りまわっている。運動会の足ならしという。

遊びは小川での魚取り。汚れた体で私の顔みるとウィンクして意気揚々。メダカ五〜六匹、オタマジャクシ少々で大満足。汚れ足をよく洗いもせず風呂場から台所へ直行、冷蔵庫に首つっこむ。

勉強が嫌い。学習塾はたのむ、やめさせて

どこでも見かける風景ですね。ところがその後が問題なんです。

「トモちゃんは男の子なんでしょ。男の子だったら、なぐられっぱなしでメソメソ泣いていちゃ駄目。タカちゃんがたたいたなら、トモちゃんも負けないでたたきかえしてやりなさい」と三歳になったばかりの泣いている子に言いつけて、自分の子供をひっぱってスタコラスタコラ家に帰ってしまいました。

この母親がとった態度は正しいのでしょうか?!

茨城県真壁郡 飯島まつ

くれよと手を合わせ、黄昏時にはTVのマンガをみて一人で笑っている。

いつ勉強していたのやら、ママアアの成績で高校へ。

朝七時になるとばあちゃんが耳元で「時間が来たよ、目をさませや」「あと二分」「あと二分過ぎたぞや。目をあけるや」「あと二分」飛び起きるとさあ忙しい。顔だけペロンと洗って朝食なし。カバンの中は楽しいペンントウだけ。その楽しみは二時間後庭の片すみで

腹の中。昼は牛乳とパン。小遣い不足になると部屋の入口に質上げ要求のプラカード、私が入るとウンというまで指を差す。

高校生活でいうことには、オレの学校は男ばかりでつまらない、昼のペンントウだけが楽しいんだから美的感覚を考えて、アルカリ、酸性バランスよく、体力づくりに協力たのむ、にアレマア、と親がおどろく。

ある日曜。ネボケ顔で、母さん今日はPTAだよ。八時半からだよ、連絡用紙なんかない、学校へ行けば皆ソロソロ行くから分かるよ、と自分は寝てしまう。行けばなるほど、皆がソロソロと、私はポカン……何と授業参観日だったのだ。マアーマアアと思っていると先生が傍に来て「飯島は？」とささのことで正直に「家で眠っています」。まわりは大笑い。あとで「母さんだけでは来ても意味ないだろ」と注意あり。

高校二年、ペンントウの楽しみがオートバイに変化した。日曜ともなるとわが家の庭に十台、二十人が集合する。近所の眼差しすさまじい。ムリもない、ごう音にTVの横ぶれ来るべき時が来た。「今日はハンコ持って学校へ行ってくれよ」と。様子がおかしいは



ず、行先は校長室。親の後ろに子供が十人。次々と校長から注意され番がきた。

「飯島おまえ規則違反のオートバイ売ってしまえ」「ハイ先生もう売却済になりました」

「お母さん、本当ですか」

後ろでムスコが私の洋服を引っ張る。

「ハイ、そうです」「よかったですね」で次の番へ……。

帰宅後誰に売却済みなのときくと「だって父さん名義のだから、オレに売ったのさ」

こんな調子で成績表は自分で捺印、学校へ提出、たまに尋ねると「落第しねばいいべ」とのんきな話。

何とか卒業、運よく第一銘柄の会社へ入社。良い先輩に恵まれ良いポジションにつけた様

現代っ子と思いやり

もう四年も前のことになる。

末っ子がおいしそうにおやつを食べていた。私が買っておいちたものであるからつい私の好みも多分に入ったお菓子であることは否定できない。

「おいしそうね。お母さんも食べたいわ」

子。相変らず「目をあけるや、目をさませや」帰宅すればベコだよめしと椅子に座る。

身長一七八体重六九キロ。母さん身長オレより三十低いのに体重は五キロの差、運動不足だよといひながら、一緒に食事をする、うまいよ、オレが買ってきたもの食べなよ食べなよと優しい。

ある夜夫が酒気をおびて息子のへやへ、一緒に飲みに行こうと誘いかけると、ＴＶと電灯パチンと消して「オレ明日会社だから悪いけど寝るよ」夫手探りで肘鉄くったよと出てくる。五分位過ぎるとまた灯りがついてＴＶの音。私心中コリッパノと彼の前途を祈るのです。

東京都台東区 久保安子

ひとつふたつ心よく譲ってくれることを信じ切っていた。

「うん、おいしいよ。お母さんも食べると良い。お金出してごらん。僕がひとつ走り買ってきてあげるよ」

私は一瞬ぼんやりしてしまい、

「わざわざ買って来てくれなくてもいいわ」と、慌てた。

「ひとつかふたつちょうだいよ」

「いやだよ」「まだいいじゃないの」

「えーっ／＼」と末っ子は不満気で、

「そんなに食べたいのなら、お母さんの分も買ってあげばいいのに／＼」

と私を見詰めるその瞳には蔑みの色さえうかべている。

末っ子の持ち合わせている思いやりは、私のためにひとっ走りお菓子を買って来てくれることであって、自分の持ち分の中からひとっふたつ譲ってくれることは、思いつきさえしないのだ。

末っ子の顔に、昔の私の顔が重なって浮んだ。小学校の修学旅行最後の日、旅館で作ってくれた折り詰め弁当を公園で食べていた時のこと。都会の公園では浮浪児や浮浪者がまだまだうろついていた不幸な時代であった。

私より三つ四つ上だろうか、ひと目で浮浪児と思われる女の子が私に近づいて来たのである。

「そのパン、あそこに居る弟にやってくれな
いか？」と、ふりかえって指差す方を見ると、

五・六歳とおぼしき男の子がうずくまって私の方を見詰めている。いやに大きな目の子だ。元氣のない黒い目、じっとただ私の方を見詰めている。

「私達、今朝からまだ何も食べていない。お願いだからそのパンを弟にやって。ひとっただけで良いから」

ほんやり男の子の方を見ている私に向かって女の子は懸命に頼み続ける。このパンをくれと言うのか。セロファン紙に包んで、母が旅行のおやつにと持たせてくれた三つのパン。女の細腕で精一杯調べてくれた日頃なじみがたいおやつは、キャラメル一箱とこの甘食パンのみ。キャラメルはどうに食べてしまったが、このパンはこのまま持って帰ろう。そして母と兄と私でひとつずつ食べよう。そう心に誓ってお弁当の度毎に、リュックから膝に出しては眺めて楽しみにしてきたこのパンを。

あげられないわ／＼でも朝から何も食べていないなんて可哀そうに。あげよう／＼ゆれ動く私の心を見透かしたように、今にも手を伸ばさんばかりにして女の子は頼み込んで来る。

ひとっただけあげよう。膝からパンを持ち上げた。男の子の目がじっと私を見詰めている。生氣のない大きな目。可哀そうだからあげることは良いことだ。でもでも、あげたくない。お母さんにぜひ食べさせてあげたい。パンを膝に下ろして少年を見る。私だってお兄ちゃんだって食べたい／＼またパンを手を持った。どうしよう、どうしようと思いぬく。驚いたことに、あの時ほど迷いに迷って断を下す必要が生じたことは、それから私にはかつて無い。「あげない／＼」叫びざま私は急いでリュックの中へパンを仕舞い込んでしまった。

別段がっかりした様子でもなく、わかっていたように男の子はそっと私から視線を逸せた。とうとう嬉しがることも悲しがることもしないままの日だった。怒ったように女の子は、山積みして捨てられている折詰から、ひとつひとつ輪ゴムを外して自分の腕にはめ始めた。

「まあ／＼あげれば良かったのに／＼」

帰宅後の母のひと言で、私の中でひとつ増え、二つ増えていた悔いの気持は、全身に満ちた。

怒ったような少女の顔と、気力なく見開か

れていた少年の大きな瞳は、折にふれ私の内に甦る。あの目は終生私の生き様を見詰め続けることを止めないだろう。

朝から何も食べられない不幸を、私は知らなかった。その悲しさを身にしみて思いやることが出来なかった。昔の私も末っ子と何ら変わるところはないのだ。

ただ見過し得ないと思えたのは、自分の都合をふりかざすことに、末っ子がうるめたさを覚ええない、覚える必要のない環境におかれているということだ。自分の手元にあるものを、ほんの少し分けてあげるといふ、これほどかんとんに示し得る思いやりを、子供に植えつけられない私の育てかただった。よほど傑出した人物ならいざ知らず、私と息子ごとき凡愚の者は、環境や経験で全てが決まってしまう。思い到った人から見れば、思い到らない人の何とみにくいことだろう。恐ろしいことだろう。

私を見詰めた末っ子の蔑みの瞳は、改めてわが子の総点検を思い立たせた。

十二分に買い調べておいたおやつは、兄弟で分け合って食べる分量に減らした。お友達を買ったから、持っているからと、欲しがる

のに任せて、我が子も同じ状態に合わせることをやめた。他人は他人、自分は自分だ。

これが簡単なようで難しい。時には息子とお友達の仲が微妙にゆれた。が、一人浮き上がってもあまり苦にならない息子の性格にも助けられた。あつという間に真つ二つに割ってしまう下敷き、消しゴムをもう買わないと言した。名札を落した、筆箱が壊れた、

「もう知らない、落さないように気を付けなさい。壊れないように大切に使いなさい。どうしても必要なら自分のおこづかいで買うがよい」「もう使っちゃってないよ」「なら来月まで待つこと」「そおんな、名札が無いと運動場三周なんだ。来月分の前借りお願い、」
「断る、三周など五周などするが良い、」

学校は至れり尽くせりの状態で子供をよこせと言うけれど、いかなる評価をもらって来るかを意にかけず、我が子がいかに育つかをこそ氣にかけた。敵もさる者、父親に、

「何かお手伝いしない?」と、さかんに持ちかけ始めた。時により思わぬ報酬の転がり込むことに目をつけたのだ。この世に生まれ出てまだ八年ばかりにしかならないのに、何と知

恵ある生き者か、ああ人間の子供って面白い。いやいや素晴らしい。

苦勞して手にした下敷きは、何と大切に使うことか。誰も教えもしないのに、壊れた筆箱は大慌てで修繕をして使っている。

あふれるほどの物資に恵まれた便利で幸福な時代の子育ては、つい手取り早く、案々とすませたくなり、親の立場からはそれが可能ではある。面倒臭くても、忙しくても子供の心の動きを見守り、古めかしいかも知れないが、自分の持ち合わせている正しいと思われる規範を、我が子に伝えたいと願う母親としては、ひとつひとつ子供が直面する不都合に、大いにじれさせ、傷つき戸惑う体験を、わが子から取り払ってはならないとがんばっている。

(え・松本圭以子)

育ちきらない男——妻が仕事を持つたとき
初めて、夫の真実の姿が見えてきた……

私の離婚

文・木下幸子

東京都豊島区

離婚して二年。現在私が世帯主であり、三人の子の親権者で、保護者である。

父である夫は、自分は親権を求めないのだから、親としての権利も義務もない。だから養育料は払わないと言う。それは初めからわかっていただし、私自身、私一人で三人を育てると言って離婚したのだから仕方がない、と自分に言いかけせる。もし養育料を出してくれるような人だったら、離婚などしなかった、と思う。

過去、十年の結婚生活。親に反対されて結婚した私達。

結婚したことに後悔はしていない。三人子供を産んだことも。そして離婚したことも。あと何十年か、子供を育て続けねばならないことも。子供達は可愛い。面白い。楽しい。彼と結婚しなければ、今ここにいる子供達は、この世に存在しなかった。私は今、この子供達に助けられている。

しかし、どうして。何故。この十年間は彼及び私、子供達にとって何だったのだろうか。十年一つ屋根の下に暮し、同じものを食べて、家族として暮してきたのは何であつたのだろうか。いま、毎日父の居ない食卓に、ふとた

だよう子供達の寂しさを感じるとき、人間の心のあてにならなさと、たよりなさ（自分の心も含めて）を思う。

私と同じ状況、条件の人でも、私と同じく離婚という道を選ぶわけではない。自分で努力し、相手の心、考え方を変えていく人も大勢いる。私たちは何故、右と左と正反対の道を選んでしまうのだろうか。

夫と私は、周りからは理想的な夫婦とされていた。お互い趣味は別々だったが、そこにお互いを引き込もうとせず、認め合っていた。育ち方も環境も違う人間同士、一緒になったのだから、興味を持つものが違うのは当たり前だ。考え方が違うのは当たり前だ。それがお互いを尊重することだと思っていた。夫はかくあるべき、妻はかくあるべきではなく、ありのままの男と女が何故か一緒に生活することになった。この人間同士の結び付きを大切にしたいという心だったと思う。二人で飲みに行ったり、彼の仲間ともよく話したと思う。子供についての考え方も、そうだった。

まず夫婦がいて、子供がいる。夫婦の方が主である。生活時間も、食事の内容も子供中

心などとはとんでもない。夫婦、お互い認め合い、尊重し合って生きていけば、その姿を見て、子供はまっすぐ育つてあろう。人を大切に思うやさしい人に育つだろう。私達の間では過保護などおこりえない。子供の為と、何か特別にすることはない。普通の生活をしていたればよい。私達は二人とも、そう思っていた。

夫に負担をかけるまいとの一念で

私達は、私二十二歳彼二十二歳で結婚した。中学の同級生同士である。大学は出ていない。若いし、収入も少なく、六畳一間から生活が始まった。二人して銭湯に行った。私は結婚前は家業を手伝っていたが、結婚と同時に仕事をやめた。仕事はきつかったので、専業主婦があこがれたのだ。朝、彼を送り出し、昼寝をし、夕食の仕度をする。二人して銭湯に行った。ごく普通の生活である。

一年後一人目の子供が生まれた。そして避妊していたのに、二人目ができてしまった。年子だったが、あきらめて産んだ。一人っ子では子供も可哀想だと思ったからである。

子供が二人で、ときどき彼の両親にあずかってもらえた時期、経済的にまあまあで、私が子供と共に家に居て家事をやっていたればよかった時期、そのころは、お金が足りなくて私の肉親に借りに行ったりしていても、どうにか我慢できた。彼は自分の趣味である模型飛行機を作り、私は本を読み、まわりで子供は遊んでいる。そんな日々だった。

今思い返してみると、家賃を払うお金や、食費が足りなかったのに、お金のかかる模型飛行機を作っていたなんて不思議に思う。それも何機も。しかしそのとき、私は彼に飛行機を作るのをやめて、そのお金を生活のほうに回してくれとは言えなかった。彼が働いて得てくるお金のだから、とても考えていたのだろうか。そのときには気付かなかった心の壁だったと今は思う。

子供達の世話についてもそうだった。家事についてもそうだった。彼は外で仕事をして家に帰って来る。家では休ませてあげなければいけない。そんな気持からか、家では子供のこと、彼の自由な時間を奪うこと、負担になることはたのめなくなった。

それでも子供が二人のうちは、どうにかな



った。お金が足りなくて、私も働こうと思い、保育園に入園申請をした。一人はすぐ入れたが、もう一人がなかなか入れない。仕方なく残った一人を連れて内職をしたり、保険の外交をした。よくある託児付きを条件の仕事である。

半年しか続かなかった。今考えると、子供が一番可哀想だったと思う。内職に一生懸命なときは、外に連れ出してやれない。会社の保育所では、ただ子供を収容するだけ。親に振り回されるだけの日々だっただろう。いま、それがわかるが、働き出したときは、お金が欲しいということだけで、子供の心の中の傷まで考える余裕はなかった。それは離婚のときにも言える。

そんな中で、三人目を身こもってしまった。前回のこともあり、注意して避妊もしていたのに。悩んだ。しかし、どうしても中絶は出来なかった。また内職を始め、外に出ないで家の中で暮らした。病院の検診も、五回行くべきところ三回ですました。そして、またまた母に援助してもらった。そしてまた内職。

内職ではお金は得られない。何回か、新聞に載っていたインチキ内職にひっきり、講

習料や、材料費を失った。しかし始めるときは、希望を持って始めるのだ。今回こそ、と思っても、結局だまされたことになるのだらう。

仕事と家庭 すべてを背負いこむ

決心して三人目を一歳三カ月で無認可の保育園に入れた。そして次の日からパートで働き出した。働くことも、子供を保育園に入れることも、夫には事後報告だった。聞いても、「自分のしたいようにやったらいい」という答しか返ってこないことが分かっていたからだ。

いま考えると、夫からは、何故私が働くのか、についての問はなかった。私も、お金が足りないから働くと報告しただけで、家計について彼に説明することをしなかった。彼の収入がいくらで、どの位不足か。その為には、家計のどの部分をけずればよいか。私がどの位収入を得ればよいのか。これらすべてについて、きちんと説明し、そして、働き出すべきだった、と思う。

とにかく、私は朝九時から夕方五時まで働き出した。保育園を捜すこと。手続き、勤め先を捜すこと、すべて一人で行った。私の性格として、誰にも相談しない。今の会社に落ちつくまで、三つ会社を変った。すべて飛び込みで、使って下さいと直接頼んだのである。結局ありついた仕事は製本で、肉体労働の部に属する。一人の子は学校に入ったばかり。一人は公立保育園、一人は無認可保育園。送り迎えは右と左。家事・育児・仕事・子供のしつけ・学校のこと・保育園の幹事。すべて私一人の肩にかかる。勤めたばかりで緊張する。子供もすぐ熱を出す。すると保育園から引き取らねばならない。会社にも気を使う。疲れていった。

身体が疲れが心を疲れさせ、心の疲れが身体を疲れさせる。私一人だけが、この思いがつづる。

父親である夫の助けが欲しかった。

しかし何を、どのように求めたらいいのだろう。女は子供を育てていくうち母となっていく。しかし子供の日常に直接タッチしてこなかった夫はどうやって父親になるのだろうか。

か。夫のとまどい。子供達は母である私にない。勝手に働き出したのだからという逃げ。責任転嫁。俺は一生懸命働いていると言っ

父親であることを 逃げる夫

私達は夫婦としてお互い受け入れ、認め合っている。夫は仕事のこととはほとんど私に話した。人間関係も私に話した。だから私達は会話の多い夫婦だと思っていた。

しかし今考えてみると、これらは皆夫と妻との会話であった。私達はどれだけ、父親として、母親としての会話をしたのだろうか。母親である私は、夫に父親である心を求めたことがあったのだろうか。私は夫に父としての存在、気持、手助けを求めたことはなかったように思う。女の私が子供と接触しながら、自然に母親の心になっていくように、男の彼も、自然に父親になっていくだろうと思っていた。しかし、今私は、夫に対して、子供が生まれた時から父親になるように求め、教え、



お互い努力すべきではなかったか、と思っ
ている。

女はお腹を痛めて、子供を産む。女は痛さ
に耐えて一人で子供を産む。産まれたその瞬
間、女にはわかる。声も聞こえる。男か女か
と聞き、五体満足かと問う。その時のホッ
として、よかった、と思う気持、男には分か
らないであろう。産んだあとも、身体の痛みは
何日か続く。そうやって女は子供を産む。

それに比べて男は、ある一瞬の結果として
父となってしまう。女と違って親になるのが
遅いのも当然であろう。だから一歩下がり
自分の子供と対することが出来る。それが性

差による見方なのだろう。そして子供には、
自分を内部にとり込む女親と、外側からみる
男親と、両方必要だ。妻が夫を自分の子に対
する父親として育てていくのは、子供に対す
る義務だろうと思う。（もちろん、反対の場
合もあり得る。子供は二人の人間の共同責任
でこの世に生まれたのだから）

しかし、ともかく、私はそれをしなかった。
それまでしてこなかった。働き出し、三人子
供が産まれ、そして初めて生活の中には父親
の實際の手が必要なのを知ったのだった。

私が働かねば生活は成り立たない。彼は仕
事の都合で朝早く夜遅い。時間もない。彼は

一日中働いているのだからと手助けを拒否す
る。私も働かねばならない。堂々廻りである。
話し合いが争いになる。

子供が小さい間父となるということは、子
供の日常生活にタッチすること、手助けする
ことも含む。つまり、子供が生じたことによ
って増えた家事育児を手助けすることを含む。
私は夫にそのように対してこなかった。求
めてこなかった。夫も自分から、家庭の日常
に入って来なかった。わずらわしかったのだ
と思う。

しかし家庭とは、小さなこと、煩わしいこ
と、馬鹿馬鹿しいことの積み重ねである。夫
と妻とどちらかが拒否すれば、必ずもう一方に
負担がかかる。

家事育児に、十年の間夫を巻き込んでこな
いでいて、ある日突然手助けを頼んでも、無
理な話だった。気付いたのが遅かった。子供
三人。当時、九歳、八歳、三歳。私は一人。
とても身体が続かない。彼は夫の役しかな
く、私に妻の役を求める。彼の身の回りの世
話、食事の内容。それが私に負担であった。
お互いのちょっとした心遣い。心が通い合っ
ている時には何気なくやっていることが、負

担を感じることによってできなくなっていく。

十年の生活の間に、私達はそれぞれの領域に踏み込まない生活習慣が出来てしまっていた。何か問題がおきてても、それぞれが一緒にあって解決しようとする心がなかった。

私も、夫も何時も一人で行動していた。私は子供三人を一人で連れて歩くことに慣れていた。夫は何時も一人でどこかへ行き、子供を連れていったことはなかった。彼は父なのに子供と対し方を知らなかった。私を介して、子供と対していた。子供もまたそうだった。

事実を伝え 子供達は納得した

子供達には私が話した。私の解釈である。その時点で子供からの反対はなかった。そして翌年から子供達の姓が、私の旧姓になった。私は保護者会で、事情があつて姓が変わったことを言い、役員を引き受けた。離婚した時一番心配だった姓の問題はこうして切りぬけた。すんなりといったわけではない。子供達は友達に聞かれたり、からかわれたりしたらしい。しかし子供は子供なりに、説明し、納得させたのだらう。

私が子供達を仲間だと思つるのはこのような過程があつたからである。今はもう何のこだわりもなく、友達は今姓を呼んで遊びに来る。子供とは不思議なものだ。

子供に問われた時、大人の心で嘘をつかないで、事実をそのまま答えれば、子供は必ず納得する。これから成長するに従つて新しい問が出てくるだらう。それに、一つ一つきちんと答えていく覚悟はある。それでなくては、離婚などしない。

礼儀として、子供に夫の悪口は言わない。納得できない点はある。何故ならばすべて丸抱えで、夫は、子供達にとって父なのだとは思っている。良い父、悪い父ではなく、存在としての父である。だから学校からの調査の父の欄には、夫の名を書く。姓は違うが父である。これは血のつながりだからではなくて、子供達が生活してきた間の感覚の問題である。私は夫を父として認められなかったが、子供はどんな人間でも、父として生活してきたら父だと思つている。母である私は、子供のその想いを壊す権利はない。

やっぱり別れて よかつた

しかし別れた夫は、子供に対してどう想っているか。それがわからない。私は結婚していた間、夫を父親に育てられなかった。離婚したあとはどうだらう。

何度か電話した感触では、結婚していたときと変っていないみたいである。私が、余裕があつたら少しでも養育費を送って欲しいと頼むと、外食はお金がかかるから余裕はないと言う。そして、お前が三人面倒を見ると言つて別れたのだから、養育費は出せないと言う。彼は変つていないな、とあらためて思い別れてよかった、と思つてしまふ。彼は子供の重さ、親は子供の人生を背負っている事実を知ろうとしない。自分のことばかり考えている。

思い出してみると夫と私はお互いを、お父さん、お母さんと呼び合つた事が無い。世間では子供が生まれると自然にそう呼ぶようになると言う。三人も子供がいて、私はそのことにちつとも気付かなかつた。

夫は別れるとき、「結婚しなければよかった

た」と言った。他の女性と結婚していれば、離婚などしなかったかもしれない。夫のその言葉を聞いたとき、私は心が痛むと同時に、「ああ、彼はまた、人のせいにしている」と思ったのを忘れない。しかし子供も手許にいない彼の立場を考えた時、そう思うのも仕方ないことかもしれないと思う。寂しいのである。でも人とは寂しいものだ。子供がいるから、夫がいるから寂しくないというわけではない。

離婚はドラマでなく 生きるための方法

夫と私はお互いの影響のもとで、相乗作用でこうなった。離婚を言い出す妻にしたのは夫であり、養育費を出さない夫にしたのは私である。私はそう思っているが、夫はそうは思わない。私の母もそうは思わない。離婚を話すことの難しさを感じる。

私は夫に父としてたまに子供に会って欲しいと思っているのだが難しい。親としての責任感を持つ人だったら、こうはならなかっただろう。

離婚はドラマではない。離婚にドラマなど



ない。綿々と続いた、これからも続く生活があるだけである。できれば離婚などしないほうがいい。しかし夫婦がそれぞれ生きる為に離婚（離れて生きること）という方法しか見付からないとき、夫も妻も人間として自立している者同士ならば、二人の間の子供は被害者にはならない。

人のせいにして離婚したり、しなかったり、その考えかた、想いが子供を傷つける。

どちらに決めるにせよ結局は自分で決めているのである。「できない」のではなく、「やらない」のである。「一緒に暮せない」のではなく、「一緒に暮してはいけない」のである。「離婚できない」のではなく、「離婚し

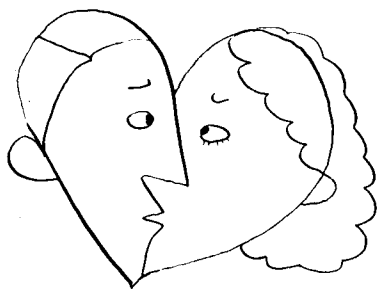
たくない」のである。

しかし言うのはやさしいが、現実には本当に大変である。お金というのには不思議なもので、誰が持って来てもお金であるが。

お金の為に自分の心を縛ることはないが、お金が無い為に、心が縛られてしまうことがある。そうではない人もいるだろうが、私はそうなので、とてもみじめになるときがある。現実の厳しさを、ひしひしと身に受けている私である。世間は甘くない。が、「渡る世間に鬼は無し」もまた事実である。

（え・岡田正子）

オットーピー



行くべきか とどまるべきか

東京都町田市

老沼とし枝

私はいま、自立できるかどうかの瀬戸際に立たされています。というのは、小学四年の長男と小学二年の次男がスポーツクラブでサッカーをやっている、今年は役員なので、夏休みの三泊四日の合宿へ行けるかどうかなのです。

山中湖畔のホテルへ子供たちの世話役として行きたいのですが、主人の反対にあって、あきらめかけているのです。「俺の食事はどうするのだ」のひとつで行きたくても行けないのです。

機嫌がいい時は「おまえ、合宿へ行ってもいいよ」と言うのですが、お酒など飲むと、「やっぱり合宿は行くな」と言うのです。

反対をおしきって行ってもあとからイヤな思いをするのは目に見えています。でも一方では、何がなんでも行った方が楽しいし、良い経験ができる。ここで行かなければ一生、自由を束縛されてしまうという気持ちがいられています。

でも下には、幼稚園の子供もいるし、私は慢性ぼうこう炎でトイレが近いので、不参加という理由にしようかとまよっています。

波風をたてないで、自分の気持ちをおさえて、静かにしていて、主人とうまくやっていくほうが、幸せなのかな、と考える今日この頃ですが、本当に幸せとは思えない気持です。主人とケンカしてでも自分の思いどおりのことをおし通す勇気が私にはありません。ふがいない自分に腹が立ちます。

わいわいガヤガヤ

いまさらなんだ!

前言をひるがえすオヤ

東京都世田谷区 石島 明子

「これからの時代は女の人だって手に職をつけて、自分で生活できる力を持たなくちゃダメよ」

これは十年前に私の母が言った言葉。当時初恋のM君のお嫁さんになるのが夢、だった可憐な中学生の私には、かなりショックな言葉でした。もともと素直の上に“バカ”が付くほど他人の影響をもろに受ける性質のため、以来、私の人生観は百八十度の大転換。その後は、自立するためにはどうしたらよいかと模索して過す学生時代でありました。そのかいあってか、“もの書き”の端くれとし

て細々ながら仕事ができるところまでたどり着いた現在。女性が存分に実力を発揮でき、一生続けていける仕事は何かと、自分なりに考えた末での選択です。ようやく“自立”への第一歩を踏み出した娘の姿を見て、母もさぞ喜んでいるのだらうと思いきや……

「Tちゃんは大学も短大がいいわね。お姉ちゃんみたいに四年制へ行くと、どうしたって結婚するのが遅くなるもの」

な、なんと、これは先日、かつての私と同じ中学生になった妹に母が言っていたセリフ。十年前に“女の自立”を説いたその人が、今度は“良妻賢母”の勧めとは!

「だって、あなたを見ているととても大変そうでしょ。夜も寝ないで仕事をしているし、お休みもあまりないし……」

そりゃ、取材だ何だと飛び回り、忙しい時には深夜十一時に慌ててタクシーで家路を急ぐ事だってあります。徹夜で原稿を書き、翌朝化粧もせずに飛び出して行く事だってあります。でも、仕事をするのにはそういう面だっているでしょう。“自立”という言葉の中にはそんな厳しさも含まれているのではないのかな。

「それはそうでしょうけど。でも、若い娘が苦労しているのを見ると親としては心配が先に立つの」

と、母。自分のように夫の言動に振り回される専業主婦にはさせたくない。が、仕事をして世間の荒波にもまれているのも心配——

そんな無茶苦茶な!

「それが親心っていうものよ」

いやはや、親心というのはなんとも理解に苦しむものだと感じている昨今なのであります。



いやだいやだ主婦なんて

埼玉県与野市 匿名

私も主婦ですので、同業の悪口は言いたくありませんが、今頃流行のカルチャーセンター通いの主婦の集まりってホント嫌ですね。

英語、陶芸、藤子芸、詩、体操ダンス、書道etc、私は詩、書道、体操、英語（集団の中にはまだまだついてゆけませんのでラジオ講座で勉強中）を習ってますが、皆さん高い月謝を出して忙しい中、時間も工面して勉強するように努力なさればよろしいのに、人様の成果ばかりが気になり、それなりの効果を得た人を妬む人が多いのに驚かされます。

私など何一つ人様に優るものがありませんので、美人で頭の良い奥様と友達になれると自分も美人の仲間になったような気になりますのに、スマートで美人の奥さんは体操教室などでは爪弾きされてます。そして小肥りな人や肥った人達数人がグルーブになり堂々としています。彼女達は肥満が故に少しハ

ドな運動は休んでいますから汗を余りかきません。汗をかかないから痩身の方へは遠い道程となり、美人でスマートな主婦のレオタードの後姿に妬みをますます強くする。

書道も同じです。毎週毎週何十枚も書き込んでくる人はやはり上達が早いようです。二、三枚しか書いてこない人達は「すごく熱心で、イヤ、先生にでもなる気なのかしら」と何やかや聞えぬように悪口を言う。

高い月謝を出して、おまけに交通費もかかっているのだから、早く上達して元をとりかえずには塾の先生にでもならねばなどと、ガメツイことを考えている私なども良くは思われてないのだろうか。本当に主婦ってイヤですね。（日本の主婦がすべてそうだというので



はありません。私の周りの主婦の話ですので）
独身の頃は夫々が花を咲かせ太陽をもまぶしくしてたのに結婚と同時にスタートラインに戻ってしまった女は人の花が咲き誇るのが妬ましいのでしょうか。政治家の言葉を借りて、前向きに生きたいですネ。

デイ・バイ・デイ

東京都府中市 黒田 美奈子

どこからか迷いこんだ一匹のハエ、……ブンブンと五月蠅いっただらない。そこで夫、昔とったナントやらで、下敷きパチンコで、ねらい定めてピシリ！……見事命中！ さすがあーすっかり気を良くした彼、次なる獲物を探すけれど、マンションの四階ともなれば、そうそうハエも飛んでこない。しきりに残念がって言うには、

「やっぱり、武器ってのは、もっていると使ってみたくなるもんだなあ——」

友人の話——その1

幼稚園に通っている娘が、ある日思い詰

めたように言ったそうなの……

「ママ、赤ちゃん生んでヨ」

なんでまた急に——と訝る友人に答えて言うには、

「あのネ、今日園長先生のお話があつてネ、このままだと、どんどん幼稚園に入る子が少なくなっちゃつて、みんなの幼稚園もなくなってしまうかもしれないんだって……幼稚園がなくなっちゃイヤでしょ、だからお家に帰ってママに赤ちゃんを生んでもらうように頼んでネっておっしゃったの」

友人の話——その2

電話口から聞きなれた声……

「ネット！ ネット！ 聞いてヨ！ あなた知ってる？ 今の小学校の徒競走って、事前にタイムを計って、そのタイム順にグループをつくって走らせるのヨ——なんだかちょっとおかしいと思わない？」

こういうのを「公平」と言うのかなあ——それにしても、たかがカケッコ、身長順だつて、良いと思うけどなあ——その昔、万年ビリだった私、今の小学校だったら学年中で一番遅いということをハッキリと思い知らさ



れるところだったなあ——。

友人の話——その3

小学校三年生の子供を持つ友人が父母会で先生に質問した。

「先生、落ちこぼれ、落ちこぼれておっしゃいますけれど、いったいクラスでどれくらい落ちこぼれているのですか」

先生、平然と答えて、

「そうですね、半分くらいでしょうか……」

一割ぐらいというのなら、本人の素質とか、努力が足りないとか、家庭のケアが悪いとかいうこともあるかもしれないけれど、半分とは……。

幼稚園で、大きくなったら何になる、という話をして来た長男、さっそく私に、

「ママは、小さいとき大きくなったら何になりたかったの？」

「そうねえ——何だったと思う？ あててごらん」

しばし考えて、

「わかった！ タダの人でしょ！」

このテの話は、よく聞くが、我が身に起つてみれば、なんともショックでありました。

くそまじめな「わいふ」 とのくされ縁

埼玉県上尾市 赤松 羊子

私と「わいふ」の関係は、もう六年位かな？ 最初の本を受け取った時、くそまじめで、地味でつまらなかった！ 読みたいからではなかったのね。「書きたい!!」という欲求が生まれつき強い性格のため、その場が欲しくてのくされ縁だった。(その割に投稿しなかったけど)

私のそばには、いつも原稿用紙と雑文ノートがくっついてまわるの。のどの渇きをいや

すように、白いノートに鉛筆を走らせるとホッとするのよ。

私もライターになりたいなあ！ 随筆家、エッセイスト、雑文書き、レポーター……。

読書が嫌いだから、小説なんて書けそうもないけれどね。

上尾のド・田舎に来たら、面倒でどこにも出られなくなってしまう。都心は、はるかむこう。私にとっちゃ、インドネシアから見ていた東京と何だか同じ位の距離。

屋根に登ったら、新宿あたりに「わいふ」の、いじらしいのろしが見えるかな？

どっちつかずの私

東京都目黒区 木村 道子

「わいふ」が大きく変わるそうですね。いつの時でも、向上心をもって進もうとする姿勢は失わずにいたいですね。そこで一言、フォーマルドレスを着た文章が多かったことは事実で、メゲていた一人ではあるけれど、いつの時でもコットンパンツに洗いざらしのＴシャツばかりの文が並んでいても、少しばかり

困ってしまうのも事実なのデス。

あれは、若さとスタイルの良し悪しで決定的にそのイメージがきまってしまうモノ（ヒガミ。かなー？）どちらにしてもメゲますねー！
どうか、ほどほどにお手やわらかに！



困りもの

「えらい女のかた」

東京都江戸川区 佐上 悠子

こういう人がいるから困っちゃうのよね、ホント。

女ながらに男なみ、いや男以上にバリバリ働きながら、結局女の足を引張るようなことをおっしゃる。

「ほんとに仕事しようと思えば、別々に暮らす方が……」云々。フン、フン、とうなずいてると、「私ね、結婚相手に迷惑かけてまで女性が仕事を持つ必要ないと思う」
猿橋賞受賞の女科学者です。

よくよく読めば、「両親と同居していたから、やってこられたんです」

これ、ほんとだと思う。四十八歳といえば夫が家事を手伝う年齢ではなし。要するに大隅先生が仕事を続けられたのは彼女をバックアップする背景があったから。

高橋真理子記者ってすごく俊敏なヒトだ。最後に夫の言葉をつけ加えるのを忘れてはいない。「家庭生活というのは、要するに力関係ですもん」

要するに大隅先生は、彼に迷惑かけないと言い切れるだけの実家の背景があったのだ。そういう背景のない人は、「仕事を持つ必要ない」？ 「彼がすごくマイナスになる」から？ 「ファミリー全体にとってハッピーでないから」？

金なく、実家なく、学問研究などというカッコよい大義名分なく、それでも仕事をしたい女は、夫や子どもに「迷惑かけて」家事分

担してもらってやるよりしょうがない。いやするべきなのだ。それが彼らのためになるのだから。

大隅先生はそういう人たちのこと忘れていてる。

バリバリ第一線でやってる女のヒトに、ときどきこの手の人がいる。がっかりだ。

高橋真理子記者。あなたもそう考えながらこの記事書いたのでは？

フレッシュ・モーニング

東京都杉並区 山本 雅美

「あのう、モーニングはおいくらですか」

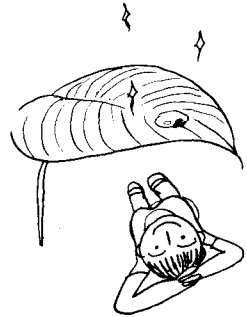
「飲みものの代に、百円プラスです」

うーん。私は、すばやく計算した。手持ちが三百六十三円だ。さっき店に入る前に何回も確かめた。ホットコーヒーは二百八十円。あと十七円足りない。

「すみません、お金ないから、コーヒーだけでいいです」

「コーヒーですね。かしこまりました」

何も大声で、お金のないことまで宣伝する



ことないのに、バカな口が言ってしまった。

（それでも恥ずかしくもないんだから、私も私だ）と、一人で苦笑した。

私は、小出版社に勤めていた。昨夜も、仕事で会社に泊まったのである。そして昨日の昼から、忙しさで、何も食べていなかった。ふらふらしていた。

（ああ。いつも余分のお金を持っておこうと思う、こういう時のために。だけど、いつも、いざという時の前に、消えている。ちえっ、百円玉一つあれば……。けれどない。くやしいけどない。ええい、すつとこどっこい）

コーヒーが運ばれてきた。砂糖とミルクを、のろのろといれる。ていねいに、しつこいぐらいかき回す。そろりと口をつける。食道をびゅうっとくだる。胃壁

にじわあつと熱さが広がる。よけい、おなかの虫が目をさますようだ。

（おなかすいたよお。何かほしいよお）一瞬期待しただけに、落胆が大きい。あきらめきれない。頭の中は、そのことばかり。

何か金目のものはないだろうか？ はっと気づいて、バッグを引きよせる。中身をテーブルの上に、ひっくり返す。

あった。切手だ。

さあ、誰に頼もうか。とたんに元気が出た。店内を見回す。出勤前のサラリーマンが多い。新聞を読むネクタイ。煙草をすうネクタイ。こちらには、おしゃべりする二本のネクタイ。どうも男性には言いにくい。女の人は、いなか……。いた。

二メートルほど離れた、斜め前方の席に、視線が止まる。五十前後か、白いツイースをしゃきと着こなした、「元祖・キャリアウーマン」おばさんだ。

でも、こわそう。「あなた、人に甘えるもんではありませんよ」なんて、おこられそうだ。「私なんかの若い時には……」とお説教



気がつく、歩き出していた。

「あのう、すみません。これでお金貸してもらえませんか」と六十円切手をさし出す。

「私も、今、さしあげようと思っていました。静かだが気品のある口調がひびいた。」

見ると、テーブルの上には、百円玉が二つ、お行儀よく並んでいた。私の体がふにやっとなった。

（この人は、帰りがけに、さり気なく置いていくくれるつもりだったのだ！）

「……」

「これ、さしあげます」

「いえ、二十円で、いいんです」

「それで、足りるのですか」

「はい、二十円あれば足りります」

「それでは、これ、どうぞ」

「ありがとうございます。本当にありがとうございます。お顔は、忘れません！」

（人生、すてたもんじゃない）

私は、サンドイッチをほおばっていた。

二十代の逆コース

千葉県習志野市 岩崎 八恵

なにげなく見ていたテレビのトーク番組のなかで、ゲストの若い男性が語っていたことがちょっと気になった。つい最近結婚した彼は、妻となった人に仕事をやめさせたという。「やはり女性は家にいるのが本来の姿ですから」

これが二十代の男性のことだろうか。そういうえば、近所の公園でよく会う若い奥さんたちのおしゃべりのなかにも似たようなことがあった。旦那様のことに話が及んで、

「うちなんて毎晩遅く帰ってくるくせに、休みはゴルフだし、まるで母子家庭よ。それなのに、私がたまに友だちに会いに行くっていうときげんが悪いの」

「私のともそうよ。女はだまって家にいろ、が口ぐせだし、赤ん坊のおむつなんてさわったこともないわ」

といいながらも、それほど気にならないという風で、けっこう楽しそうだった。

されたりして……。

やあめた。「武士は食わねど、高楊枝」、
「ぼろは着ても心は錦だ!!」……でもさ、
ただ、もうくんじゃないもの。それに、私だ
って、すぐ貸してあげるもの……でも、図々
しいかなあ……。

ちらっちらつと眺める。視線が合わないよ
う、さつとうつむく。胸は、どっくん、どっ
くん。

（たった、これっぽっちの度胸ないのか）

（だって……）

（やる前に、あきらめるのか）

（人が、いっぱいいるもの……）

女の人が出る用意をしたら。（帰るぞ、
帰るぞ）

また彼女たちによると、二十一歳で結婚し、二十二歳で第一子、二十四歳で第二子を生みあげるのが理想的なパターンで、実際のところもその線に沿っているようだ。となると、一緒に子供を遊ばせていた私など、三十二歳で息子はまだ二歳、この人たちからみると、のりおくれのカワイソーなヒトなのかなと苦笑してしまった。

それにしても彼女たちのご主人、みな二十代らしいのに、共働きはご法度、家事手伝い一切なしの亭主閑白。支持政党は自民党、おまけに巨人のファン（関係ないかな）ときては、あまりにも保守的ではないだろうか。

もちろん全員そうとは限らないけれど、かえって三十代や四十代の人たちのなかに、個性的で進んだ暮らし方をしている人がいるよう



にみえてならない。なにも若いうちからパターン化された生活を送らなくてもよいのにと考えるのは、もう私が若くない証拠なのだろうか。みなさんはどう思いますか？ 私はまだまだ若いつもりでいるのだが……。

いつの間にやら 肺結核に！

東京都世田谷区 桜井 淳子

成人病予防検査申込書が、社会保険事務所から、職場に届いた。昨年の秋であった。

すぐに申込む。折返し返事が届き、実施日は三月二十六日と、ずいぶん先の事であった。

私にとって、人に自慢出来る唯一のものは健康である。一見、ひよわそうな体格で、風が吹けば飛ばされそうである。しかし、大病にはかかったことがない。今までに入院したのは、出産の時だけである。

親から受け継いだ体質もあるが、私の育った時代にも影響されてか、今だに細くて、小さい。その代り、耐久力は、人一倍強い。

三月二十六日。社会保険篤谷検査センターへ行く。

健康調査表を受付に出し、更衣室でガウンに着替える。

ロビーには、ガウンを着た男女が大勢待っている。番号順に、次から次へと物体のように検査されていく。尿検、採血、肥満度（身体計測）、血圧、心電図、胸部レントゲン、バリウムを飲んだの胃部レントゲン。そして、うれしいことには、女性には、子宮ガンの検査までついていた。

子宮ガン検査は、自己採取法子宮細胞診と言って、スポイト式のものである。自分で自分の局部に挿入して洗滌し、その液体を採取するのである。とても簡単で、二三分で終わってしまう。今までのような内診ではない。子宮ガンの結果を除いて、全て、その日のうちに判明するシステムになっている。私は全部の検査に合格するものと信じていた。

「桜井淳子さん」

係の人に呼ばれて、全優の通知表を頂くように、いそいそと受付にいった。

「血糖値が高くなりましたので、再検査します。一階の受付に、この書類を提出して下さい。」ガンと鉄棒でなぐられた気持であった。

手渡された検診成績表を見て、更に、かくぜんとした。胸部X線が異常であった。硬化性肺結核？と、クエスチョンマークがついていたからである。

自分の知らないうちに、あの、明治、大正時代の悲劇のヒロインが、かかった、ロマンチックな肺病にかかっていた。そして、それとも気づかぬうちに治って、石灰化していた。

それと、自分の身長が、一・五センチも減っていたのにもショックであった。パスポートを始め、全ての公式書類に、私は、自分の身長は、一メートル五十センチと記入していたからだ。確かに私は、一メートル五十センチあったのだ。長い間に、身長も摩滅するのだろうか。現在は、一メートル四十八・五センチとなっている。

体重は四十キロ。この数値は、三十年来、不変である。多少のプラスマイナスはあったが。

がつくりした気持で、再検の手続をした。四月七日。鶯谷検査センターから親展の封書が届いた。ドキドキする胸を押さえて封を切ると、自己採取法子宮細胞診結果表が入っ

ていた。異常なしに、丸がついていた。

四月九日、センターに行く。

高血糖の他に胸部X線の事を聞くと、受付では、耐糖テストだけと答えた。

尿を取り、採血される。そして、とても大きな紙コップの中の甘い水を飲まれた。空腹に、ゴクゴクとシロップは流れ込む。半分で、もうたくさんとやめる。

「全部飲んでください。」

看護婦さんが、無情に言う。意地になって飲み込む。お腹が、ゲップゲップと甘い水で波打っている。吐き気を押さえる。キモチワリイ。

待合室で待つ事、一時間。十時にまた、尿を取り採血する。更に一時間。十一時に、尿



を取り、採血する。

来週の金曜日に結果発表である。

四月十五日、センターに電話をして、血糖値の結果を聞く。尿糖が少し出たが、問題なく、異常なしと言われた。

これで私の健康は大丈夫。バンザイ。

と思いきや、四月十九日に、センターから電話があり、胸部X線の再検があるので来所して欲しいとの事。私は、耐糖テストの時に、念を押した事を伝えたと、手続の手違いで、申し訳ないがと言われた。

四月二十三日、再三、センターを訪れた。等身大の立派なレントゲン写真を撮ったが、更に、断層写真という御丁寧な写真まで、じっくりと撮ってくれた。

四月三十日、レントゲンの結果を聞きにセンターまでゆく。そして、レントゲンの結果を説明してもらう。

ずいぶん前に結核にかかっていたこと、そして、治っていたこと、現在は、問題ない事等々。

合計四回もセンターに通った。最後に、大丈夫と、太鼓判を押して貰い、やっと、私の心も落着いた。

(元・松本をきえ)

投稿ホットライン——三度のメシより本が好き

生きてます活字人間

——目の鱗、落としてますか？

「生きてみたい、もう一度」

杉原美津子著
文芸春秋刊
1100円

東京都新宿区 丸山友岐子

新宿バス放火事件——。

東京・新宿駅前で停車中のバスに放火され、数人のひとが死に、大勢が大ヤケドし、バスが炎上した事件である。

この京王バスは、わたしが通勤バスとして毎日乗っていた路線であり、もう三十分、帰宅が早いか遅いかすれば、この事件に“被害者”として巻き込まれていた可能性があった。娘と二人、“難”をまぬがれて「一、二台の差で

死んでるか大ヤケドしてるとこやった

なあ」と慄然としたことを昨日のことのように思い出す。そのうえ、犯人として逮捕されたのが“丸山博文さん”。

わたしと同じ“丸山”姓を名乗る男性だったというわけである。この事件には浅からぬ縁を感じざるを得なかったから、今年の春、この事件にまき込まれ、九死に一生を得た杉原美津子さんが“生きてみたい、もう一度”を出版

されたのを知り、その“縁”にひかされて読んだ。

もし、杉原さんと同じ体験をすることを余儀なくされていたら……と自身自身の人生の可能性を、たえずたぐり寄せながら読みすすみ、あるときはこわさにふるえながらも、この“事件”を通して、すばらしい女に出会えたというよろこびにゆすられるような思いがあった。一読者として“いい本”に出会った“満足”にあきたりなくてわたしは、彼女と実質的に出会える機会をつくり、知遇をえることができた。彼女の“本”と出会ったこと、彼女自身と何時間か会う機会を得たことは、わたしの人生のなかで、きつと、もっともいい瞬間の一つになるにちがいない。彼女はホントにステキな女である。彼女がこうむった災厄によって、出会えることができたのだから、その“災厄”すらよろこびたいような気持なのである。

この本のなかにはひとりの女の“生”

が、ほとんどなまのままでぬり込められている。異常な体験を余儀なくされた異常な事件の記録……。はじめはそ

ういうものとしてこの手記が書かれたのではないか、と思っていたのだが、

あの“事件”は、彼女の人生にふと割

り込み、割り込むことによって、“事件前”の彼女の人生を浮き上がらせ、

“事件後”の彼女の人生を確かなものにしていくという手応え、みたいなものがあって、わたしは、読みつつ立ちどまり、考え、読んだあとも何日か眠れなかった。

読むにつれ大変なことが わかってくるこわさ

東京都 森川 一郎

文芸春秋発行の「ジョン・ウェイン

は、なぜ死んだか」という本を読みま

「殺されつつ殺している」わたしたち

の日常にある被害と加害の関係。犯人丸山は果たして“加害者”なのか、

“被害者”なのか。

彼女のセンサイで鋭い感性は、わたしたちが見過ごしているものの実体をつきつける。

「人は、誰かと確かなあたたかさでつながっていれば、そのつながりを信じることができれば、生きていきたいと希い続けていくことができるのかも知れない」その“つながり”が希薄な時代なのだ。ゼヒゼヒ、読むことで彼女と出会ってほしい、と熱望している。

「ジョンウェインはなぜ死んだか」

広瀬 隆 著 文芸春秋刊 九八〇円

書店で見た時は、ジョン・ウェイン

が癌で死んだ事は新聞、雑誌、テレビ等で報道され、知っていたので、こと

によると、アメリカの事だから、CIAか何か、国家機密とかで、消されでもしたのでは、なんても考えて買ってきた。

読んでみたら、やっぱり癌で死んだのである。しかし読むにつれて大変な事がわかって来た。著者、広瀬隆氏が、著名な映画俳優が、次々に癌で死亡している事に不審をいだき、しらべた結果を書いたものだが、一読ののちこの本は、ぜひ太多いの人に読んでもらいたいと思った。

ゲイリー・クーパー、トーマス・ミッチェル、スペンサー・トレイシー、ジョン・クロフォード、ステイヴ・マックイーン、ジョンウェイン等々何十名もの著名な俳優達が、癌で死んでいる。

今から四十年前の一九四三年頃、第一回の原爆の実験がネバダの砂漠で行われた。以後何回も何回も核実験が行われて、周辺のユタ州、アリゾナ州は

死の灰につつまれた。

ユタ州のソルトレイクシティや、セントジョージ等で、ロケをやっていた映画屋さん達は俳優も監督もエキストラもほとんどが発癌した。有名でもない俳優やエキストラは報道されないが相当数死亡したのだろうと思う。

更に、ロケの撮りのこりを、セット内で撮るために、それとも知らず死の灰で汚染された砂漠の砂を、トラック何十台もつらねて、ハリウッドに運んだ。そして、西部劇にあまり縁のない人達、ウォルトディズニーやハロルドロイド、ソニアヘニー、イングリッド・バーグマン等々、何十人も名優が癌で死んだ。

一九六〇年頃ユタの砂漠でロケをした「征服者」では、参加スタッフ二二

〇名の内、一〇〇名以上が癌で死んだ。

死の灰は、映画関係者だけにふりかかるわけではもちろん無い。ソルトレイクシティでは、町中に癌の患者がい

ない家は一軒もない。家畜が五〇〇頭死んだ、羊が一五〇〇頭死んだ、子供が次々と白血病にかかっている、セントジョージで目が無い赤ちゃんが生まれた、ネバダでも目が無い赤ちゃんが生まれた、汚れた雲が通ったあとで髪がごっそり抜け落ちた等々の異様な事件が続発した。

更に更に、第一回からの実験に参加した兵隊達が、あちらでも、こちらでも癌で病床にあたり死亡している。

死の灰の半減期は、プルトニウム二三九では二万四千百年、セシウム一三七で三十年、一度死の灰に汚染されたら完全に消えるまで何万年もかかる。この本にも書いてあるように、死の灰は長期性であり、且つ、年と共に濃縮されて行く。

ジョンウエインが遺した言葉、「人を信じすぎると誕生日を繰り返して祝えなくなる」ジョンウエインは国家を信じすぎた為に長い歳月にわたって癌

に苦しめられる自分を発見し、後悔の念をもっていたに違いないと著者は言っている。

一九五七年、スタンリー・クレイマーが、映画『渚にて』を発表し、核兵器で死滅するアメリカの姿を描いた。

——兄弟たちよ、まだ時間はある——と書かれた幕が無人の街にはためくラストシーンには、私も印象にのこっている。

日本では、原爆の実験はやっていない。しかし、原子力発電の危険性は重大問題である。九九・九%安全であっても、〇・一%の危険性も絶対に無視できない。しまったと思った時は、もう遅い。とりかえしはつかない。

アリゾナ、ネバダ、ユタ、三州の中に、すっぱり入る程せまい日本に、次々と原子力発電所を作って良いものだろうか。クレイマーではないが、兄弟たちよ、まだ時間は、はたしてあるのだろうか。

箱根小涌園

こどもの村



ズ連れ 遊びの ガイド

こどもの村線時刻表

小田原駅	湯本駅	こどもの村	
9:30	9:47	10:12	イ
11:05	11:22	11:47	イ
13:25	13:42	14:07	イ
14:33	14:47	15:15	㊦
15:10	15:27	15:52	イ
	16:10	16:35	㊦

こどもの村	湯本駅	小田原駅	
10:15	10:40	10:57	イ
11:55	12:20	12:37	イ
14:15	14:40	14:57	イ
15:35	16:00		㊦
16:00	16:25	16:42	イ
16:55	17:20	17:37	㊦

㊦ イ 伊豆箱根鉄道 ㊦ 箱根登山鉄道

● 運転期間 3月20日～11月30日の休日、
但し7月20日～8月31日は毎日

●子連れ遊びのガイド 箱根小涌園こどもの村●

石沢由美子

大きな水車がゆっくり回り、緑の多い箱根の環境すべてを生かして誕生した「こどもの村」

子供達は、庭のようにしてこの地で成長した。勾配の多い坂道を歩くには、車社会で生活している人には、かなりの運動である。で



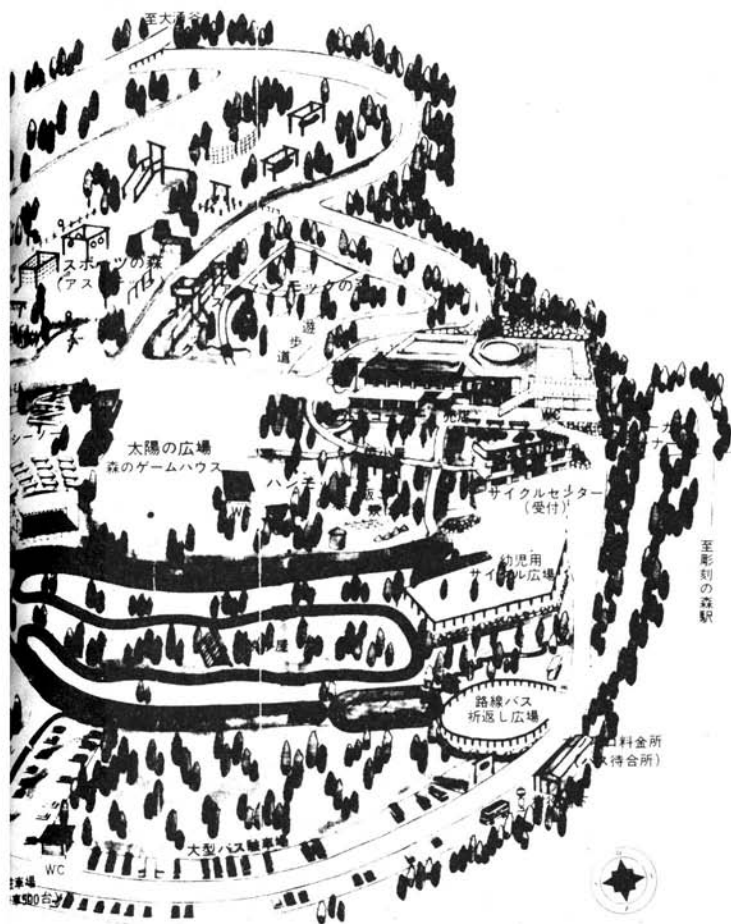
も、四季折々に風情のあるすばらしい環境であり、春の新緑と野鳥の声、夏の木陰でのハンモックの昼寝、秋の萌えるような木々の紅葉、冬の純白の雪景色、と自然が一体となっている施設である。

娯楽一点張りの遊戯施設を連想する人は、ガッカリするだろうが、今の子供達に一番欠けているものを、ここではすべて備えている。歩き、走り、体を動かすという基本的なこと、大人も少々疲れるアスレチック、三十以上も

あるハンモック、大きな大きなジャンボ風船（トランボリンの一種）、エアトンネル、読み放題の森の図書館、夏は三面のプール、各種の行事を盛りこんだ催し物。

平日は入園料のみで制限のないものは無料で一日いっぱい遊べる。毎日接していてこれと言った不満もなく利用しているが、現代の便利さに慣れた人達には、飯ごう炊はんで食べるカレーライスや、自然の環境を利用工夫したものに、多少戸惑いを覚えるかもしれない。

まずは体を動かし、子供と一緒に遊んでみると、目が輝き、イキイキしてくること請け合いです。子連れの女の人なら、平日は人出もなくゆっくり遊べるだろう。



●箱根小涌園こどもの村施設案内●

正式名称 箱根小涌園こどもの村

所在地 神奈川県足柄下郡箱根町二ノ平

一二九七

電話番号 〇四六〇—二—三五四六（直通）

入園料 大人八百円 小人五百円

開園時間 午前九時～午後五時

休園日 年中無休

駐車場 バス四十台 乗用車五百台収容

平日無料 日曜・祭日・ゴールデン

ウィーク・夏休み・冬休みは一日五

百円

交通 下車駅 新幹線小田原からバス四十分

（こどもの村前中小涌谷下車）

小田急線箱根湯本からバス二十五分

（こどもの村前中小涌谷下車）

箱根登山鉄道彫刻の森駅から、徒歩

十五分

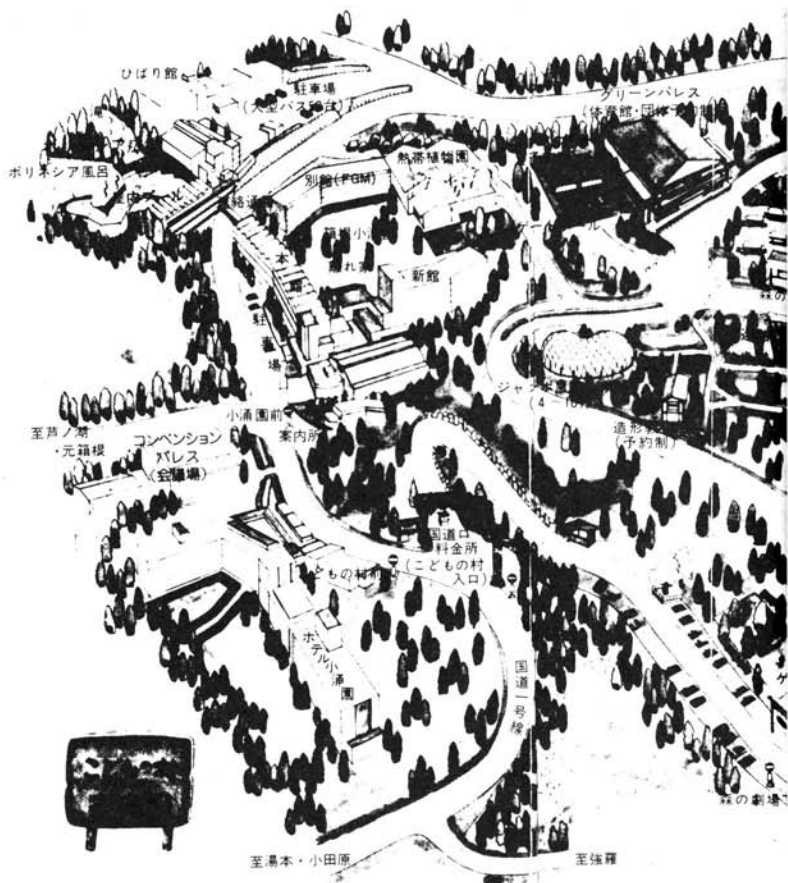
主な設備 村役場（住民届け・村の案内）

サイクリング（上級コース・幼児用

広場） スポーツの森（アスレチック・

丸太を利用した遊びと体力づく

りの森） バラエティオリエンテー



リング (二km約一時間) 飯ころ炊
はん (五百人まで可能・予約制)
こどもの村プール (夏期のみ営業
幼児用・小人用・大人用の三面)
etc.
いつの季節がよいか 四季を通して。でも、
子連れの人は、春秋ごろの平日。
日曜・祭日・夏期は混む。
実際にした遊び アスレチックその他気に入
ったもの。
遊びにかかったお金 平日は無料の施設が多
いので親の判断で。
親の楽しみ 体を動かすので子どもと一体に
なり、疲れるがいい運動になる。
子供の楽しみ 車がないので思いっきり走り
回れる。
困ったこと なし。すべて村役場の職員が臨
機応変に対処してくれる。
食事はどうでしたか 野外食・食堂・売店あ
り。そんなに高くもない。
トイレについて 四〜五カ所あり。清潔。
貸乳母車 なし。
特に用意したいもの 歩きなれたくつ、動き
やすい軽快な服装 (親子共に)、大
きな風呂も利用できるので着替えも。

[illegible]

生活が充実してないのだ。

大学の講義——おもしろくない。(もちろんです)六本木へくり出して、人より踊りがうまくて、女の子をひっかけてみても、ま、大したことない。

マージャン。これは流行る。なんせヒマなんだ。やること、ないのだ。

しかし新聞をめくってみれば、中学生の非行とか、イランイラク戦争とか、ポーランドの連帯への弾圧とか。

やることない学生は、その裏返しとして、必ず何かを考える。考えてる。

ただし三里塚でデモする気にはならない。角柴御用、の提灯デモも、かっこよいとは思えなかった。

カッコいい、カッコわるいで決めるような若者たちのこの姿勢、ほんとに間違っているんだろうか。

目から耳から、肌から入ってくるものに敏感になっているこの感覚、意外に本質的なものを感じ取ってはいないだろう

か。

ヘルメットにマスクで、負の宣伝するのはごめんだ。いい形で表現できなければ。オリジナルな運動の形を考えなければ。

「軍縮」は正しい。絶対、間違った考えじゃない。だけど「軍縮」が、正義面して前面に立ちただかるのはゴメンなのだ。軍縮のポスター作ろうと思いついた有馬君。ダブル選挙があるかもしれない。

やっぱり議員の数で政治を動かさなきゃ。軍縮路線の議員は減らなきゃ、困る。

金も組織もない学生グループ。働き手は二五〇人から一〇人と極端に変動する。それでもふみ切った。

売れるポスターを作ろう。売れなかったらオレがかぶる、といったのが有馬君、それで決まった。

西武や資生堂のポスターの横に貼ってもおかしくないポスターを作ろう。

ヘッドコピーを作るのに、みんなアイデア出し合って、考えて、考えて一

カ月。

ポスターがいいから買ってくれる、というのじゃなければいいやだった。つきあいカンパの形で金をもらうのは耐えられない。

五月の中旬、三千枚刷って、もう二千三百、売れた。

商品がよかったから売れたんだと思いたい。社会党、公明党、共産党、ほかの党、みんな媚びてる。正義を買って下さないと媚びてる。それだけはしたくない。

よいものを作ることが即、運動になる、それが大切なんだと思うのだ。

いまの若者たち、もちろん無力感はある。オレ一人がやったって、しょうがないヨというのがある。それよりサーフィンドモやってるほうがスタイルだ。

でも、一人一人がやりはじめたら、何かが変わる。変らないというのはまちがいないんだ。

有馬君は、そう言う。

談・まとめ 田中喜美子

写真 長野早紀子

対話のページ

「正確な理解」こそ必要

埼玉県北足立郡 会田智恵子

ずっと「書く」ことをやめていたのにいきなりで何ですが、一八二号「おしゃべり」の鈴木由美子さん、よくぞ言ってくれました。一八一号を、忙しさにかまけてPTA特集だけでしたことを悔いました。あわてて読んだのですが、堀川さんの精神的自立と経済的自立の表裏一体説は、私にも同調できます。ただ、空閑さんの考え方に「それじゃ、うちの子は必ず家庭内暴力になるっていうんですか？」と立腹していられながら「自閉症は專業主婦の子が多いんです」と断定なさる。

主婦論争は今始まったことではなく、一九五〇年代の石垣綾子さんのころからずっと言われ続け、第一次、第二次、第三次と十年毎に華やか(?)に続けて、今に至っているわ

けですが、何だか母親として一番のウィークポイントである子どもを引き合いにして、ケンカするようにとれるのです。

私の友人にも、一般に自閉症といわれる子を持つ人がいます。テレビだとか、育て方だとかいろいろ言われる中で、私は彼女の三人の子育てを目のあたりにして、絶対そんなことはない、と自信を持って言えるのです。「わいふ」を読んでいる読者に、自閉症という言葉、即うのみにしただけの理解を示して欲しいと思います。医学的な証明はまだはっきりしません。でも、私は彼女の生活をずっとみてきて、体験としていえるのです。

周囲のものに私はよくいうのです。

「育て方が悪くて自閉症になるなら、私の娘なんて一番先になっっているわ」って。

鈴木由美子さんの賢明さが、この一年という短い間にこういう文章を書かせたのでしょ



り正確な理解」をお願いしたいと思います。子育てという大変さをなめてきた同じ女として……。

個人では背負いきれない

老人問題

東京都江戸川区 西内 康子

わいふ一八二号屈くなり食るように読み終えました。とくに細野さんの「肉親の老いを見つめる」を読んで先日行政モニターに出席してこの文中に似た人がいたのを思い出しました。

自由発言での席上、三十代の独身男性でしたが、六十七歳の父親が一年前脳溢血で倒れ、ほとんど寝たきりになり入院、「夜中に大声を出すところがあるので他の患者の迷惑になる」との病院側の処置で個室に入れた。ベッドの差額料と付添婦への支払いとで、月四十万以上もかかり、貯金も底をつき、親類などから百万円借金して支払ってきたが、もう借りるアテもなく、サラ金にだけは手を出したくないし、いっそ父親を殺して自分も死にたいと思う日もある。

福祉事務所に相談したところ、低金利での区の小口融資を紹介されたが、それとも限界があり、借金はあくまでも返さねばならない。病院に、もうお金もないので家に引き取

りたい旨話したところ、院長は「それなら安い病院を」と紹介してくれた。ところが、これが、スレート屋根のすきま風が入り雨もりするようなひどいところで、とても病人を預けられるようなところでなく、かと言って現実に家にひき取れば働くことも出来ずこのままでは地獄で、結婚すら締めている。

母親はこれまた足も目も悪く病院通いの毎日で、家事すらやっとの状態で、この先どうしたら良いのか、私事ながら苦しい……と訴える男性の話を、一同水を打った如く静まり返って聞いていました。

私も夫の母と同居しているので寝たきり問題は他人事とは思えません。

勝気で憎たらしい口ばかりきいていても、それぐらいの元気をいつ迄も保ってほしい！とこのごろ切に思います。

医学の発達は時として死ぬべき人をも生かし続け、充分の蓄えのある人は別として、長年寝込む病人が出れば、家族全体が苦しみのドン底に落ちるのが分かっていても、今の法律や医学では延命効果のみに力を入れ、本当に疑問を感じます。

私の母も姑である祖母を十一年間も看とり、

当時母は五十六歳だと言うのに腰も曲り、共に寝たきりになってもおかしくなくくらい、憔悴した日々でした。しかし母は「長年の看護は言語に絶する苦しさだけれど、看護される側はもっと辛いはず」と言って頑張り通し、昔は嫁いびりで名をはせたさしもの祖母も、死の間際には自分の娘の手を押し払い、嫁である母の手をしっかり握って「かあちゃん、かあちゃん、ありがとう」と言って、十年前八十三歳で静かに息を引き取りました。

話は横道に逸れましたが、前述の男性の話を静かに聞いていた区長は「良く解りました。後で残して下さい。私達に出来る限りのことはして差し上げます」と約束して下さり私達も少しホッとしたのですが、このように公の場で発言出来る人や、文章にて訴えられる人達はまだ救われる場合もあるだろうが、発言する事も書く事も出来ず福祉の谷間で喘いでいる人達がどれ位いるだろうか……と考えたりもしました。寝たきり老人の問題はもはや他人事ではなく、明日の私達の姿かも知れないのです。高齢化社会が進む中「将来寝たきり老人にはなりません……」と誰一人として言い切れる人はいない、……と思います。

最近のわたし

神奈川県横須賀市 渡辺順子

雨の多い四月でした。それから亡くなられた方のなんと多かったこと、一日の尾崎一雄訃報よりスタート、三十日夕刊には八木秋子さんの訃報と、今月は続々という感じでした。私がそんな話をしていましたら、子供が「当り前だよ、死月だもの」なんて言い、なるほどなァと思いました。

まあ皆さん、八十歳を越されてでしたから仕方がないかもしれません。私たちも、とにかく元気で八十歳、九十歳まで頑張りましょう。

一八一号「わいふ」のPTA特集を読み、とうとうPTAの役員になりました。生れてはじめて。そして第一回会合（学年学級委員とかの）にて、早速いちゃもん付けて、必要最低の活動にしよう、子供のためにと言いがら、子供のためにやっているより、ごく一部のお金とヒマのある大人のお遊びではないか、もっとやることをへらして、本当に子供のためになることしよう、と主張、何処とか

見学、講演会なんて不要、不要と三回を一回にさせちゃいました。年三回発行の〃学級便り〃というのも読む人いないのにムダだと二回にへらさせました。少し風穴あけるつもりです。いろいろやればやるほど空しいのがPTAだそうです。

今年は町内の子供会の役員にもなり、今後大変です。がまあやれるだけやろうと思っていきます。町内のはうは何も改革が出来そうもありませんが、こちらをもっと活動を少なくと主張してはきました。予算があるから仕方がないので、何かをやるといふ具合で、いずれも実にくだらめことばかりです。

諸悪の根源はTVではないかと、この頃つ

くづく思っています。愚民政策の大多と。TVによって、みんな思考力、感性を失くされて、あれよあれよという間に、戦前のように一つの考えに結集させられていくのではないのでしょうか。

一八一号のエコーにて、読者を愚弄するのがSEXアンケートという野村さんの怒りが載りましたが、どうしてこんな風に怒るのかと私には不思議でした。こんなに個人差のあるもの、アンケート結果で何が判るか、とはたしかに思いますが、でも皆さんが真面目に解答すれば、とても面白い結果が表れて、大いに期待出来るアンケートと楽しみにしているのです。



そのうちずっこけた文 送ります

東京都日野市 春名 春美

前号（二八一号）の「校内暴力・教師のいぶん」は、むつかしい内容をとてもわかり易くまとめてあり、ひと息に読ませていただきました。長女が中二なのですが、三中でも最近校内暴力の芽生えがみられ、憂慮しているところです。四月十日号のクロワッサンを、偶然歯医者さんでパラパラめくっておりまして、「ミニコミ」の文字が目にとまり、「わいふ編集部」のお写真の中に原田さんの笑顔をみつけ、とてもなつかしい気持がいたしました。

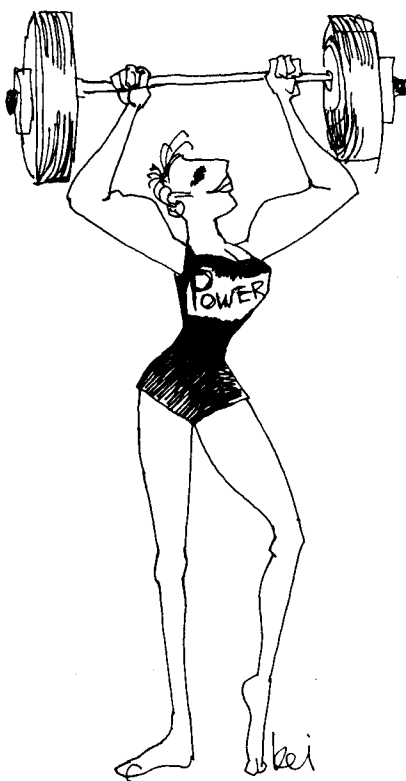
以前、広報委員の集まりのとき、原田さんのお話がとても魅力的で、楽しみに出かけたものでした。特に戦時中のお話で、疎開先の川原でB29に向かって石を投げたこととか、たったお湯のみ一ぱいほどのご飯を、三十分の食事時間を持たせるために、お箸でご飯粒を半分にしちぎりながら、わざとゆっくり口に運んだお話、避難訓練で、ひじを曲げて前へならえをしたこととか、なまの体験談は説得

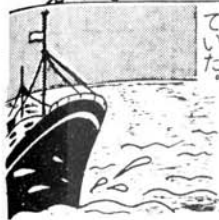
力がありました。

あのお話を文章にして「わいふ」に載せて下さればいいのに、と思っています。それこそ生きた昭和史ですもの。私も国民学校四年生るとき、旧満州で終戦を迎えました。戦争体験をせひ子孫に書き残しておきたいところごろ思うのですが、文章というのはやっぱりむつかしくて、果たして実現しますかどうか。そのような気持もあって、去年の十一月から、今年の三月まで五カ月間にわたって毎週金曜夜に、日野市主催のミニコミ教室が市の

中央公民館であり、文章の勉強もできると聞き、参加しました。（それでクロワッサンのミニコミの文字がバツと目に止まったのです）そこで、同封のミニコミ新聞を作りました。私の近況ご報告代りに入れさせていただきますので、おひまをみてご覧いただければ幸いです。

とりとめのないお便りを書きました。次号から大幅なイメージチェンジがございまして、か、期待しております。その内私もずっこけた文章を投稿させていただきますね。





昭和二十一年七月、
戦争の嵐が土産の機雷
が、とこうとこうに浮
かんた黄瀬を航行する
満州からの引揚船(戦
車輸送用のアメリカ軍
艦)のたぐい、広い船倉
は、ボロボロに破れさ
った引揚者たちがぎっ
しりと詰め、まれ、人
いきれと真気が充満し
ていた。

船員たちの大声がした
(ああ、あの赤いん
とどう一人は誰だろう

の周りを、船はボー
と汽笛を鳴らしなが
一周し、永遠の別れを

私はその時五年生だ
ったが、両親と三人の
姉妹と共に乗船してい
た。蒸し暑さと不快感
にたまらなく外の空
が吸いたくなって、正
体なく眠りこんだり力
なく坐りこんでいる人
々の間を跳ぎながら梯
子段までたどり着き、
大きな横舳れにふり落
とされ、なやにけるま
れ、上り始めた時、頭上
甲板で「今夜は二人だ
けかな」「そうだ」と
船員たちの大声がした
(ああ、あの赤いん
とどう一人は誰だろう

の周りを、船はボー
と汽笛を鳴らしなが
一周し、永遠の別れを

持って出た赤いビロー
ドのハンドバックを、
船の中で盗まされてしま
った時の口惜しかった
こと、約一週間の航海
の後、行手の水平線に
陸地(まさしく日本だ
った)が表れた時、
人々は疲れを忘れて甲
板に集まり互に真黒く

よにれた顔を見交して
涙を流し歓声をあげた
こと、次が次へと思
い出は尽きないが、何
にもましてあの時の死
者を送る物悲しい汽笛
の音は、三十七年の歳
月が過ぎて平和に暮ら
している今になっても、
折りにふれ私の胸の奥

が思い出され、核戦争
防衛力増強の活字に
戦慄し、引揚船の悲愴
な汽笛を無感動に聞き
流してしまふような、
人間本来の思慮力やた
いせつな心までも失わ
せてしまふ恐ろしい戦
争の悲劇を、私たちの
子孫には決して味わわ
せてはならないと考
える時今である。



見えたぞ日本

西親に「どう危いから
中にはいりなさい」と
注意されるまで甲板が
濡れて、

月二十四日午前七時二
十一分、インド洋
面に落下した。
今回も日本に落ちた

くてもよかったが、この
ままですまされる問題
ではないのだ。
ミニ・コミ教室から
の帰り道、頭上に冬の
星座が美しい。

有名なオリオンと、
仲よし兄弟のふたご座
と、シリウスとプロキ
オンといふ七つ星をば
らしていけれど、物騒な
人工の星は見たくない。

水葬の汽笛

毎晩聞いた

引揚船の思い出

はるな

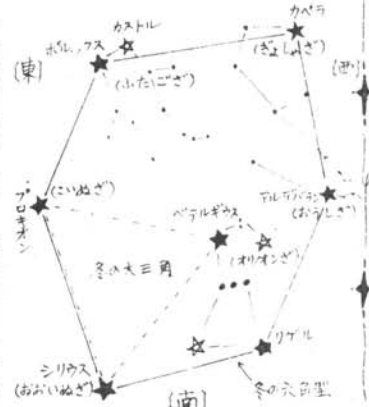
1983. 2. 4
第Ⅱ号
春名春美



放射能の流れ星



(冬の星座)

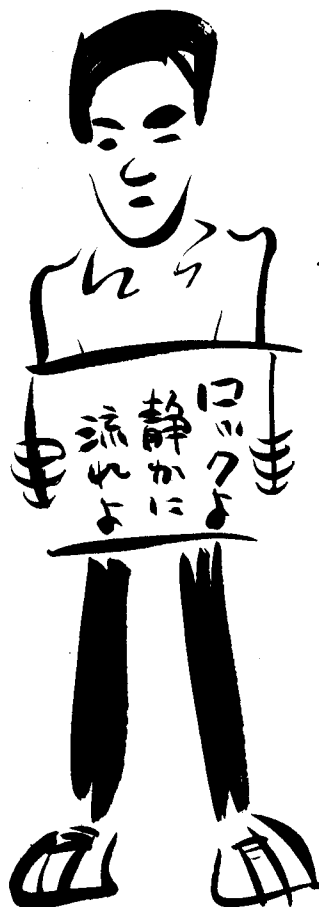


ソ連の原子炉横断軍
事衛星コスモス40
2号の本体部分が、故
障のため日本時間で一

くてもよかったが、この
ままですまされる問題
ではないのだ。
ミニ・コミ教室から
の帰り道、頭上に冬の
星座が美しい。

有名なオリオンと、
仲よし兄弟のふたご座
と、シリウスとプロキ
オンといふ七つ星をば
らしていけれど、物騒な
人工の星は見たくない。

泣きながら読みました。もうヤイコー



迷ってます

東京都港区 姫野真砂子

本屋さんで偶然「わいふ」と出会って以来一八〇号からの愛読者ですが、隔月の発売を楽しみに待っています。一八二号の特集「家においてできる仕事」は、大変興味深く読ませてくださいました。

私も御多分に漏れず、結婚と同時に退職して以来八年間、専業主婦をやっています。子供がもう少し大きくなったら何か仕事をした

い、と密かに思い続けてきましたが、特技も技術もない中年主婦の再就職の難しさを聞くにつけ、何とかしなければと通信教育で校正の勉強をしました。認定試験で二級に合格したのですが、仕事は自分で探さなければならぬとのことなのです。あいにくと、コネが全くないので新聞などで探してみましたが、自宅でできるような仕事はほとんどないのです。一社だけ自宅校正の募集がありました。が、実力不足のため、試験の結果、不合格となりました。

せっかく勉強したのに、使わないでいると忘れてしまうという不安を感じながら過ごしていたときに、「テープ・リライター」の通信教育の広告が目止まり、またまた受講する羽目になってしまいました。校正とテープ・リライター、どちらも「ことを勉強する」という点で、何か関連があるのではと思っし、何かやっているほうが安心でしたから……。テープ・リライターのほうは、講座を終了すると、試験に合格すれば、仕事をあっせんしてくれることになっていますが、今ようやく講座を終了したところで、まだまだこれからです。

私の場合、体の都合で入院を繰り返したり、子供が小さかったこともあり、家でできる仕事だと無理がかからないし、何よりも通勤時間や決められた勤務時間など、拘束時間が少ないことが最大の魅力だと考えていました。でも、狩野様の文章の中で、社会とつながっているという意識がまったくなく、仕事をとおして友達ができるわけでもないという指摘には、深く考えさせられてしまいました。本当にいい仕事なのかなと、題名のとおりがつきます。

新企画に期待します

東京都八王子市 小宅 昌枝

新企画、みんななるほどと思うものばかりです。なかでも「マスコミむしっちゃん」というのが気に入りました。パロディ、批判精神については前から興味を持っていましたが、ただひとつひっかかるのは、それを作品にし、発表する場所が、商業雑誌やテレビであるということです。ということは内容がマスコミに関するものだと取り上げてもらえないということになります。

こういう企画が組めるというのは、やはり誰も気にとめなかったミニコミの強味でしょう。何か気がきいていてスカッとするような投稿が期待できそうで、楽しみです。

○週刊誌、主観誌と時々聞きちがえ

○母子心中、亭主はナニをする人ぞ?

○レポーター、たのまぬことを代弁し

全く、新聞・雑誌・テレビは事実は伝えるが、真実は? です。死を賭けて戦場にとびこんだ、キャパのように、ジャーナリストといわれる人たちは、今、ナニを賭けて、

なんのためにとびまわっているのでしょうか。マスコミニケーション、集団伝達とでも訳せばいいのでしょうか。この影響力をあまりにも安易に考えすぎている発言が多すぎると思います。

大分前ですが、ある司会者が、医療機器の解説の中で、「あまり機械的なものが発達すると、人間のぬくもりや思いやりがなくなってしまうです」というようなことを言っていました。この時はたしか、寝たきりの人を移動させるための機械であったと思いますが、金属の手で運ばれるのはたしかに病人にとってはいい気持ちではないと思います。でも私の友人で老人医療にたずさわっている人がいますが、彼女は重い病人を運ぶ仕事のため、長い間腰痛に悩まされています。病人も人間ならば、看護する側も生身の人間であることをこの人は考えたことがあるのかと思いました。

たしかに人に接する時、思いやりや、やさしさは大切なことです。でも、「思いやり、やさしさ」といった言葉が、働きかける側にとってはどれほど重みになるか、ということを常に考えねばなりません。へたをすると、そ

ういう言葉で相手に犠牲を強いることもありうるからです。

いつも真実をみつめること、自分の中にある先入観と闘うことはすごくむづかしいことだと思ふけれど、せめてそういう姿勢は持ち続けたいものです。

活字のいかさまに気づいたのは、仕事で、編集という職を知ってからです。生原稿は人間の考えによるものという感じがしますが、それが活字になると不思議なもので、何となく絶対的なもののような気がするのです。はい話が、「今年の流行色は黒だ」と活字になると「なるほど黒か」という気になるのです。そこで、「まてよ」と考えることが、以前の私にはできませんでした。というより気付かなかったのです。

マスコミは自分自身の先入観に対する反面教師であるかも知れません。

大いにむしってもらいたいものです。



どうして敷居にのっぺは いけないの……!!

山梨県甲府市 柴 きく

滋賀県の猪田様、一八二号のおしゃべりの頁のご意見面白く拝見致しました。失礼ですが、お年はおいくつ位でいらっしゃいますか？私は大正生れですから、やっぱり同じことを言われて育ちました。ですから、おっしゃることには、ことごとく同感です。

でもこのごろの若い人たちに言うのと、「あら？ どうして敷居がお父さんの肩なの？ そんなのおかしいわ？」って言われます。最近の教育を受けた方は、物事を合理的に説明しないと納得してくれないのです。

私の母は古い時代の人にならず、リクツを言う人で、私どもを躰けるのにいつもきちんと、理由を言ってくれました。「なるほど、そういうことなのか」とうなずきながらきいていると、実行する気になるから不思議です。で、私の母親から言われたことと、私自身が考えたことをまぜ合せて言わせていただきます。

敷居をなぜお父さんの肩(私の田舎では頭)

というのか。家を背負って立っているのは父親である、という昔の家の制度と、土台・石の上ののっている実際の敷居とを、同一視していることから言うらしい。その上、子どもがあらわて通るとき、つまずいたりしてケガでもしては……という大人の配慮、敷居をよくみがいて戸のすべりをよくしているのだから、汚さないように……という気づかい、で言われるのではないでしょうか。

物をふんだり、長い物をまたがないようにということとは、畳の上の生活では大へん大事なことでした。今生活様式の変化でだいぶかわってきていると思いますが……。

本や新聞などふむことは、私どもの年配の者にとっては言語道断のことでした。よく考えると、文字を尊んだことから、ふむことで、すべったり、転んだりの危険のいましめでもあるようです。勿論ホーキのように長いものは、すでに畳の上になかせておくことからして間違っていると思います。私は子どもころ六人兄弟姉妹で育ち、「またいだのが悪い」と叱られると、「置いたほうが悪い」とケンカがおこるのが常で、母親に両方叱られたものでした。またぐことは、特に女子の立居



ふるまいという形の上の躰に重点があったようです。

こう考えてみると、理屈抜きの躰だけでなく、道理にかなったやり方でやるよう話し合ってみる必要がありますね。その上、今の住宅建築は、ドアが多く、敷居のない家も多くなりました。時代とともに立居ふるまいも変わってきます。お宅のお子様に泥をこすり落させないために、泥ふき用の玄関マットなども用意するなどいかがでしょう。ひとつ「生活様式の変化に伴う躰の変化」などと題して大論文でも一緒に考えてみませんか？

(元・松本圭以子)

観たり聴いたり

おいしいとは限らなくとも何でも食べてみよう
各種イベント・感動と失望の記録

東京裁判四時間大上映を

見て来ました

東京都世田谷区 和田好子

私は戦争知ってる（女学生だった）けど、どうして起ったんだか、誰がやったんだか、あのときはサッパリ分からなかった。たとえば昭和十五年、第二次近衛内閣のころ、すでに日中戦争が本格的になっ

てから三年め、前年の九月には欧州大戦まで始まっているのに、

私の記憶にある東京の街々は軍需景氣ににぎわい、有閑マダムが流行の、銀ギツネのストールをしてそぞろ歩き、私は銀座のエスキモーとか、リドとかいう高級レストランで、フルコースの食事をした覚えがある。翌年からは坂を転が

ったと思う。何だか皆いつても関心ないのね。戦争始まってでも平氣、食糧がなくなればヤミ買いに狂奔し、人が死ねばヤスクニ神社にまつてあきらめ、家が焼ければサッパリした。（ほんとによくそう言いましたよ）目先のことに右往左往するだけで、自分たちを誰がこんな目にあわしたノなんて、考える人は少数だったわね。だから東條首相とか荒木大将とか、おエライさんが捕まって裁判されたって、アア、敗れたから捕まって殺されるんだなア……くらいで、飢えない算段のほうが大事でしたよ。そりゃ人間は食べずには何も考えられないが、でもあの無関心は、必ずしも食糧難のせいじゃない。いつでも日本人はああなんで、今も変っていないです。そしてびっくりしちゃうのは、当の戦争責任者もやっぱり日本人で、ナルようにしかならんと思ってたのが、この映画で分かることね。たとえば

裁判の最初に罪状認否ということ

うね。

があって、有罪か無罪かを申し立てるんだけど、「一面において有罪ですが、しかし一面において無罪であります」なんて人があって、外人ばかりの裁判官をびっくりさせる。中国侵略の責任者は誰だ？

となると、「いろんなことで現地が戦争を始めてしまった」という。「しかしそれを命令・許可する立場にあったのはあなただろう」と突っ込まれると、「現地の判断は尊重しなければなりません」

結局日本のリーダーは、命令する人ではなくて、部下にヤル気を出させる人であり、部下がまちがい起すと、まんまと責任逃れをする人なんだと思う。今でも汚職事件があると、よく課長・係長がピルから飛び下りる。世間も「捕まるのは雑魚^{ザッポ}だけだ」なんて冷たい。だからもし連合軍によるあの裁判がなかったら、日本人は戦争の責任なんか、追及しなかったでしょう。

裁判官の中に一人インドの人がいて、戦争は法的には犯罪といえず、戦勝国が敗戦国のリーダーを責任者として裁くのはおかしい、とねばった。法的には正論だろうし、アノ戦争の責任が、アメリカにぜんぜんなかったとは言えないと思うし、中国を侵略し利権を取っていたのは西欧各国も同様、イヤむこうが本家本元だった。でも、もし日本人が戦争責任を不問に付して、東條氏がまた戦後大臣になつたりしたら、中国や東南アジアの国々は何て言ったでしょう。西の国々もたまげにない。ドイツも連合国に裁かれたけど、この戦犯を徹底追放したし、イタリアなんか大したもので、ムッソリーニの閣僚は国民の反戦抵抗組織が、自ら全部射ち殺してしま

い、連合軍による裁判がなかったほどだ。日本は戦犯が堂々復活して、あの裁判がなかったら、ま

たきつと、ナルようにナツちゃったでしょうね

東京裁判なかりせば、戦後の日本の国際信用はこんな回復しなかったと思う。

一億総無責任、これからも日本

「細雪」と「楳山節考」

神奈川県横須賀市 松本弘子

「細雪」を観て来ました。カメ ラ・ワークの美しさ!! 王朝絵巻を彷彿させる、華麗な場面一面に感嘆、久々に美しきものの教

三女に劣らず) が扮して競演、た

面を感嘆、久々に美しきものの教

ヒロイン四姉妹のうち、次女幸子

のモデルは、谷崎松子夫人、大谷

崎が、夢にみた憧憬の女性として

一目ぼれの当時は人妻。映画では、

その幸子に佐久間良子、長女に岸

恵子(少々気品に欠け、バタ臭い

感じてがっかり)、三女に吉永小

百合(まさに適役、美しさ抜群、

末娘に古手川祐子(若さと魅力で



を賞賛、たしか十数年前、ポーヴ
オワール女史と来日の際には、京
都鹿ヶ谷、法然院の谷崎の墓所へ
お参りされたと記憶しています。

わが船越町四丁目には、谷崎の末
弟が住んでいらっしやいます。兄
そっくりのその方に時々お目にか
かりますが、一言半句も言葉を交
わしたことはありません。

ついで、「細雪」とは対極の世界
にある映画「椿山節考」も観て来
ました。

これは、かつて日本人が、ごく
ごく一握りのお金持ちを除いては、
みんな食うや食わずの貧しい農民
であり、厳しい自然の掟に従い、
飢餓と戦い、かつかつに生きてい
た頃を再現した映画といえましょ
うか。村で、他家より子供の多い
一家が、ひそかに他家の農作物を
盗み貯蔵していたことがばれた時、
その家は村人たちによって、一家
取り潰しの刑に処せられます。村

の外に一家追放かなぐらいに考え
ていた私がびっくり仰天したのは、
一家が村人総勢により、あつとい
う間に生き埋められ、皆殺しにさ
れる場面、それほど厳しい条件の
下に生きねばならなかったのです。
再び、こういう厳しい時代を迎
えないとは、誰が断言できましょ
う。人間は自然の恵みによって生
かされている生物なのですから。

ああホロヴィッツさま

東京都小金井市 安藤悦子



らめをした。

その後、NHKで演奏模様が放
映されることを知り、大喜び。放
送当夜は、好きなチャネル奪取
が不成功に終わった亭主の、八十
にもなるモーロク爺さん（巨匠よ
許し給え）の演奏、どこがいの
の、なんていういやみを聞き流し
ながら、二時間近く、うっとり
と聴き入ったのであります。

数日後、有名な某音楽評論家の、
さしものホロヴィッツも、とこ
どころ音をはずして……なんてい
う評を聞いた途端、ああ、偶像も
落ちたりか、寄る年波にはやはり
勝てなかったのかと、こんどはが
っくり。

ホロヴィッツ氏の来日が決まっ
たとき、自称クラシック狂の私は、
若い子流に、ヘエ！ ウッソー！
ホント？ などと思わず叫んでし
まった。適うことなら是非聴きた
い！
しかし、A席五万円也に、ハタ
と考え込む。食費を少し削ろうか、
預金をおろそうかと、切符代の捻
出に、あれこれ思いを巡らしてい
たが、ふと、わいふ、編集部・
和田好子姉の、「日本人てのは、走
り出すと、みんないっせいに……」
の発言（わいふ、一八一号座談会
の中で）が脳裡をかすめ、そうだ、
そうだ、ここで日本人的志向の流
れに、ホイホイ乗ることもあるま
いと、少々無理なこじつけ的あき
こだわるようだけど、それにして



も、日本人にはお金持ちがいるんだなあ。学生の聴衆が結構いたよ。うだけど、親のお金で五万円払ったのなあ。

それと、私自身を含めて、やっぱり日本人てのは、権威に弱いん

だなあ。音はずしちやった演奏を聴いて、五万円損しちやったなんて声聞かれなかったもん。

無理して演奏会へ行ったら、いまごろ、我が家の家計、ホロビツちやうところだった！

(え・松本をきえ)

現代では好奇心は美德です

●ワープロ一日無料体験講座開催 「ワープロってなに？」

新しいものに挑戦してみたいとお思いの

“わいふの読者”のために実施します

8月22日 9月2日の2日間

A組 AM10時—11時30分

B組 PM1時—2時30分

C組 3時—4時30分

人数の関係上、必ず電話で時間を予約して下さい

千代田区九段北1-4-7 悠山九段ビル

9月5日
ワープロスクール開設
生徒募集中！

クリエート情報(株)

TEL 237-0828

サークル だより

渋谷サークル便り

渋谷サークル、五月もがんばって集まりました。

出席者は久々の幼児教室開設で

忙しい木村道子さん、英語

の勉強週五日の恒川美

代さん、ついに一步を

ふみ出して生命保険社で

活躍する高野貴子さん、自主グ

ループ活動に熱心な桜井幹子さん、

新メンバーの高橋宗子さん、それ

に渋谷サークルのオブザーバーで、

ライターとして躍進中の鈴木由美

子さん、末っ子が幼稚園に入り、

全員不在に心浮かれていますこの私

田中耐子の計七名プラス幼児四名

でした。

それにしても、以前は一人の大

人に付属品何名と子供の数の方が多かったのに、年月と共に子供も寄りつかなくなったものです。

さて中身の方は、五月十八日に編集会議に出られた鈴木さんから「わいふ」の編集方針が変更されることになり、一、投稿を短く多く、二、情報性豊かに、三、タテマエより本音を!! という方向づけが決ったというお話がありました。編集部が熱い願いである「売れる雑誌」へ向かって大幅な軌道修正というわけですね。

私はこのところの「わいふ」は編集部の意向があまりにも強く出ていて、まるでキャンベーンのようと思っています。

今回の編集会議も「社会性に目ざめた女の雑誌」っぽく変身をはかりたくて、「もう、じれったいナ、エイッ、ワカランチンはふりおとしてしまおう!!」と勇ましい方針が打ち出されるのでは? と思っていたので、まるで肩すか

しをくったよう。

前月の例会では口角泡をとばしていた連中も「結構デスネー」と急に羊のごとく口数が少なくなり、地味でも女に深くかわる問題をとり上げて欲しい」とか「生真面目路線を嫌うあまり、軽薄になてくれるな」といった注文が出ました。

その後高野女史の仕事の苦労話や朝日新聞で大きくとり上げられた「ハイスクール・レポート」が話題となり「わいふ、ようやった!!」と皆この本に関しては賞賛に次ぐ賞賛と相成りました。

まだ小学生の親が多いので続いて中学校の部も発行してもらいたいとの希望が出ました。

新生「わいふ」、おもしろくて、おかしくて、しみじみして、カリカリ怒れて、そして何かが残る……そんな本になって欲しいです。
(田中記)

情報 コーナー

●セミナー日程

奇数月の第3木曜日 AM10:00～PM6:00
(PM6:00～6:30 授業見学は自由)

I	高橋ますみ講演 AM10:00～12:00	<ul style="list-style-type: none"> ●女性のライフサイクルと生きがい ●学校教育といわゆる塾 ●塾を聞くうしろめたさの整理 ●家族や近隣の協力を得る方法。 ●生徒募集、PRの仕方、教え方の基本姿勢etc.
II	昼食と フリートーク AM12:00～PM1:00	●お互いに自分史を語り合ひましょう。
III	教育産業と 女性の地位 PM 1:00～ 2:00	<ul style="list-style-type: none"> ●チェーン化した教育産業で講師をしている方々の体験談 ●私たちが独自で教室を創り上げていく場合と、チェーンの傘下に入る場合のプラス・マイナスの検討。
IV	経理問題と 事務整理 PM 2:00～ 3:00	<ul style="list-style-type: none"> ●大の扶養家族であること、自立する場合のプラス・マイナス。 ●帳簿のつけ方と税金(テキストを用意してあります。) ●生徒の安全保障その他事務上の注意。
V	Fred 講師講演 PM3:00～4:00	<ul style="list-style-type: none"> ●学びを通して人の心を開く方法 ●日本人にとっての英語学習方法論。 ●英語発音の基礎訓練

※奇数月の第3木曜日 AM10:00～PM6:00
(PM6:00～6:30 授業見学は自由)

●女性の経済的自立へ 向けて塾の開き方 教えます

夫の転勤について転々としながら、近所の子どもたちに学習指導するという経験を二十年近く手ぐり重ねてきました。初期の生徒はOB講師として私を支えてくれるようになり、かつて私のとこ

ろで講師をしていた女性たちも結婚後、各地で教室を開きそれなりの成果をあげています。

私が試行錯誤で辿ってきました過程を公開して、志のある方のご参考になればと願っています。

〒459名古屋市緑区大高町伊賀殿
一〇七 電話〇五二一六二二一
四九二六 高橋 ますみ

●黙っていられる？

こういう名の文集を出しました。このまま黙っていたら、戦争へひきずりこまれてしまうかもしれない、そんなやむにやまれぬ気持ちからいろいろな人が書いた文章があつまっています。手にしてみたいかた、東京都品川区西大井四一十一三十一 本橋文子までお申込み下さい。頒価五〇〇円(送込み)です。(03七七二一八八九)

●運転の腕前を 貸して下さい

吉祥寺近辺にお住いで車をお持ちの方。週二回アルバイトとして花を運んで下さる方を探しています。条件はお目にかかって話し合ひで決めたと思っています。

TEL 0422-477-6390
高橋美智子

情報 コーナー

●野村路子さん
「くらしの風土記・埼玉」
出版！

「わいふ」で毎号「わたしの同棲相手」を担当の野村路子さんが、このたび、力作を出版されました。

名もなく、しかし、し

たたかに土着して

生きてきた人

々の語りと、

彼女の人

生を交

錯させ

る中で歴

史を証言し、

ふるさとを再

構築しようとする

ものです。

かや書房刊で、定価千五百円、七月十二日より全国書店で発売されています。お近くの書店、または直接かや書房にご注文の上お買い求め、ぜひご一読下さい。

かや書房〒101東京都千代田区猿樂

町一三六六平舎ビル
3F

●宝石ときものに興味
のある方!!

このいづれかに関心のある方、アシスタントになっていただけませんか。

私、子連れにてこの仕事をしてい
ますが、ミニ展示会を開いてくれ
る家庭や事業所をさがしています。
来年の成人用の振袖も多種用意し
てありますので。

信用ある明治二十三年創業のところ
です。都内のみに限らせていた
だきます。お礼はいたします。

ミニ展示会を開かせてくれそうな
所を紹介して下さるだけでも結構
です。

Tel 〇三六〇三三八三八〇 松村

●すぺーす・えいがさい
オープン

女性監督が作った映画を上映して

いく活動をつづけている私たちは
新宿の近くの便利なところに、三
十人程入れるスペースをオープン
しました。

女たちが使いたいとき、みたいと
き、自由に使えるスペースです。

音楽以外の企画・講座・ミーティ
ングに、どんな企画を持ち込ん
で、このスペースを生かして下さ
い。

●定期映画会スケジュール

〇八月二十七日(土)・二十八日
(日)

「絶対あきらめなさるな」アメリ
カ(一九七五年)

「オレンジ」アメリカ

「貝殻と僧侶」フランス(一九二
七年)

「ねこの描き方」

〇九月二十四日(土)・二十五日
(日)

日本の女性作家シリーズ(第一回)
芦沢あき子作品「さよならまで」

「アップル」「駅まで」他

「芦沢さんと語る」を予定してい
ます。

●「ドイツの青ざめた母」を見た
い会」を結成しました。そしてこ
の映画を見たいという声を編集す
るために「見たい券」を発行しま
す。

交 通 案 内

◎初台(京王新線)下車徒歩10分

◎参宮橋(小田急)下車徒歩10分

バス◎(1)新宿(京王デパート前)新宿車庫行

西参道下車1分

(2)渋谷(東急プラザ前)新宿西口行

代々木3丁目下車2分

情報 コーナー

往復ハガキで「ドイツの青ざめた母」を見たい」と投書して下さい。金の方では復ハガキに「見たい券」を印刷し返送します。この券は上映公開のあかつきに、前売り券として使用できるように会の方で交渉したいと思います。

是非この運動にご協力下さい。

連絡先
私たち
の映画実
行委員会

東京都渋谷区

代々木四―二八―

五東都レジデンス四―

○号

Tel 03―三七〇―六〇〇七

(月―金夜七時―九時、

土・日午後二時―六時に

ご連絡下さい)

●誰にでもできる 仕事です

仕事はしたいけど、小さい子がい
て…、縛られるのはイヤ…、キャ
リアもないし…、なんて、心のカ
ビを気にしながらも動き出してい
ないみなさん、「わいふ」一七五
号のこの欄で紹介されたような洗
剤を、お友達にお分けする仕事を
やってみませんか。

誰にでもでき、やる気のある方は
無限大に収入を増せる可能性を秘
めた夢のあるビジネスです。ノル
マも在庫強要もなく、自分の意志
で動く経営者で、しかも人間関係
がふくらんでゆく楽しい仕事です。
人間が好きな方、自由にやりたい
方、仕事に情熱を燃やす方…、
ひやかし半分にでもお電話下さい。
(平日は日中)

Tel 〇四七―一七三―一四七一

川嶋三穂子



●山梨の麦草農場 から便りします！

私たちは、農薬、除草剤、化学肥
料をつかわないで、お米や野菜を
つくっています。一つの作物をつ
くるのではなく、百姓、百種をつ
くりたいと思っています。

食べ物を自給して、だれもが生か
される場をつくりたいという夢を
もっているのです。

私たちの農場は、みんなが利用で
きる場でありたいと思い、そのた
めに、多くの人たちの知恵と力を
集めたいと思っています。

八月の計画は次のとおりです。

日時 八月六日(土)―八日(月)

イベント 映画会、キャンプファ

ィヤー、花火大会、きも

だめし、カブト虫とり

この農場に親と子が集まり、時間
にしばられず、気軽に働き遊ぶ時
をすごします。独身の方も歓迎。

連絡先 山本幸男・法子

山梨県北巨摩郡高根町村

山西割二一三七

Tel 〇五五一四―七―三五

〇四

編集だより

●もう、まったくの闇ナベ方式ノ 食べてみなけりゃ何が出てくるか分からない、一八三号からの《わいふ》は大変身をとげました。鍋料理のよさは皆が仲良くなれること、そして好きなものを好きなだけ食べられることです。鍋料理を食べるようにお読み下さい。

●それにしても、今まで沈黙していた読者がわっと投稿してくれて、これはうれしかったです。やっぱり今までの《わいふ》は、よそ行きだったんだなあ……これからホッネのぶつかり合う、楽しい雑誌に脱皮できそう。

●ところで《わいふ》発足以来の珍事を持ちあげました。テーマ原稿の応募一篇もなし。そういうわけで「隣人があなたを訴える」、テーマを中心に企画を立てるのは中止。

《わいふ》はみんなで作る雑誌ですので、反響のないものは読者の興味のないものと考えます。ほんとは興味あったんだけど、誰かが書いてくれるだろう、と待っていた方、それではダメなんだということ、分かってくださいね。

●前号でお知らせした「声の投稿」、ほとんどお電話がかかってきません。月水金午前中編集部につめて担当の者がお待ちしていたのですが、これでは意味なしと、この企画もきれいさっぱり諦めることにします。これこそ電話かけたいノという話をお持ちの方はどうぞいつでもお電話下さい。

●投稿コラムの中、少なかったのが「マン・ウオッチング」(やっと一篇、だけど大作だったんで大ニコニコ)、「われこそ市民」(ちょっとマジすぎたんですよー、一篇もこず)「ナウイ熟年」

というわけで、反響をにらみ合わせながら投稿規定をまたまた手直ししましたので、四ページの投稿規定をよくよく読んで下さい。

●購読中止のおハガキ下さった山梨県東山梨郡牧岡町室伏二六四ノ一のかた、お名前を至急おしらせください。(名前が書いてなかったのです) 地域別名簿がまだ完備していませんので、住所から名前が辿れませんので、

●一八一号九一ページ下段「勧め人で」「すすんで」の誤りでした。訂正しておわびいたします。

●ではご投稿をよろしくノ

購読申込は

ハガキが電話でどうぞ。
すぐ本に振替用紙をそえてお送りします
で、折返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとまりますと送料が半額以下になります。

WIFE

183号

1983年8月1日発行
印刷・浩文社印刷

定価 450円

(年間購読料送料共3600円)

発行所・関グループわいふ

編集・わいふ編集部

東京都新宿区加賀町2-4 162

TEL (03) 260-4771

郵便振替 東京5-110430

銀行口座三菱銀行神楽坂支店

普通預金 052-4348909

購読中止は……

かならずお申出ください。送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れてもひき続き送本しています。お申出がないと、お送りしてしまうので、ぜひハガキが電話を。

私たちの仕事を手伝って下さいませんか

女性ばかりで、事務代行や電子組版機による自費出版などの仕事をしています。

文字組版は、活版印刷を主流として、主に男性職人によって発達してきましたが、時代の趨勢によるオフセット印刷の台頭で、組版機が盛んに使用されるようになりました。特に一昨年あたりからは、指先で簡単に操作できるマイコン搭載の“エレタイパーLAM 80R”など最高級機の登場で、明るく清潔なオフィスで女性中心の仕事に変わりつつあります。

私たちは、組版技術に限らず、原稿整理・校正・編集など、本ができるまでのプロセスにかかわっていきます。1カ月位で組版技術がおぼえられ、また、原稿執筆や編集に興味のある方にとっては、創作意欲の満足感につながると思います。

同時に、事務代行部門でも、企業の女性締め出しを逆手にとって、女性ならではの職域拡張を積極的に進めます。

結婚・出産で一旦社会から離れると、仕事をしたい、自己を生かしたいという意欲はあっても、能力を生かせる職場はなかなかありません。そんな女性のために職場を提供し、まず電子組版の技術を習得して、ともに成長していきたいと思います。

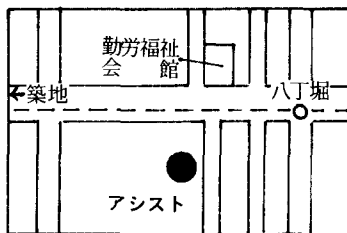
★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

- ※ 編集・原稿執筆などに興味があり、パーソナリティ志向の方
- ※ 年齢は35歳位まで（将来職種が増えてからは不問）
- ※ 勤務時間は相談の上（但し1日3時間以上）
- ※ 通勤時間 40分以内
- ※ 募集人員 若干名
- ※ 幼児連れで勤務をご希望の方はご相談ください。



アシスト

〒104 東京都中央区入船1丁目6-3
朝日八丁堀マンション209号
電話 03 (551) 2249



♣ ちなみに、このパンフの組版は、始めて10日目の初心者が行いました。

●女性史関係資料《復刻版》 好評発売中！

平塚らいてう・伊藤野枝ほか 解説 井手文子

青
水
館

一九二一～一九二六年
総五二冊・別冊一
揃定価 十二万円
(分割払可)

○当初女性のみの文芸雑誌として創刊された本誌は、近代的自我の探求を深めるにつれ、「新しい女」と擲論されながらも、家族制度等女性を抑圧するものすべてに強烈な批判を投げかけ、女性解放史の起点となった。

○推薦 澤地久枝／瀬戸内晴美／中山和子 他

婦女新聞

福島四郎 編
一九〇〇～四二年
定価 十五万円
(明治期)

○43年間婦人の立場から論ずることに徹したジャーナリズム

女性史研究の基礎資料 解題 村上信彦

○推薦 一番ヶ瀬康子／児玉勝子／永原和子／羽仁説子／原ひろ子／福島杉夫／松尾尊允／丸岡秀子／村上信彦

不二出版

東京都文京区本郷三二六六
☎〇三(八二二)四四三三

○内容見本呈

●フランスの妊娠中絶自由化の感動的レポートであり、すべての女性へのメッセージ

女性が
自由を
選ぶとき

ジゼール・アリミ 著
福井美津子 訳

判 頁 装
四 二 六
二 二 六
フランス
定価1200円



本書の目次

- 第一章 幼年時代
- 第二章 ショワジュール
- 第三章 ポビニ裁判
- 第四章 法律
- 第五章 妊娠中絶とセックス
- 第六章 グルノーブル
- 第七章 アリバイ
- 第八章 女性解放闘争の力学

田中正造とその時代 VOL.3

特集 女性史と足尾銅毒問題

書店販売中

定価九五〇円



青山館

発売元 JCA出版
03(292)0401

文京区本郷1-20-7 安藤ビル2F
〒113 ☎ 03 (813) 7431



有 斐 閣

〒101 東京都千代田区神田神保町2丁目17番地

有斐閣選書

女性法律家

三淵嘉子ほか著

■拡大する新時代の活動分野

●女性の職業として四〇年の歴史をもつ裁判官、検事、弁護士の仕事を通じて、さまざまな法分野で活躍している十三人の女性法律家が、裁判等を通じて関わった多様な人間ドラマを、自分史を含めて率直に語ります。

定価一五〇〇円



法女性学のすすめ

■女性からの法律への問いかけ

金城清子著
東京家政大学教授

四六判二二二頁
定価一三〇〇円

日本国憲法が男女の平等を保障して既に35年、法制度の面での平等はどこまで実現したか。著者は、家族・教育・雇用・社会保障・犯罪の各領域ごとにその法制度を再検討し、性による差別の構造に法学的にアプローチしました。

- (主要目次)
- 第1章 男女平等とは
 - 第2章 男女平等論の系譜
 - 第3章 国際連合と男女平等
 - 第4章 家族と男女平等
 - 第5章 教育と男女平等
 - 第6章 雇用と男女平等
 - 第7章 社会保障と男女平等
 - 第8章 犯罪と男女平等

妻の地位と離婚法

島津一郎著

定価八〇〇円

●妻の権利の実質的検討 戦後の家族法の変遷をふまえて、結婚・離婚に対する内外の新しい考え方にふれながら、若い女性のために多角的に論じました。

変わりゆく婦人労働

高橋久子編

定価一七〇〇円

●若年短期未婚型から中高年既婚型へ いまや全雇用労働者の三分の一を占めるに至った婦人労働はこの二〇年間にどう変貌したか。実態を実証的に解明。

女子労働論

竹中恵美子編

定価一七〇〇円

●「機会の平等」から「結果の平等」へ 女子労働の歴史と現実を分析しつつ現代の性差別を告発し、「機会の平等」から「結果の平等」への条件を追求する。

女性とリーダーシップ

稲毛教子著

7月刊

予価一二〇〇円

●従属から自立へ 男女共生の時代 これからの女性性は、企業という組織の中でいかに自己のキャリアを形成したらよいか。女性の統治の問題点を探る。

国籍法における男女平等

池原幸雄監修 二宮正人著

予価五〇〇〇円

●比較法的な考察 現在審議中の国籍法全面改正作業の中心部分である。男女平等の問題を比較法の視点から取り扱った。